Freud

die

Zukunft

einer

Illusion

Freud

精神分析入門

幻想の未來

木村讓治
內藤好文 訳

フロイド
精神分析大系
12

アルス刊

609-26

目次

幻想の未來……一
素人分析の問題……七九
序言……八一
自傳……一八五

幻想の未來

一

長い間一定の文化の中に生活し、又屢々その文化の起源や發達の道程を究めようと努めて來た者には、時に又眼を他の方向に轉じて、この文化の前方には如何なる運命が横たはつてゐるか、この文化は今後如何なる變化を受くべく定められてゐるかと云ふ疑問も起して見たくなる。だがさういふ考究は、始めから多くの要因によつてその價値が低められると言ふことがすぐに分かるであらう。先づ何よりも、人間活動をその全般に亙つて概觀し得る人が極く僅かしかないと言ふことによつて。即ち多くの人々にとつては個々の或は僅かの範圍に制限されることが必然な事となつてゐるが、過去及び現在のことについて僅かしか知らなければ知らない程、將來のことについては尙更不正確な判斷しか下せない筈だからである。更に又、この判斷に際して個々人の主觀的期待がちよつと見積り難い役割を努めるといふことの爲に。所でこの主觀的期待といふのは、個々人の經驗とか、氣質、成功不成功等によつて規定されてゐるやうな、人生に對する希望多き或は少き態度とか、さういふ純個人的要因に依存してゐるのである。最後に、人間は一般に現在を、その内容を評價することが出來ないで、謂は

ばナイーヴに體驗するといふ奇妙な事實が影響を與へる。將來のことに對する判斷の手懸りを現在に得ようとするには、人は先づ現在から離れねばならない、即ち現在が過去にならなければならないのである。

それ故、我々の文化の將來に對する豫想を發表し度いと言ふ慾望に從ふ者は、凡ゆる豫言には附きものの不確かさと共に、前述の諸點も十分考慮に入れて置くべきであらう。だから私はあまりに大きな問題からは急いで逃れて、これまでも私が注意を向けてゐた一小範圍に――尤もそれの全體に於ける位置を確定した後に――就かうと思ふのである。

人間の文化は――私は人間生活がその點で動物的條件を脱した、又その點で禽獸の生活と區別される所の總てのものを意味するのであるが、そして、文化と文明とを區別することには私は反對であるが――人の知る通り觀察者に二つの方面を示す。即ち、一方に於てはそれは、人間が自然の力を征服し、その財寶を贏ち得て人間の要求を滿足させんがために獲得した凡ゆる知識と能力とを包含し、他方に於ては人間相互の關係、殊に所有し得る財寶の分配を規定する爲に必要な總ての制度を包含する。文化のこの兩方面はお互ひに無關係ではない。何故なら第一に人間相互の關係は現存する財寶が可能ならしめる慾望滿足の度合によつて深く影響されるものであるからであり、第二に一個人が他の個人

の勞働力を使用するとか、他の個人を性的對象とするとかいふ場合にあつては、後者が前者に對して財寶の關係に立ち得るからであり、而して第三に各個人は、人間一般には利益であるはずの文化の、隱れたる敵であるからである。奇妙なことではあるが、孤立しては殆ど存在し得ない人間でありながら、共同生活を可能ならしめる爲に文化が彼等に要求する犧牲を彼等人間は重荷と感ずるのである。文化はそれ故個々人に對して守られねばならない。制度や法律はこの任務に當るのである。それ等は一定の財寶の分配を行ふことのみならず、それを維持することをも目的とするのである。實にそれ等は人間の敵意ある發動に對して、自然の征服と財寶の產出とに役立つ凡ゆるものを守らねばならないのである。人間の創造物はたやすく破壞される。そしてそれ等を造り上げた學問技術も亦それ等の破壞に使用される。

そこで人々は、文化とは權力及び强制手段を獲得し得た少數者によつて、反抗する多數者に負はされたる戒物であると云ふ印象を受ける。この難點は文化そのものの本質にあるのではなく、今日までに發達して來た文化の形式の不完全によるものであると言ふことは勿論理解するに難くない。實際かかる缺陷を指摘することは困難ではない。人類は自然の征服に於ては絕えざる進步をなし、さらにこれ以上の進步も豫期することが出來るのに反して、人事の制定に於ては同樣の進步が確かとは言へな

いし、何時の時代に於ても、今日の時代もやはり同樣だが、多數の人々が、一體かかる文化の狀態が守護に値するのだらうかと云ふ疑問を抱いてゐたのである。人々が內心の爭ひによつて煩はされることなく財寶の獲得とそれの享樂に身を任せ得る樣に、强制と慾望抑制とを廢棄して、文化に就ての不滿の源を涸らすやうな、人間關係の新規定が可能でなければならない、と人は考へるかも知れない。さうなつたら黃金時代であらう。併し果してさう言ふ狀態が實現されるかどうかは疑問である。寧ろ總ての文化は强制と禁慾との上に築かれなければならないやうに思はれる。强制を止めても人間個人の大多數が新しい人生の財寶の獲得に必要な勞働を、自ら進んでなすであらうとは決して考へられない。凡ゆる人間には破壞的、卽ち反社會的、反文化的傾向があり、而もこれは多くの人々に於ては人間社會に於ける彼等の態度を定めるに十分な程强いものであると言ふ事實を考へに入れなければならないと私は思ふ。

この心理學的事實が、人間文化の批判に對する決定的意義を持つべきである。もし人が先づ、文化の本質は人生の財寶を獲得する爲の自然の征服であり、それを脅す危險は、人間の間に於ける財寶の適切な分配によつて除かれると考へることが出來たとすれば、今や重點は物質を去つて精神のうへに移つたかに思はれる。人間に負はされる慾望犧牲の重荷を輕減し、當然取り除けられないものに對し

ては人間を和解せしめ、そしてそれを償ふことが出來るかどうか、又どの程度まで出來るかと言ふことが決定的な問題である。文化勞働への强制と同樣、少數者による大衆の支配も、亦缺く譯に行かない。何故なら大衆は懶惰で無定見で、禁慾を好まず、その避く可からざる事を論證によつては說得することが出來ず、その個人はお互ひにその放縱を放任して顧みないからである。ただ彼等がその指導者と認める模範的な個人の影響によつてのみ、彼等は文化の存立がそれにかかつてゐる所の勞働と禁慾とに誘はれるのである。もしこれらの指導者が、人生の必然に對する優れた洞察力を有する人々であり、又自己の慾望を克服することに成功した人々であるならば、何も言ふことはない。が、彼等には、自己の勢力を失はざらんが爲、民衆が彼等に從ふよりもより多く彼等が民衆に從ふと言ふ危險が存在する。そこで權力の制定によつて彼等が民衆と無關係であることが必要であるやうに思はれる。これを要するに、二つの廣く行き亙つてゐる人間の性質に責任があるのである。卽ち文化的制度はただ或程度の强制によつてのみ維持され得る、卽ち人間は自發的には勞働を好まないと云ふことと、論證は彼等の慾情に向つては無力であると言ふことである。

この議論を人は次の如く反駁するだらうと云ふことを私は知つてゐる。人は言ふだらう、此所に述べられたやうな、文化勞働への强制の缺くべからざることを示す民衆の性質は、それ自身、人間を害

しめ、復讐心を起させ、手の付けられないものにする間違つた文化制度の結果に外ならないのだ。愛情深く、思考を尊重するやうに教育され、早くから文化の恩惠を經驗した新しき時代の人々は、文化に對して又別な關係を持つだらう。それを彼等自身の所有と感ずるだらう。そしてそれの維持に必要な勞働と慾望滿足の犧牲とを捧げることも厭はぬであらう。彼等は强制を必要としないだらうから、指導者達と殆ど異らぬであらう。かかる性質の民衆が今まで如何なる文化のなかにもなかつたと言ふのは、如何なる文化も未だ嘗て人間をさういふ風に、而も子供の時から、感化して行くやうな制度を設けなかつたからである、と。

一般的に、或は旣に今日、我々の自然征服の現在の狀態に於て、さう言ふ文化的制度を作ることが可能であるかどうかが疑はれる。來るべき時代の人々の敎育者として働くべき多くの優れたる、惑はされることなき、非利己的な指導者達は一體何處から來るのだらうと云ふ疑問が起る。この計畫が遂行されるまでは避けることが出來ないであらう所の恐るべき强制の濫用に驚かされる。この計畫の偉大さ、その人間文化の將來に對する重要さに關しては、異議を唱へることは出來ないであらう。それは確かに、人間は種々樣々の慾望の萠芽を有して居り、それに對して少年時代の經驗が旣に確定的な方向を指示するものであると言ふ心理學的見解に基いてゐる。從つて人間の敎育可能性の限度が、か

から文化改正の効果にも限界を置く譯である。所で、新しい文化環境が、人事の處理をあんなにも困難ならしめる民衆の二つの性質を、果して、又如何なる程度に於て、解決するかと言ふことが疑はれるのである。實驗は未だ行はれてゐない。恐らく人類の幾パーセントかは——病的な素質又は過大な慾望の强さの結果——常に非社會的に留まるであらう。が、もし文化に敵意を持つ今日の多數者を、少數者にまで引き下げることが出來れば、それだけ非常に多くを、恐らく達し得るすべてを達したのである。

こんな事を言つて、私は私の檢討の豫定の道から遠く迷ひ出て了つたと思はれては困る。それで私ははつきりと言つて置くが、今ヨーロッパとアジアの間にある大國で行はれてゐる大いなる文化の實驗を批判しようなどと言ふ心算は毛頭ない。私はその實行の可能性について斷定したり、適用された方法の可否を檢べたり、計畫と實行との間の避け難い間隙の廣さを測つたりする専門の知識も能力も持ち合はしてゐない。彼處で行はれてゐることはまだ未完成のことであるから、我々の永く固定した文化が材料を提供する所の觀察とは緣がない。

二

我々は圖らずも經濟學の範圍から心理學の範圍へ滑り込んだ。最初我々は文化の所有を現存する財寶とその分配に關する制度とに求めようと試みたのであつた。所が凡ゆる文化は勞働强制と禁慾との上に其礎を置いて居り、從つてかかる要求を課せられたるものの反抗を惹き起すのは避けられないことだと言ふことが分かつたので、財寶そのものや、その獲得の手段や、その分配の制度は、文化の本質的なるもの若しくは唯一なるものではあり得ないと言ふことが明かになつて來た。何故なら、それらのものは文化關與者の叛逆及び破壞慾に脅かされてゐるからである。財寶の外に今や、文化を擁護するに役立つ手段、即ち人間を文化と和解せしめ、その犧牲を償ふことの出來るやうな强制手段其他が現れて來る。而してこれらは文化の精神的財産として記述することが出來る。

一樣な言ひ表し方をするために、慾望が滿足させられ得ない事實を拒絕、この拒絕を確定する制度を禁止、この禁止の引き起す狀態を缺乏と名づけることにしよう。さうすると次になすべきことは、すべての人に加へられる缺乏と、すべての人にではなく單に或團體、或階級、或は或個人だけに加へ

られる缺乏とを區別することである。前者は最古のものである。それを定める禁止を以て、文化は、幾千年だか知らない以前に、動物的原始狀態からの離脫を始めたのである。意外なことには、それは今なほ働いてゐるのである。今なほ文化に對する敵意の核をなしてゐるのである。それの下に苦しむ慾望は、各々の子供と共に新たに產れるのである。かかる拒絕に對して旣に非社會性を以て反應する人間の種屬、卽ち神經症患者がある。さう言ふ慾望とは近親相姦、食人、殺人慾等である。總ての人間が排斥することに一致してゐるやうに見えるこれらのものを、他の、我々の文化に於て許容するか拒絕するかに就て盛に論議されつつあるやうな慾望と一緖にするのは可笑しいやうだが、しかし心理學的には正當なのである。又これら最古の慾望に對する文化の態度も決して一樣ではない。ただ食人だけは總ての人に禁じられて居り、精神分析的でない觀察には、全然用のないもののやうに思はれるが、近親相姦慾の勞力はなほ禁止の陰に感じられるし、殺人に至つては、一定の條件の許に於ては、我々の文化によつて行はれ、否命じられさへもするのである。恐らく將來文化が發達すると、なほ他の、今日は全く可能な慾望滿足も、食人が今日さうであるやうに承認し難きものに思はれるやうになるであらう。

この最古の禁慾に於て旣に、其他總てのものにも重要である所の心理學的要因が問題になる。人間

の精神は最古の時代以來發達することなく、學問技術の進步に反して今日なほ歴史の始まりに於けると同樣であると言ふ考へは正しくない。かかる精神的進步の一つを我々は此處に示すことが出來る。それが漸次内面化されるのは我等の發達の進路を示すものである。各〻の子供は我々にさういふ變化の過程を見せて與れる。この變化によつて道德的になり社會的になるのである。この超我の强大化こそ最も價値ある心理的文化財產である。それをなし遂げた人は文化反對者から文化支持者になる。一つの文化圈内に於てさう言ふ人々の數が多ければ多い程、その文化は愈〻安全であり、外部的强制手段の無用になる時も益〻早く來る譯である。所でこの内面化の度合は個々の慾望禁止に對して甚だまちまちである。前述の最古の文化要求に對しては、神經症患者の望ましからざる例外を別とすれば、内面化は十分に達せられてゐると見ていい。所が他の慾望に對する要求について見ると、さうはいかない。人間の過半數はそれに關する文化の禁止に、外部的强制の壓迫の下に於てのみ、卽ちただ强制が働いてゐる處、それが恐れられてゐる間だけ服從するのだと言ふことを、驚きと疑惧の念を以て認めねばならない。このことはまた、總ての人に同樣に定められてゐるかの所謂道德的文化要求にも當てはまる。人間が道德的に信頼出來ないことを經驗させられるのは大抵この爲である。殺人や近親相姦

には怖氣を振ふ文化人の實に多くのものが、食慾や征服慾や性慾の滿足は平氣で行つて居り、自分が罰せられさへしなければ他人を虚僞や欺瞞や誹謗で傷けることを止めないのである。そして恐らくこれは永い文化時代中常にかうであつたのであらう。

社會の一定の階級のみに關する拘束に於ては、明白な、そして又決して誤認されることのない事情に遭遇する。即ちこの虐待された階級が優待されたものの特權を妬み、自分達の缺乏の過剩から免れる爲に凡ゆることをするであらうと言ふことが豫想される。それが出來ない時には、この文化の内部には或程度の不滿が持續的に支配してゐて、それは危險な反逆を、引き起さないとも限らないのである。所で或文化が、或數の關與者の滿足は他の恐らく大多數の者の壓迫を豫定するといふ域を脱してゐないとすると、そして現在の總ての文化はさうなのだが、さうするとこれらの被壓迫者が、自分達の勞働によつて造り上げ、而もその財寶の分け前は餘りにも僅かしか得ない所の文化に對して、激しい敵意を起すのは當然のことである。文化禁止の内面化は、それ故、被壓迫者に於て豫期することは出來ない。彼等は寧ろこの禁止を認めようとしない。文化そのものを破壞し、場合によつてはその前提を揚棄しようと努める。この階級の文化敵視は非常に顯著で、その爲よりよき分け前を得てゐる社會層の寧ろ潛在的な敵意が看過されてゐた程である。かく多數の關與者を不滿にして置き、そして反

逆に驅る文化は、繼續する見込もなければ、その價値もないと云ふことは言をまたない。

文化規定の內面化の程度――通俗的に非心理學的に言へば、關與者の道德的水準――が文化の評價に對して問題となる唯一の精神的財寶ではない。その外に理想及び藝術作品に於ける財產、卽ちこの二つから得られる滿足がある。

文化の理想、卽ち最も高尙で一番努力せねばならない行爲は何であるかと云ふ價値判斷を、その精神的財產の中へ加へることには誰も不服を言ふ者はないであらう。ちよつと考へるとこの理想が文化圈內の行爲を決定するやうに思はれる。が、實際の成行は、或文化の內的資質と外的事情との協力を可能ならしめる最初の行爲に從つて理想が形作られ、この最初の行爲が理想によつて續行にまで固定されるのである。理想が文化關與者に與へる滿足は、それ故、己惚（Narzissmus）的性質のものである。卽ち旣に成功した行爲に對する自負に基いてゐる。それを十分ならしめるためには、他の行爲に沒頭して他の理想を作り上げた他の文化と比較して見ることが必要である。この相違によつて各々の文化は他の文化を低く評價する權利があると思ふのである。かう言ふ譯で文化理想は、國民と國民との間に於て最も顯著であるやうな、異つた文化圈の間の不和、敵對の機緣となるのである。

文化理想から生ずる己惚的滿足は、文化圈內に於ける文化敵視をうまく阻止し得てゐる所の權力に

對してもある。この文化の恩惠を味はつてゐる被優待階級のみならず、被壓迫階級も亦それに與かり得るのである。と言ふのは、局外者を輕蔑することが出來ると云ふ特權が、彼等に對して彼等自身の社會に於ける損害を償ふからである。憐れな、負債と兵役に苦しめらるるプレベイエル（古代ローマの平民）ではあつても、その代りローマ人であり、他の國民を支配し、彼等の守るべき法律を定める任務に關與してゐるのである。この被壓迫階級の彼等を支配し搾取する階級との同一視は、しかし、より大なる連鎖の一部分に過ぎない。他面に於て前者は後者と感情的に結び付き、敵意にも拘らず彼等の支配者の内に彼等の理想を認め得るのである。もしもこのやうな根本に於て滿足的な關係がなかつたならば、あんなに多くの文化が大なる民衆の當然なる敵意にも拘らずかくも永い間續いた譯が分らなくなる。

藝術が或文化圈の關與者に與へる——尤もこれは激しい勞働を負はされ、個性的敎育を受けたことのない大衆には通常理解されないが——滿足は又別種のものである。藝術は、我々が昔から敎へられてゐるやうに、最も古い、そして今なほ最も深く心にこたへてゐる禁慾の爲の代償滿足を提供し、從つて文化の爲に捧げられた犧牲に對して何物よりも和解的に働く。他面に於て又その創作は、共同に經驗される高尙な情操をおこさせることによつて、凡ゆる文化圈に甚だ必要な同一化感情を高める。

それから特別な文化の行爲を描寫し、その理想を印象深く再現する時は、又己惚（ナルチスムス）的滿足の役を務める。

文化の精神的財産中恐らく最も重要なものがまだ述べられてゐない。それは最も廣い意味での宗教的觀念であり、別の、後に說明する言葉で言へば、幻想（Illusion）である。

三

宗教的觀念の特別な價値は何處にあるか？

我々は文化のおよぼす壓迫から生ずる文化憎惡、文化の要求する禁慾について既に述べた。假に文化の禁止が取り除かれたと想像すると、人は自分の氣に入つた女を誰でも性的對象として選んでいい譯だし、戀敵や其他邪魔になるものは容赦なくぶち殺していい譯だし、他人の如何なる財寶でも許しを得ずに奪ふことが出來る譯である。何と素晴しい、滿足の連續に人生はなることだらう！ 所がすぐに困難が生じて來る。他人も皆私と全く同樣な望みを持つて居り、私が彼等を取り扱ふのと同樣に容赦なく私を取り扱ふであらう。そこで結局たつた一人の人が、そのやうな文化制限の揚棄によつて無制限に幸福になれるだけである。卽ち暴君、凡ゆる權力を獨占してゐる獨裁者である。然して彼も亦、他人が少くとも『汝殺すべからず』と言ふこの一つの文化戒律は守ることを望む十分の理由を持つてゐる。

だが、一體文化の揚棄に努めるなんて、何と骨折甲斐のない、何と淺慮なことだらう！ 後に殘る

のは自然狀態であり、この自然狀態の方が遙かに耐へ難いものなのである。成程自然は我々に慾望制限を要求しないだらう。我々を意のままに任して置くであらう。それは確かである。だが彼女は我々を拘束する特別に有効な方法を持つてゐる。卽ち彼女は、冷酷、殘忍、無情と思はれるやり方で、場合によつては丁度我々の滿足に際して、我々を屠つて了ふ。自然が我々を威嚇するこの危險の爲にこそ我々は共同し、就中我々の共同生活を可能ならしめる所の文化を作つたのである。我々を自然に對して保護すると言ふのが、實に文化の主要な任務であり、その存在理由である。

現在既に文化がその事を多くの點に於てかなりになし遂げて居り、將來は確かに更によくなるであらうと言ふことは明かである。だが今日既に自然が征服されてゐると信ずる迷妄に身を委ねる人間はない。又自然がいつかは全然人間に征服されて了ふだらうと考へる人も稀である。そこには凡ゆる人間の强制を嘲笑するが如き四大がある。地は震ひ、毀ち、凡ゆる人間的の物、人間の造つたものを埋めてしまふ。水は氾濫し、溺れしめる。嵐は吹き飛ばす。そこには又、他の生物の襲擊であることが近來漸く分つた所の疾病がある。最後にいたましき死の謎がある。これに對しては未だ終に何等の藥草も發見されず、今後と雖も恐らく發見されないであらう。これらの威力を以て自然は我々に對抗する。豪然と、冷然と、厳然と。そして我々が文化作業によつて其處から逃れようと思つた所の無力と

頼りなさとを、再び我々の眼前につきつける。人類が文化破壊の天災に直面して、内部の困難や敵意を忘れ、ひたすら自然の威力に對する保持と言ふ大なる共同の任務を考へるのは、人が人類から有し得る僅かな頼もしい印象の一つである。

人類全體に取つてと同様に、個々人に取つても人の世は住みにくい。彼の關與してゐる文化が彼にそくばくの缺乏を負はせる。他の人間が、それは文化の規定に反してであらうと或はこの文化の不完全の結果であらうと、彼に幾らかの惱みを與へる。その上に、征服されざる自然——彼は之を運命と名付ける——が更に損害を添へるのである。絶えざる不安な氣懸りの狀態と自然的なナルチスムスをひどく害されることとが、かかる狀態の結果でなければならない。個々人が文化及び他人から受ける損害に對して如何に反應するかと言ふことは我々は既に知つてゐる。卽ち彼はそれ相當の分量の、この文化の制度に對する反抗、文化敵視を示すのである、所で彼は、彼及び他の總ての人々を威嚇する所の自然の、運命の暴威に對しては如何に抵抗するか?

この仕事は文化が引き受けてくれる。文化は總ての人々の爲に同様にこの事を行つてくれる。この點に於ては殆ど總ての文化が同一のことをなすのも注目に値する。文化は決して、人間を自然に對して守ると言ふ任務の完成に於て停止しない。更に別な手段を以てそれを續けて行く。任務は此處では

多樣である。即ち、ひどく脅かされた人間の自己感情は慰安を渇望する。世界、人生からは恐怖が取り除かれなければならない。更に又人間の知識慾は、それは勿論最も强い實際的利益に刺戟されたものではあるが、解答を欲する。

先づ第一の處置で大いに得る所があつた。それは自然を人に擬することである。非人格的な力や運命には近づき難い。それらは永遠に赤の他人である。だが、四大の中にも自己の心中に於けると同樣に情熱が跳つてゐるとすれば、死でさへも自發的なものではなく、或惡い意志の、暴行であるとすれば、人は自然の中に於ても到る處、自己の社會に於て見知つてゐるやうな生物に取りまかれてゐるとすれば、さうすれば人は先づほつとして、不氣味な中にも親しみを覺え、無意味な不安を精神的に改作することが出來るのである。これではまだ防備が足りないかも知れない。が、最早全然無力ではない。少くとも反應することが出來る。いや、恐らく防備が足りなくはない。人はこの暴威を揮ふ外部の超人に向つて、自分の社會に於て用ひるのと同じ手段を適用することが出來る。即ち哀求したり、宥めすかしたり、買收したりして見ることが出來、かかる行爲によつてその威力の一部分を我が手に奪ふのである。心理によつてのかかる自然科學の代償は、即座の安心を作るのみならず、又境遇のより以上の克服への道を示すものである。

といふのは、この境遇は別に新しいものではなく、幼年時代に模型を有して居り、本來以前のものの繼續に過ぎないからである。何故なら、かかる無力を人は旣に嘗て小兒として兩親に對して經驗してゐるのである。兩親殊に父親は怖かつたが、しかし又その頃知つてゐた危險に對しては彼の保護に信賴してゐられた。そこで、この三つの境遇を同一化しようと言ふのは尤もなことであつた。そこへ又、夢の生活に於ての如く、願望が手傳つた。死の豫感が睡眠者を襲ひ、彼を墓場へ連れて行かうとする。ところが夢の作用はこの恐しい出來事さへ願望成就になるやうな條件を選び出すことを知つてゐる。卽ち夢者は、自分の考古學的興味の滿足を喜びつつ、古のエトルリアの墓場へ下つて行つた自分を見るのである。同樣に、人間は自然力を單に自分と同じ者のやうにして交はることの出來る人間にはしないのである。それでは自然力から得る壓倒的な印象に對してもふさはしくないだらう。で、單なる人間にはしないで、自然力に父の性質を與へるのである。神にするのである。そして、幻時の模型のみならず、私が指示することに努めた樣に、系統發生的模型にも從ふのである。

時がたつに從ひ、自然現象の規則性、法則性に關する最初の觀察がなされ、從つて自然力はその人間的外貌を失ふ。けれども人間の無力はなほ存し、それと共に父への憧憬も神にもなほ存する。神々はやはり、自然の脅威を封じ、運命の、殊にそれが死に於て現れるやうな、殘酷を和らげ、人間が文

化的共同生活によつて負はされる惱みや缺乏を償ふと言ふ三重の任務を持つてゐる。

だが徐々にこの役目の內部に於て重點が移動する。自然現象は內部的必然性に從つて自ら生起するものであることに人は氣付く。成程神々は自然の主であり、自然をかくの如くしつらへたのであり、それを己が意のままにすることが出來るには違ひない。が、ほんの時々、いはゆる奇蹟を以てその運行に干涉するだけである。恰も原始の勢力範圍から何物をも放棄したのではないと云ふことを確めんがための如くに。運命の配分に關しては、人類の當惑、無力が救濟され得ないと言ふ不安が取り去られない。此處では神々が先頭第一にペシャンコになる。もし神々自身が運命を作るのであるならば、その神意は全く測り知ることが出來ないと言はねばならない。天分高き古代の國民には、モイラ（運命の女神）が神々の上にあり、神々も亦その運命を持つと言ふ考へが浮んだのである。然して自然が獨立し、神々が自然から退けば退く程、益々熱心に總ての期待は、神々に割り當てられてゐる第三の役目に押寄せ、卽ち益々道德的方面が神々の固有の領分になる。神の任務は今や、文化の缺陷と害惡とを補ひ、人間が共同生活に於てお互ひに加へる苦惱を顧慮し、人間の中々遵守しない文化規定の實行を監視することになる。文化規定そのものに神的起原が與へられ、それは人間社會から引き上げられて自然及び宇宙現象の上にまで擴げられる。

かくして、人間の無力を救ふ要求から生れ、自己の及び人類の小兒時代の無力に對する回想の材料を以て作り上げられた觀念の寶物が出來上がる。この財寶が人間を二つの方面に於て、卽ち自然と運命との危險及び人間社會そのものから來る損害に對して、保護してゐると言ふことは明かに認められる。卽ち相關聯してかう言ふことになる、——この世に於ける生活は或より高き目的に奉仕するものであり、その目的は成程容易に推測はし難いが、しかし兎に角人間本性の完成を意味してゐるものである。恐らく、時の經過と共に徐々に、抵抗しつつも、人間の肉體から分離した精神的なもの、靈魂が、この昇級、昇格の對象であらう。この世に起る總てのことは我々のうへに位する叡智の計畫の遂行であり、この叡智は追求し難い廻り路はするが結局總てものを善、卽ち我々に好都合なものへ向はせるのである。我々は總ての上に慈悲深い、ただ外見上嚴格な神意が働いてゐて、我々が强暴な自然力の手玉になることを防いでゐるのである。死でさへも決して絶滅ではなく、無機無生物への復歸ではなくして、より高き發展の途上にある、新しい種類の生存の始まりである。然して他方を振り返れば、我々の文化が提出したその同じ道德法律がやはり凡ゆるこの世の事象を支配してゐる。ただそれは較べものにならない程より大なる權力と徹底性とを有する最高審判官によつて守られてゐるのである。凡ゆる善は遂にその賞を得、凡ゆる惡はその罰を得る。たとひ人生のこの形式に於てでなくと

も、死後に始まる後の生存に於て。かくて人生の凡ゆる恐怖、苦惱、殘酷は絕滅されるやうに豫定されてゐるのである。スペクトルの見えない部分が見える部分に附加されてゐるやうに、我々の此世の生命を繼續する所の死後の生命が、此世では多分、遂げられなかつた凡ゆる完成を遂げるのである。然してこの終局を招致する全知と、その中に現れてゐる大慈と、それを貫く正義と、これが我々をもこの全世界をも創造した神々の本性である。或は寧ろ我等の文化が前代の凡ゆる神々を凝縮して作つた一つの神の本性である。最初かかる神の本性の統一に成功した國民は、この進步に少からず誇りを感じた。彼等は以前から、總ての神の姿の後に隱れてゐた父性の核心を引き出したのである。これは根本に於ては神の思想の歷史的原始への復歸であつた。で、神は唯一なるものであつたので、彼に對する關係は父に對する子供の間柄の親密と情愛とを再び取り返すことが出來た。これだけのことを父に對してしたとすれば、父から報いられてもいい譯であつた。少くとも唯一の愛兒、選ばれたる民になつてもいい譯であつた。ずつと後になつて敬虔なるアメリカは「God's own Country」(神の國)であると主張してゐるが、これも人間が神性を尊敬する形式の一つに適つてゐる。

以上總括した宗敎的觀念は勿論永い發展を經、種々な文化によつて種々な相に於て保持されて來たのである。私は、恐らく我々今日の白人のキリスト敎文化に於ける最後の形態に相應する所の、ただ

一つのかかる發展を拔き出したのである。その全體の凡ゆる部分が、皆よくお互ひに一致はしないし、凡ゆる緊急の問題が解答されもしないし、日々の經驗の矛盾もやつとのことで避け得るに過ぎないと言ふことはすぐに氣が付く。が、それにも拘らず觀念――もつとも廣い意味に於ける宗敎的觀念――は、文化の最も高價な財寶として尊重され、文化がその關與者に提供すべき最も價値あるものとして、地中からその寶を掘り出したり、人類に食料を供給したり、その疾病を豫防したり等々する術よりも遙かに高く評價されてゐる。人々は、この觀念に、それが要求する價値を與へないならば、人生は耐へ得られないと考へてゐる。所で問題は、心理學の光に照らされたるこの觀念は何物であるか、その尊重は何に由來するかと言ふことであり、なほおづおづと附け加へれば、その眞の價値は何ぞやと言ふことである。

四

獨自のやうに何の邪魔もなく進んで行く檢討は、全く危險なしと言はれない。人は兎角、それを妨げさうな思想をわきへ推しやつて了ふ誘惑に陷り易い。そしてその代りに不確實の感情を持ち來り、終にそれを非常に強い斷定を以て蔽ひ隱さうとする。それ故私は、私の論述を疑惑を以て追求する一人の反對者を假定し、時々彼に發言させることにしよう。

私は彼がかう言ふのを聞く。「文化がこの宗教的觀念を作り、文化がそれをその關與者の自由に任せたと言ふ意味をあなたは繰返し言はれるが、それは少し可笑しいやうだ。私にも何故だかわからないが、兎に角、文化が勞働所得の分配とか、女や子供に對する權利とかについて規約を作ることのやうに當然には聞えない。」

だが私はかう言ふ風に言ふのは間違つてゐないと思ふ。私が指示するに努めたやうに、宗教的觀念は他の凡ゆる文化の成果と同樣の要求、即ち自然の壓倒的威力に對して自己を守る必要から生れたものである。そこへ更に第二の動機、即ち痛ましくも感知された文化の不完全を修正する渴望が加はつ

たのである。文化が個々人にこの觀念を與へるのだと言つても亦甚だよく當つてゐる。何故なら個々人は眼前にそれを見出し、それは完成された形で彼に提供されてゐるからである。彼は獨力でそれを發見することは出來ないであらう。それは彼が繼承し、九々の表や幾何學や等々のやうに引き繼ぐ所の、多くの世代の遺產である。勿論そこには差別があるが、その差別は外の處にもあつて、今の處まだ仔細に吟味する譯に行かない。あなたの言はれる可笑しいと言ふ氣持には、此宗教的觀念の財產を神の啓示だといふ風に言ひならはしてゐることが與かつてゐるのかも知れない。だがそれは既に宗教體系の一部分であつて、我々の知つてゐるこの思想の歷史的發展とその色々な時代や文化に於ける相違とを等閑に附してゐる。

『もつと重要だと思はれる他の點がある。あなたは自然の人格化を、その恐るべき威力に對する人間の當惑、無力を無くし、その威力と關係を附け、遂にはそれに影響を與へようと言ふ欲求から發生せしめられる。だがそんな動機は餘計な事のやうに思はれる。原始人は選擇を知らない。思考の他の道を知らない。彼が自分の本質を世界に投影し、彼の觀察する凡ゆる現象を根本に於て彼自身と同樣なものの表現と見るのは、彼に取つて自然的であり、謂はば先天的である。これが彼の認識の唯一の方法なのである。そしてそのやうに彼の自然的素質にまかせることによつて、彼の大なる欲求の一つを

滿足させることが出來たとしたら、それは決して當然なことではなく、寧ろ不思議な合一である。』

私はそれをそんなに珍しいこととは思はない。一體あなたは、人間の思考は何等實用的動機を知らず、ただ非利己的な知識慾の表現に過ぎないと考へられるか？　所が中々さうではないらしい。寧ろ私は、人間は自然力を人格化するにあたつても幼時の模型に從ふと信ずる。彼は最初の周圍の人達に於て、彼が彼等に對して何等かの關係を作れば、それが卽ち彼等に影響を與へる道であることを學んだ。そこで彼は後には同樣の目的で、彼に出喰はす他の凡ゆるものを、以前の人達の如く取り扱ふのである。それ故私はあなたの記述に反對はしない。人間が後に支配する爲に理解しようとする——物質的征服の準備としての精神的征服——總てのものを人格化するのは確かに自然的である。だが私はこの人間思考の特質に動機と起原とを與へるのである。

『ではもう一つ。あなたは以前「トーテムとタブー」と言ふ書物に於て宗敎の起原を論ぜられたことがある。だが其處では樣子が違つてゐた。總てのものは息子と父の關係であり、神は高められた父であり、父への憧憬が宗敎的欲求の根源であつた。その後あなたは人間の弱小無力と言ふ要因を發見されたらしい。そしてそれに大體宗敎形成の最大の役目が負はされるのである。そしてあなたは今や、以前父錯綜（Vaterkomplex）であつたものを總て無力に書き變へられる。この變化について御敎示

頂き度いものである。」

よろしい。その要求を待つてゐた。果してそれが變化であるならばだ『トーテムとタブー』に於ては、宗教の發生ではなく、單にトーテミズムの發生について説明すればよかつたのである。あなたはあなたに知られてゐる見地の内のどれかによつて、守護神が人間に現れた最初の形は動物の形であつたこと、この動物を殺したり食うたりすることの禁制が生じ、而も年に一度共同でそれを殺して食ふ儀式が生じたことを説明できますか？　この通りのことがトーテミズムにはあるのである。然してトーテミズムを宗教と稱すべきかどうかについて論議することは殆ど無用である。トーテミズムは後の神の宗教と深い關係があり、トーテム獸は神々の聖獸となるのである。そして最初の、しかし最も根本的な道德的制限——殺人と近親相姦の禁止——は、トーテミズムの基礎の上に生ずるのである。さてあなたが『トーテムとタブー』の結論を受け入れようと受け容れまいとそれは兎も角、あの書物に於ては多くの非常に珍奇なばらばらの事實が、一つの緊密な全體に總括されてゐると言ふことはあなたも承認されることと思ふ。

何故に獸神では終に滿足されず、人神がこれに代つたかと言ふことは『トーテムとタブー』に於ては殆ど觸れてゐない。宗教形成の他の問題は其處では一般に言及されてゐない。あなたはかかる制限

を否認と同一視されるのであるか？　私の研究は、宗敎問題の解決に精神分析的觀察が下され得る部分の嚴密な隔離のよい例である。今私が他の、さほど深く隱されてゐないものを附け加へようとしたからと言つて、あなたは、前には偏頗を責めた如く今度は私に向つて矛盾を責めるべきではない。前に述べたことと今提示したこととの間の、卽ちより深い動機づけと明白な動機づけとの間の、卽ち父錯綜と人間の無力で保護を要することとの間の繫がりを示すのは勿論私の務めである。

この繫がりを見出すのは困難ではない。それは小兒の無力の、その繼續である大人の無力に對する關係であるが故に、豫想した通り、宗敎形成の精神分析的動機づけはその明白な動機づけに對する幼時の補助となるのである。我々は小兒の精神生活へ這入り込んで見よう。あなたは精神分析で言ふ所の、倚輊型による對象選擇（Objektwahl nach dem Anlehnungstypus）と言ふことを憶えて居られるであらう。リビドーはナルチスムス的欲求の道を辿り、その滿足を保證する對象に執着する。それで飢餓を滿足させてくれる母親が最初の愛の對象になる。そして確かに又、總ての漠然たる、外界に於て威嚇してゐる危害に對する最初の守護――恐怖守護といつてもいい――になるのである。

この役目に於ては母親はやがてより强い父親によつて換へられ、それは全小兒時代中父親に留まるのである。父親に對する關係はしかし特殊な二價性に取り付かれてゐる。父親自身が、恐らく母親に

對する以前の關係以來、一つの危險である。それで人は彼を敬慕し彼に敬服すると同樣に彼を恐れる。この父との關係の一價性のしるしは、『トーテムとタブー』に於ても論じてあるやうに、凡ゆる宗教に深い痕迹を殘してゐる。さて、成人して行く人間が、いつまでも小兒に留まるべく定められてゐることに、卽ち外部の威力に對する守護が依然として存在することに氣がつくと、彼はこの守護に父親の特性を賦與する。卽ち彼は、彼が恐れ、自分の味方に引き入れんと努め、而も自分の守護を託する所の神々を作るのである。そこで父への憧憬の動機は、人間の無力の結果に對する守護の欲求と同一である。小兒の無力の守護が、大人の是認しなければならない無力に對する反應に、つまり宗教形成に、その特性を賦與するのである。しかし神の觀念の發達についてこれ以上究めるのは我々の意圖でない。我々は此處では、文化が個々人に與へるやうな、宗教觀念の出來上がつた寶を問題にすればいいのである。

五

検討を續けることにしよう。――さて、宗教觀念の心理學的意義は何であるか？　それは何に分類することが出來るか？　その問題の解答は先づ決して容易ではない。色々な定まり文句を退けた後、人はこの一つに留まるであらう、――それは、人が自ら發見したのではない或事を傳へ、人がそれに信仰を捧げることを要求する所の、外界の（或は內界の）實在の事實や狀態に關する敎義、宣言である。それは人生に於て我々に最も重要な、最も我々の心を惹く事柄に關する敎示を與へるので、特に尊重される。それについて何も知らないものは非常に無知であり、それを己が知識の中に納めた人は自分を甚だ豐かと思つていいのである。

この世の中の種々雜多な事物に關しても勿論多くのかかる敎義が存在する。學校の課業は悉くそれで充滿してゐる。假りに地理を選んで見よう。其處ではかう言ふ風に言はれる、――コンスタンツはボーデンゼー湖畔にあり。學生の歌が附け加へる、――嘘と思へば行つて見ろ。私は偶然其處へ行つたことがあるから、この美しい都會は、周圍の住民が皆ボーデンゼーと呼んでゐる所の大きな湖の岸

にあることを保證することが出來る。私は今又實際この地理學の主張の正しいことを十分に確信してゐる。なほ私は他の、甚だ奇妙な經驗を思ひ出す。私が初めてアテネのアクロポリスの丘の上に、神殿の廢墟の間に、青い海を見下して立つたのは既に成人してからであつた。私の幸福感の中にはかういふ意味を暗示した驚きの感情が混つてゐた、——ははあ、ほんたうに此れは學校で習つた通りだ！今日私がこんなに驚くとは。あの頃は何といふ淺い、頼りない信頼を、聞いた事物の現實的眞實性に對して有してゐたことだらう！　だが私はこの經驗の意義をあまり强調しようとは思はない。私の驚きに對してはなほ他の說明が可能である。それはあの時は私に思ひ付かなかつたが、全然主感的性質のもので、場所の特殊性に關聯してゐるのである。

かくして總てのかかる教養はその內容に對する信頼を要求する。が、その要求には正當な理由がない譯ではない。それは、觀察とそれから勿論推理にも基礎を置く所のより永い思考課程の短縮された結論として現れてゐる。その結果を受け入れる代りに、自らこの課程を經驗して見ようと言ふ考へのある者には、その道を示して呉れる。教養が、地理學の主張の場合の樣に自明でない時には、その教養の傳へる知識が何處から來るかと言ふことが、又、常に附加される。例へば地球が球狀をなしてゐる。その證明としてフーコーの振子試驗、水平線の有樣、地球が一周できること等が擧げられる。關

係者は誰も認めるやうに、總ての學校生徒を世界一周に送り出すことは出来ない相談なので、人は學校で敎へることをそのまま「信用」させることで滿足してゐる。が、個人的確信への道は開かれてゐることを人は知つてゐる。

宗敎の敎義を同一の尺度で測つて見よう。その信仰を要求する基礎は、何處にあるかと訊ねて見ると、妙に調和しない三つの答を得る。第一には、旣に我々の祖先がそれを信じてゐたのであるからそれは信仰に價する。第二には、卽ちこの前時代から傳へられた實證を我々は持つてゐる、そして第三には、一般にこの證明を求めることは禁ぜられてゐるといふのである、この大膽な企は昔は、非常に峻嚴に罰せられたし、今日と雖もなほ社會は人がそれを繰返すことを好まない。

この第三の點が最も我々の疑念を喚び起さない譯には行かない。かかる禁止は、社會が宗敎の敎義の爲に主張する要求の不確性を十分よく知つてゐるといふ證據にしかならない。もしさうでなかつたなら社會は必ず、自ら確信を掘り度いと思ふ者には誰にでも、喜んでその材料を提供するであらう。それ故我々は容易に靜める譯にいかない疑惑の念を以て、他の二つの論據の吟味に向はう。我々の祖先が信じたから我々も信じなければならないといふ。だがこの我々の祖先なるものは我々より遙かに無知で、今日我々の到底受け入れることの出来ないやうな事を信じてゐたのである。宗敎の敎義も亦

さういふ種類のものであるかも知れないといふ可能性が生ずる。彼等が我々に殘した實證は、それ自身不可信性の凡ゆる特徵を有してゐる所の經典に納められてゐる。これはまた矛盾だらけで、訂正されたり改竄されたりもしてゐる。事實の證明を報告する所でさへも證明されてゐない。その言葉が、或は又その內容だけにしろ、神の啓示に由來する物だと主張して見た處で、それは何にもならない。何故ならこの主張そのものが既に、その信ずべきかどうかが檢討されねばならない敎義の一部分だからである。如何なる命題も自分自らを證明することは出來ない。

そこで我々は、我々にとつて最大の意義のありさうな、我々の爲に宇宙の謎を解き、人生の苦惱を和げる役目が割り當てられてゐる所の、我々の文化財產のこの告示が、最も弱い證明を有してゐると言ふ妙な結果に到達するのである。鯨は卵生でなくて胎生であると言ふやうな、我々に取つてどうでもいい事實は、それが、よりよく證明され得るのでなかつたならば、我々は信ずる氣になれないだらう。

この事情はそれ自身として非常に奇妙な心理的の問題である。それから又宗敎の敎義の證明できないことに關する上述の事柄が何か新しいことを含んでゐると思つてはいけない。これは何時の時代にも、かかる遺產を遺した祖先によつても亦確かに、感知されてゐたのである。恐らく彼等の內の多く

のものは我々と同樣の疑を懷いてゐたのである。だが、それを敢て口にするには餘りに强い壓迫が彼等の上に加はつてゐたのである。そして今まで無數の人間が、信ずる義務があると思つてゐたので無理に抑壓しようとしたこの同じ疑惑に苦しめられ、多くの優秀な智者がこの爭鬪に破れ、多くの人物が逃げ路として求めた妥協に失敗したのである。

宗敎的敎義の信ずるに足ることを證する證明が總て過去に由來するとすると、もつと批判の進んだ現代がかかる證明を提供することは出來ないだらうかと顧みるのは當然なことである。もしもかやうな宗敎體系のほんの一部分でも疑惑から遠ざけることが出來たとしたら、それによつて全體の可信性が非常に高まるであらう。此處に、個人靈魂の不滅を確信し、宗敎敎義のこの一敎條を疑ふことの出來ないやうに實證しようとする神靈論者の働きが現れる。が、殘念ながら、彼等の亡靈の出現や陳述は、彼自身の精神作用であると言ふことが彼等には反駁できないのである。彼等は偉人や大思想家の亡靈を呼び出してゐる。然るにそれらから得た陳述や報告といへば、亡靈が、それは呼び出した人間の世界に順應する能力以外には何物も信じられない程、馬鹿げた、絕望的に下らないことのみであつた。

さて我々は、問題から逃れようとする痙攣的努力といつた印象を與へる二つの試みについて述べね

ばならない。一つは高歴的で古いものであり、他は詭辯的で近代的なものである。前者は靈父（敎義創定者）の『不合理なるが故に我信ず』（Credo quia bsurdum）である。これは、宗敎の敎義は理性から引き離されたものであり、理性の上に立つものであるといふ意味を言ひ現さうとしたものである。即ち宗敎の敎義の眞理は内面的に感じなければならないので理解するには及ばないのである。しかしこの『我信ず』は信仰告白として面白いだけであつて、威令としては强制力がない。私は凡ゆる不合理を信ずる義務があるといふのだらうか？　もしないとすれば、何故、とくにこの不合理だけか？　理性以上の審判官はない。宗敎の眞理が、その眞理を證明する内容經驗に依存するとすれば、かかる稀有の經驗を持たない多くの人間はどうするのか？　凡ゆる人間に彼が有する天賦の理性を用ひることを要求することは出來る。が、極めて僅かな者に於てのみ存する動機の上に、普遍的な義務を作り上げることは出來ない。一人の人が、彼を深く感動せしめた恍惚狀態から、宗敎敎義の現實的眞理に對する牢乎たる確信を得たとしても、それが他の人にとつて何の意味があらう？

第二の試みは『かのやうな』（Als ob）の哲學のそれである。その說く所によると、我々の思考作用の中には、その根據なきこと、否其不合理な事さへ我々がよく知つてゐる所の假定が澤山にある。それ等は綸空事と名付けられる。だが樣々の實際的動機から、我は『恰も』これらの綸空事を信ずる

かの如く振舞はねばならないであらう。このことが宗教教義に、その人間社會の維持に對する無類の重要性の爲に、當て嵌めらるべきである。（註）

（註）他の哲學者にも無關係ではない所の見解を、『かのやうな』の哲學者に代表させても、私は誤つてゐないと思ふ。H. aihinger, Die Philosophie des Als ob Siebente und achte Auflage 1922 參照、『我々は綸空事の圏内へ、我々に無關係な理論的操作ばかりでなく、高貴な人間が考へ出し、人類の高貴なる部分の心が固執し、人類が離さない所の、概念の産物をも引き入れるのである。我々は決して離さない――實用的綸空事として總てを存在せしめる、理論的眞理としては、しかし、消えて無くなる。』

この論證は「不合理なるが故に我信ず」とあまり變らない。しかし、私は、「かのやうな」の要求は只哲學者のみが提出し得る様な要求であると思ふ。哲學の技巧によつてその思考が影響されてゐない人間には、そんなことは考へられない。彼にとつては不合理、背理の認容で總てが片付いてゐる。彼の最も重大な關心事の處理に當つて、其他の場合には日常茶飯の仕事にも要求する確實性を斷念するやうに強ひられることは彼には出來ない。早くから客觀性を强調することに秀でてゐた私の子供の一人のことを思ひ出す。兒童達に童話を話してやり、彼等が熱心に傾聽してゐると、其處へ彼がやつて來ては訊いたものである、――それ本當の話なの？　さうではないと言ふお答を聞いて、彼は輕蔑した

やうな顔をしては立ち去つた。宗教の童話に對しても人々はやがて「かのやうな」の執り成したにも拘らず同樣に振舞ふであらう、といふことが豫想される。

しかし今の處まだ彼等は全然違ふやうに振舞つてゐるし、過去の時代に於ては宗教的觀念は、その明白なる證明の缺乏にも拘らず、人類に最大の影響を及ぼして來たのである。これは新しい心理學的問題である。この敎義の內面的な力は何處に存するか、その理性の承認に無關係な効力は如何なる事情のお蔭であるかといふ疑問を提出しなければならない。

六

二つの疑問に對する答は十分準備されてゐると私は思ふ。それは宗教的觀念の精神的起源に着眼すれば自(おのづか)ら明かになる。自ら教義と稱する此物は、經驗の沈澱でも思考の成果でもない。それは幻想であり、人類の最も古い、最も強い、切なる願望の成就である。この願望の強度が即ち宗教的觀念の強度である。我々の既に知つてゐる通り、小兒の無力の恐しい印象は保護——愛による保護——の必要を喚起し、それを父親が果して與れたこの無力の全生涯に亙る繼續の認識が、一人の——しかし更に力強い——父親の存在の固執を由來した。慈愛深き神の攝理によつて人生の不安と危險は和げられ、宇宙を支配する道德律の制定は、人間文化の內部に於ては甚だ屢〻實現されずに終る正義の要求の實現を保證し、未來の生による此世の存在の延長は、この願望成就の行はれるべき範圍の空間的及び時間的束縛を取り除くのである。宇宙の起原だとか肉體と精神との關係だとか言ふやうな、人間の知識慾が發する難問に對する答は、この組織を前提として述べられる。父錯綜(コンプレックス)から起る小兒時代のどうしても全然克服することは出來なかつた葛藤が取り去られ、總ての人に受け入れられる解決まで

に導かるとすれば、それは個人精神の偉大なる慰安を意味する。私が總ては幻想であると言ふには、先づ、この語の意味を限定して置かなければならない。幻想は錯誤と同一物ではない。又必ずしも錯誤ではない。害蟲は塵芥からわくといふアリストテレスの考へは、今日でも無知な人達はさう信じてゐるけれども、錯誤であつた。同様に脊髄癆は性的放縦の結果であるといふ前時代の醫師の考へも錯誤であつた。これらの錯誤を幻想と稱するのは不當であらう。之に反して、インドへの新海路を發見したと思つたのはコロンブスの幻想であつた。彼の願望が此錯誤に關係を持つてゐたことは甚だ明瞭である。インドゲルマン種族が唯一の文化可能の人種であるといふ或種の國家主義者の主張や、精神分析が初めて破壞した所の、子供は性慾のない生物であるといふ信念なども幻想と稱することが出來る。幻想は常に人間の願望に由來すると言ふ特徴がある。この點それは精神病學でいふ妄想に似てゐる。しかしそれは、妄想のより複雜な組立は別としても、妄想とは違ふ。妄想に於ては我々は當然事實に對する矛盾に重きを置く。が、幻想は必ずしも虚僞、即ち、實現不可能もしくは現實と撞着してゐなければならない事はない。例へば一人の町娘が、王子が彼女を連れに來るだらうと幻想を起すことが出來る。事實こんな事が起こつた二三の例もあるかも知れない。メシアが來て黄金時代を現出するであらうと言ふ事の方が遙かにありさうもない事である。批判者の立場に從つて、彼はこの信仰を

幻想とも妄想に類する物とも分類するであらう。實證された幻想の例は通例容易に見付からない。が、凡ゆる金屬を黄金に變じ得ると考へた錬金術者の幻想はその一つであるかも知れない。非常に多くの、出來るだけ多くの黄金を得ようと言ふ願望は、富の條件に對する我々の今日の見解によつて非常に弱められたが、然し化學はもはや金屬を黄金に變化する事を不可能とは考へない。我々はそれ故、願望成就といふことが或信念の動機に張つてゐる時、その信念を幻想と名付けるのである。そして、幻想自身がその證明を斷念する樣に、我々はその信念の現實に對する關係は問題にしないのである。

これだけの要領を得た後で、再び宗教の教義に向つて見ると、我々は、繰返しから言ふことが出來る、——それは悉く幻想であつて、證明不可能であり、何人もそれを眞實と思ふやうに、信ずるやうに、強制されてはならない。その二三のものの如きは甚だ眞實らしからぬものであり、我々が宇宙の實在について苦心して經驗した總ての事と甚だしく矛盾してゐてそれは——心理學的相違を適當に顧慮して——妄想に比してもいい位である。その大多數のものの實在價値に關しては判斷を下すことが出來ない。それは證明が出來ないやうに、又反駁もしやうがない。批判的にそれに近づくには、人はまだあまりに僅かしか知らない。宇宙の謎は我々の研究に對して徐々にしか正體を現さない。科學は今日なほ多くの疑問に解答を與へ得ない。しかし科學的研究が我々を外界の實在の認識に導き得る唯

一の道である。直觀と瞑想から何物かを期待するならば、それはやはり幻想である。それは我々自身の精神生活に關する――解決し難い――說明を與へ得るのみであつて、宗教教義にはたやすく解答できる問題に關しては決して指示することが出來ない。自己の專斷で缺陷を補ひ、個人的斷定によつて宗教組織のこの部分やあの部分を多少とも合理的に說明することは冒瀆であらう。それにはこの問題はあまりに重大である。あまりに神聖であるといつてもいいかも知れない。

此處で次のやうな抗議を待ち受けることが出來る、――では、つむじ曲りの懷疑家でさへ、宗教の主張は悟性を以て反駁することが出來ないことを承認するのなら、何故私はそれを信じてはいけないのか？　決してそれはそんなに多くのものを、傳統を、人間の和合を、そしてその內容を凡ゆる慰安的なものを有してゐるのではないか？　さうだ、何故いけないのか？　何人も信仰を强制されることは出來ない如く、又不信仰を强制されることも出來ないのだ。しかしさう言ふ論據によつて、正しい思考の道を辿つてゐるといふ自己欺瞞に陷つてはいけない。『姑息な遁辭』と言ふ判決が何かに當つてゐるとすれば、それはこの場合である。無知は無知である。何物かを信ずる權利は此處からは出て來ない。思慮のある人間は他の事柄に於てはそんなに輕率には振舞はないし、彼の判斷、彼の左袒のそんな貧弱な論據では滿足しない。しかるに最も高尙な、最も神聖な事柄に於てのみはこれを許すので

ある。實はこれは、既に久しく宗教から離れてゐるにも拘らず、まだ固執してゐる如く、自己もしくは他人を欺瞞する爲の努力に過ぎないのである。宗教の問題となると人間はあらゆる不公平や知的惡戲の罪を犯す。哲學者は語の意味を、殆ど原義が殘らないまでに過度に擴張する。彼等は彼等の創造した茫漠然たる抽象を『神』と名付け、而もそれで公然理神論者、信神家であり、彼等の神は寧ろ實體のない影に過ぎず最早宗教教義の力強い人格ではなくなつてゐるにも拘らず、彼等はより高尚な、より純粹な神を認識したと自負し得るのである。批評家は、全宇宙に對する人間の弱小無力の感情を告白する人間を、この感情が宗教心の本質を決定するのではなく、その次の手續、即ちこの感情に對して救濟を求める所の反應が始めてそれを決定するのであるにも拘らず、「宗教心が强い」と說くことを頑固に主張する。それ以上進まない者、即ち大宇宙に於ける人間の微々たる役割に安んじてゐる者こそ、最も眞の意味に於て非宗教的なのである。

宗教教義の眞理價値に對して意見を定めることはこの檢討の計畫ではない。宗教教義をその心理學的性質に於て幻想と認めただけで我々には十分である。だがこの暴露が、多くの人には最も重要と思はれるに相違ない問題に對する我々の態度にも甚だしく影響することを隱すには及ばない。何時の時代に如何なる人間によつて宗教教義が作られたかと言ふことを我々はほぼ知つてゐる。更に如何なる

動機によつてそれが起つたかと言ふことが分ると、宗教問題に對する我々の立場は著しい變化を受けるのである。我々は心に言ふ、宇宙の創造者として神があり、慈愛深き攝理があり、宇宙の道徳律があり、來世の生活があつたら、成程大變結構だらう。だがそれらの事が皆我々の欲しがらねばならないやうなことばかりなのは奇妙である。そして又、我々の憐むべき、無知な、自由を知らぬ祖先に、これら總ての難解な宇宙の謎の解決が出來たとしたら、尙更不思議なことだらう。

七

宗敎敎義を幻想と認めると、直ちに、我々が尊重し、我々の生活を支配せしめてゐる他の文化財產も同樣の性質のものではなからうかといふ次の疑問が起る。我々の國家制度を規定する前提は同樣に幻想と稱せられるべきではなからうか？　我々の文化に於ける性の關係は、一つの、或は一聯のエロティックな幻想によつて曇らされてはゐないだらうか？　一たび我々の懷疑が盛になると、我々は、科學的研究に於ける觀察と思惟との應用によつて外界の實在から何事かを知り得るといふ我々の確信がよりよき論據を持つてゐるだらうかといふ疑問をも恐れないであらう。我々自身の本性に觀察を向け、その本性自身の批判に思惟を用ひることとの是認は、何物も拒む譯に行かない。此處から、それの缺除は『世界觀』の構成にとつて決定的であるに相違ないであらう所の多くの考究が生ずる。又、かかる努力は徒勞ではなく、我々の猜疑を少くも幾らかは是認するであらうと言ふことも我々は豫想する。しかし著者の能力がそんな總括的な問題は拒絕する。止むを得ず彼は彼の研究をこれらの幻想の內のただ一つのもの、即ち宗敎的幻想の追求に制限するのである。

我々の反對者の大聲が今や待てと命ずる。我々は禁制の行爲の爲に辯明を求められる。彼は言ふ、『考古學的興味は成程大いに稱讃に値する。しかし生きてゐる者の住所が掘り返されて陷沒し、人間をその破片の下に埋めるやうなことになつても構はず發掘を行ふ者はない。宗教教義は、他の任意の物について人が小理窟を捏ね得るやうな、そんな物ではない。我々の文化はその上に築かれて居り、人間社會の維持は、人間がその大多數に於てこの教義の眞理を信ずるといふことを前提としてゐるのである。もし彼等に、全智全能の神がなく、神的世界秩序がなく、來世がないと敎へたら、彼等は文化規定遵奉の義務がないと感ずるだらう。總ての人は何等の拘束なく、何等の不安なく、その非社會的、利己的な慾望に從ひ、自分の權力を振はうとし、我等が數千年の文化作業によつて追放した混沌狀態が再び始まるであらう。たとひ宗教は眞理を有してゐないといふことを知つて居り、又それを證明する事が出來たとしても、人は沈默を守り、「かのやうな」の哲學が要求する樣に振舞ふべきであらう。總てを維持する爲にである！　又この企の危險性は別としても、それは無益の殘酷といふものである。無數の人間が宗教の教義の中に唯一の慰安を見出し、その助けによつてのみ人生を耐へてゐるのである。この彼等の支柱を奪はうとする。而もそれに代るべきよりよきものは何も與へ得ないのである。科學が今の處あまり多くを果し得ないといふことは承認されたが、それが大いに進歩した處で

やはりそれでは人間は滿足しないだらう。人間は冷やかな科學によつては滿足させられ得ない所のなほ他の命令的要求を持つてゐる。然して、如何に人生に於て智能は慾望生活に對しては後退するかといふことを常に强調してゐた心理學者が、今や人間から貴い願望滿足を奪ひ去らうと努め、知的食物を以てそれを償はうとしてゐるとは、如何にも奇妙なことであり、正に自家撞着の絕頂である。』

これは一度に澤山の非難が來たものだ！　しかし私にはそれら全部を反駁する用意は出來てゐる。その上私は、宗敎に對する現在の關係を維持すれば、それを解除するよりも、文化にとつてより大なる危險を意味するといふ主張さへなすであらう。ただ何處から答辯を始むべきかに迷ふのである。

先づ私自身私の企を全く無害無危險と考へてゐることの保證から始めよう。智力の過當な評價はこの度は私の側にはない。もし人間が、反對者の叙述される通りであるならば、——そして私はそれに反對しようとは思はないが、——然らば敬虔なる信仰家が私の論述に壓服されてその信仰を奪はれる危險はない。それに、私は、他のもつと立派な人々が、私より以前に、遙かにより完全に、より力强く、より印象深く言つたことを言つたばかりである。これらの人々の名前は分つてゐる。が、それは擧げないことにしよう。私が自分を彼等の列に加へようとすると思はれてはいけないから。私はただ——これが私の叙述に於ける唯一の新しい所だが——我が偉大なる先輩の批判に幾らか心理學的論據

を附け加へただけである。この追加こそが、前のものには許されなかつた効力を奪ひ取るだらうとは到底豫想できない。すると、無効なことが確かなら、何の爲にそんなことを書くのかといふ質問が當然出るだらう。だがそれは後にする。

この發表が損害を與へ得る唯一のものは私自身である。私は、淺薄、固陋及び理想主義と人類最高の關心事に對する理解との缺除のために、最も好ましからぬ非難を聞かされるだらう。けれども一方こんな非難は私に取つては新しいものではないし、又他方若い時既に同時代の人々の不興を無視したことのある者に取つては、凡ゆる好意からも惡意からもやがて去つて行くことの確かな老年時代に於て、そんなこと位何であらう？　昔はさうは行かなかつた。昔はかかる發表によつて此世の生存の確實なる短縮と、あの世の生活を自ら經驗する機會の十分なる促進とを得た。しかし繰返して言ふ、そのやうな時代は過ぎ去り、今日ではかかる著述は著者に取つても危險でない。せいぜい何處かの國でその書物が飜譯を禁ぜられ、傳播を禁じられる位のものである。勿論それは正にその文化の高いことを確信してゐる國に於てである。だが一般に願望斷念と運命への服從を辯護するならば、この位の損失には耐へ得なければならない。

次に、この文書の發表が誰かに禍を齎しはしないだらうかといふ疑問が起つた。確かに誰にも齎し

はしない。が、一つの物に、精神分析といふ物に。それが私の創始であることは否定する譯に行かない。人々はそれに對して幾多の疑惑と惡意とを示して來た。今私がこんな氣に喰はぬ發表をすれば、人々は早速私の人格を精神分析の上へ推し移すであらう。今こそ精神分析の目的が分つた、と彼等は言ふだらう。假面は剝がれた。我々が常に推量してゐたやうに、神と道德的理想との否定が目的だつたのだ。我々にこの發見をさせない爲に、精神分析は、何等の世界觀を持たない、又作り得ない、などと我々を瞞着してゐたのだ。

この喧嘩は、私の多數の共働者達の爲に、その多くのものは全く宗教問題に對する態度を私と等しくしてはゐないのだから、實際私を不快にするであらう。けれども精神分析は旣に多くの攻擊に耐へて來たのである。この新しい攻擊にも曝されねばならない。本當は精神分析は一研究方法、不偏不黨の一道具であつて、例へば微分積分の如きものである。物理學者がその助けによつて、地球は一定の時の後に滅亡するだらうといふことを算出したとしても、人はこの計算法そのものに破壞的傾向ありとしてそれを排斥することは躊躇するであらう。宗教の眞理價値に向つて私が此處に言つたことは總て精神分析を必要としない。その存立のずつと以前に他の人々によつて言はれたことである。もし精神分析的方法の應用によつて宗教の眞理的內容を否定する新しい論證が得られるとしたら、愈々宗教

に取つて面白くない事になる。しかし宗教の擁護者達は、同様に正當な權利を以て、宗教教養の感情的意義を十分價値付ける爲に精神分析を利用するであらう。

さて辯明を續けよう。宗教は人間文化に對して明かに大なる任務を果した。非社會的慾望の制御に大いに貢獻した。しかし十分でなかつた。それは數千年に亙つて人間社會を支配して來た。そのなし得る所を示す時間は十分あつた譯である。もしそれに、人間の大多數を幸福にし、慰め、人生と和解せしめ、彼等を文化支持者たらしめることが出來たならば、現存の關係の變更に努力しようなどといふ考へは誰も起さないであらう。所が我々はその代りに何を見るか？　驚くべき多數の人間が文化に對して不滿を抱き、その中にあつて不幸であり、それを振ひ落さねばならない羈絆と感じてゐる事である。これらの人間が此文化の修正に全力を盡すか、或は文化とか慾望制限とかについては一切何事も知らうと欲しない程彼等の文化憎惡が極端になるかしてゐることである。此處で人は抗論するであらう、かかる狀態は實に宗教が民衆に對する影響の一部分を失つたから起るのであつて、正に科學の進歩の悲しむべき影響の結果であると。我々はこの讓歩とその論據を記憶し、後に我々の企圖に利用するであらう。が、抗論そのものは無力である。

人間は宗教教養の無制限な支配の時代に、全體として今日よりも幸福であつたかどうかは疑問であ

る。より道徳的では確かになかつた。彼等は常に宗教の規定を實貫し、それによつてその意圖を無効にすることを心得てゐた。宗教に對する服從を監視する筈の僧侶がそれに加擔した。神の慈愛は彼の權能の手中に落ちた。人は罪を犯し、次いで犠牲を捧げ或は懺悔を行ひ、次いで更に罪を犯すべく自由の身となつた。内省的なロシア人は、神の恩惠の凡ゆる幸福を享受する爲には罪は缺くべからざるものであり、從つてそれは神意に叶つた行爲であるといふ結論にさへ飛躍した。僧侶はただ人間の本能に非常に大なる認容を與へることによつてのみ、民衆の宗教に對する屈從を維持し得たといふことは周知のことである。神のみが強くて善である、人は弱く罪深い、と言ふに止まつた。不道德は凡ゆる時代道徳と同樣の支持を宗教に於て見出した。人間の幸福增進に關する宗教の効果、その文化適合及びその道徳的制限がよりよきものでないとすれば、我々は人類に對するそれの必要を買ひ被つてはゐないだらうか、我々の文化要求の基礎をその上に置くのは賢いやり方だらうかといふ疑問が起る。

明白なる現在の狀況を考へて見るがいい。我々は宗教が最早昔と同じ影響を人間に對して持つてゐないといふ讓步說を聞いた。（此處では歐洲キリスト教文化について言つてゐるのである。）これは宗教の與へる期待が少くなつたからではなく、宗教が人間にとつて前程信じられなく思はれて來たからである。この變化の原因は人間社會の上層に於ける科學的精神の强大化にあることを認容しよう。（恐

らくこれが唯一の原因ではない。)批評が宗教文書の證明力を蝕し、自然科學がそれに含まれてゐる誤謬を指摘し、比較研究によつて我等の尊敬する宗教的觀念と原始民族及び原始時代の精神的產物との呪はしき類似が目立つて來たのである。

科學的精神は人がこの世界の事物に對して取るべき一定の方式を作つた。宗教の事物の前には暫し止まり、躊つてゐたが、遂に此處でも敷居を跨いだ。過程に於ては停まる所がない。人間に我等の知識の寶が普及すればする程、宗教的信仰からの背叛は擴まる。最初はただその陳腐な、目障りな表現からの、しかし後には又基礎的前提からの背叛が。デートンで訴訟を起したアメリカ人のみが徹底的に振舞つた譯である。其他の場合には避くべからざる移行が半可と不公正とを經て行はれる。

知識階級や精神的勞働者に關しては文化の爲にあまり氣遣はれる所はない。文化的行動の爲の宗教的動機の、他の世俗的動機によつての置き換へは、靜穩の內に行はれるであらう。だが文化の敵であるべき十分の理由を持つてゐる無教育者、被壓迫者の大衆については事情が違ふ。人々が最早神を信じてゐないことを彼等が知らない內はいい。が、彼等は、たとひ私のこの書きものが發表されなくとも、間違ひなくそれを知る。そして、科學的思惟が人間に惹き起した變化がその中にあることを知らずして、早速その科學的思惟の結果を受け入れる。所でこの大衆の文化敵視が、彼等の强制主に認め

られた窮點へ押し寄せる危險はないだらうか？　人が同胞を殺してはならないのは、愛する神がそれを禁じて居り、この世若しくはあの世で嚴しく罰するからであるとしたら、そして、しかし愛する神などといふものはなく、その罰を恐れる必要もないのだといふことが分るとしたら、人はきつと躊躇なく同胞を殺して了ふ。そしてそれを防止し得るのは地上の權力のみである。それ故この危險な大衆の最も嚴しい抑壓と精神的覺醒への凡ゆる機會の最も注意深い遮斷か、然らざれば文化と宗敎との間の關係の根本的修正といふことになる。

八

この後の方の提案には何等障碍となる特別の困難はないと思ふべきだらう。さうなると何物かを失ふことは確かだが然し恐らくより以上を得、大なる危險から免れるだらう。然るに人はそれによつて文化が更に大なる危險に曝されるかの如く怖れるのである。聖ボニフアチウスが、サキソニア人から神聖なものとして崇拜されてゐた木を伐り倒した時、並ゐる人々はこの冒瀆の結果として恐しい事の起るのを待ち受けてゐた。所がそれが起らなかつたので、サキソニア人達は洗禮を受けた。

文化が、憎い、邪魔になる、或はその財産の欲しい隣人を殺してはならぬといふ命令を發したとすれば、それは、さうしなければ實行できない人間の共同生活の爲であつた。何故なら殺人者は被害者の親族の復讐と、同樣にかかる暴行に對する内心の慾望を感じてゐる他の人々の微かな羨望との的になるであらうから。それ故彼はその復讐又は掠奪を永く樂しむ譯には行かず、やがて自ら殺される可能性が十分あるだらう。假に非常な力と用心とをもつて一人一人の敵は防ぐとしても、弱いもの共の聯合には負かされねばならないだらう。さういふ聯合が成立しないとすれば、殺人は限りなく續けら

れ、終に人間はお互ひに剿滅し合ふであらう。コルシカに於てはなほ家族間に、其他に於てはただ國民間にのみ存續されてゐるのと同一の狀態が個人間に生ずることになるだらう。總ての人にとつて同樣な生活不安の危險が。そこで、人間を社會に結合し、社會は個々人に對しては殺すことを禁じ、この禁を犯す者に對する共同殺害の權利を保有するのである。これが即ち司法と刑罰である。

然るに我々は、殺人禁止のこの合理的論據を知らせず、神が禁令を發したと主張するのである。そこで我々は敢て彼の意思を忖度し、彼も亦人間がお互ひに剿滅することを欲しないといふことを發見する。かういふ仕方で我々は文化禁止を全く特別な威儀で外飾する。しかし同時にその遵守を神に對する信仰に依存させる危險を犯すのである。この手續を撤回し、最早我々の意志を神に歸せず、社會的論據で滿足するならば、我々は文化禁止の聖化は失つたけれども、しかし又それを危險に曝すことからは免れたのである。更に、我々は他のものをも得るのである。一種の瀰漫或は感染によつて、神聖、不可侵性、彼岸性ともいふべきものの特徴が、少數の大なる禁令から凡ゆる他の文化的制度、法律、規定にまで擴がつてゐる。これらにはしかし後光が似合はない。これらは時と場所とに從つて正反對の裁決をして、お互ひに自ら價値を削ぎ合ふばかりでなく、なほその上に人間的不完全の凡ゆる特徴を暴露してゐる。それらの中には、單に短見者流の臆病の產物、狹量なる利害の念の發露、或は

不十分な前提からの結論としか思はれないものが容易に認められる。それらに對してなさねばならぬ批評は、他の、もつと、正當な文化要求に對する敬意をも、順はしからざる分量に於て引き下げる。何が神自らの要求であり、何が寧ろ全能なる國會若しくは優秀なる市會の權威に由來するかといふことを定めるのは厄介な仕事であるから神はすつかり除外して、正直にあらゆる文化的制度及び規定の純人間的起原を承認した方が、疑ひもなく利益である。神聖が要求されると又これらの命令や法律の硬直、不變性が起るであらう。これらはあまり人間を支配すべく作られたのではなく、人間の利益の爲に奉仕すべく作られたのであるといふことを人々は覺り得る筈である。彼等はそれらに對してより親密な關係を結び、それらの廢止ではなく改正を目的とするやうになるであらう。これは文化の壓迫との和解に至る途上の重要な進歩であると思ふ。

文化規定の純合理的論證に對する、つまりその社會的必要への還元に對する我等の辯論は、しかしながら、此處で突然一つの疑念によつて中斷される。我々は殺人禁止の發生を例として選んだ。所で一體それに關する我々の叙述は歴史的眞理に一致してゐるだらうか？　さうではないらしい。それは合理的構成に過ぎないやうに見える。我々は人間文化史の丁度この部分を精神分析の助けによつて研究した。そしてその勞苦に基いて、我々は、事實はさうでない、と言はざるを得ない。純理性的動機

は今日の人間に於てもなほ熱情的衝動に對しては殆ど用をなさない。まして原始時代のあの人際に於てはそれは如何ばかり無力であつたらう！　もしかの殺人行爲の中に一つの、卽ち抵抗し難い、重大な感情的反動を惹き起す所の殺人行爲、太古の父親の殺害といふことがなかつたならば、恐らく今日なほ彼等の子孫は、抑壓を感ずることなく、お互ひに殺し合ふことであらう。此處から『汝殺すべからず』といふ、トーテミズムでは父親の代償に限られ、後に他のものへも及ぼされ、まだ今日でも例外なしには行はれてゐない所の禁止が出て來るのである。

しかしかの太古の父親は、此處に繰返すまでもない論述によると、神の原型であつた。後の世の人人がそれによつて神の姿を作り上げた所の模型であつた。かくして宗教的表現は正當であり、神は實際かの禁止の發生に關與したのであり、彼の影響がそれを作つたのであつて、社會的必要の認識が作つたのではないことになる。しかして人間の意志の神への轉嫁には十分正當な理由があるのであつて、卽ち人間は父を暴力によつて除いたことを知り、冒瀆行爲に對する反動として、以後彼の意志を尊重することに決心したのである。宗教教義はそれ故、勿論或變形と假裝とに於てではあるが、歷史的眞理を我々に傳へる。我々の合理的表現はそれを否定する。

ここに於て我々は、宗教的觀念の寶は願望成就のみならず、重要な歷史的記念をも包含してゐるこ

とに氣付く。過去と未來とのこの協力、それは何といふ横溢する力を宗教に授けることだらう！ だが恐らく類推の助けによつて、我々には他の考へが浮ぶだらう。概念を、それの育つた地盤からあまり引き離すのはよくない。が、その一致は明かにして置かなければならない。人間の子供は、その文化への發達を、時には甚だ明瞭な、時にはあまり明瞭でない神經症時代を經ることなしには、よく遂げ得ないことを我々は知つてゐる。これは、子供が、後には不用に歸する甚だ多くの本能的要求を合理的精神作用によつて禁遏することが出來ず、通常後に苦悶の動機を藏してゐる所の排斥行爲によつて制御する所から來るのである。これらの小兒神經症の多くは成長の間に自然に克服される。殊に小兒時代の强迫神經症はこの運命をもつてゐる。殘餘のものも後に精神分析的療法によつて取り除かれるべきものである。これと全く同じ樣に、人類全體がその永い發達の間に神經症類似の狀態に陷り、而もそれは、人類が無知な、知的に薄弱な時代に、人間の共同生活に缺くべからざる禁慾を、純粹に感情的な力によつて行つたといふ同一の理由によるのであると考ふべきであらう。前時代におこつた排斥に似た過程の殘滓がその後なほ永く文化に附着してゐた。宗教は一般人類の强迫神經症であり、子供のそれと同じくエディプス錯綜（コンプレックス）から、父親との關係から生じたものであると言ふことが出來よう。この見解に從へば、宗教からの離叛は成長過程の運命的不可抗性を以て行はれるに相違なく、然

して我々は丁度今この發達段階の眞中にゐるのであるといふことが豫測さるべきであらう。

そこで我々の態度は、革新に直面して抵抗せず、それを促し、その突發の强暴を緩和せんと努める思慮ある教育者の模範に從ふべきであらう。所で宗敎の本體は勿論この類推によつて盡されてはゐない。それは一方、單に個人の强迫神經症のやうに、强迫制限（强迫觀念に基く制限）を齎すが、他方に於ては、ただアメンチア、卽ち喜悅的幻覺的精神錯亂に於てのみ孤立して見出される所の、事實の否定を伴ふ願望幻想の一體系を含有してゐる。尤もこれは社會現象の理解を助けんが爲のほんの比喩に過ぎないのであつて、個人的病理學は決して社會現象に對する十分價値ある對稱を我々に提供しはしないのである。

如何に詳細の點に至るまで宗敎と强迫神經症との類似が追求できるか、宗敎形成の特色及び運命の如何に多くがこれによつて理解できるかといふことは（私及び殊にT・ライクによつて）繰返し指摘されてゐる。それは、敬虔なる信者が或種の神經症罹病の危險に對して非常に保護されてゐるといふことにもよく適合する。つまり一般的神經症の採用が、個人的神經症を作り出す役目を免れしめたのである。

或宗敎敎義の歷史的價値の認識は、それに對する我々の尊敬を高める。が、それを文化的規定の動

機付けから引き離さうといふ我々の提案を無價値にしはしない。その反對である！　この歴史的殘物の助けによつて、我々は宗教的教義を、謂はば神經症的遺物（Relikte）として理解することが出來るのである。そして恐らく今が、神經症患者の分析的療法に於けるが如く、排斥の結果を合理的精神作業の結論によつて置き換へるべき時であると言へるのである。此改造に於ては文化規定の儀式的假想の廢止だけでは濟まないであらうこと、それの一般的修正は多くのものに取つては揚棄の結果になるに相違ないことは豫測されるが、それは殆ど悲しむべきことではない。我々に課された人間と文化との和解問題は、それによつて大いに解決に近づくであらう。文化規定の合理的動機付けに於ける歴史的眞理の放棄を惜んではならない。宗教教義に含まれてゐる眞理は、一般民衆が眞理として認識することの出來ない程、歪められ、組織的に假裝されてゐる。我々が子供に、鸛が赤ん坊を連れて來ると話して聞かせるのと似た例である。この場合に於ても我々は眞理を象徴的假想のもとに語つてゐるのである。何故なら我々はこの大きな鳥が何を意味するかを知つてゐるからである。しかし子供はそれを知らない。彼はその謬妄の部分のみを聞き取り、瞞されたと思ふのである。然して子供の大人に對する猜疑と反抗とが實にこの印象と關係してゐることの多いのを我々は知つてゐる。眞理のかかる象徴的覆面の報導はやめて、子供の知識の程度に應じて眞實の事情を知らせることを拒まぬ方がいい

といふ確信に我々は達してゐるのである。

九

『あなたは互ひに一致し難い矛盾を敢てされる。先づあなたは、あなたの書き物の如きものには何等の危險性もない、何人もかかる論述によつてその宗教的信仰を奪はれはしないだらうと主張される。所が後に明かになつたやうに、この信仰を毀すのがあなたの意圖なのだとして見れば、失禮ながら、一體何の爲にそれを發表されるのであるか？　所で又他の場所では、人々が神は最早信じられてゐないことを知ると危險である、非常に危險でさへもあり得るといふことをあなたは承認される。彼等はその時までは從順であつたが、さうなると文化規定に對する服從を棄てて了ふといふのである。文化戒律の宗教的動機づけが文化にとつて危險を意味するといふあなたの論證は、信者を不信者になし得るといふ假定の上に立つてゐる。これは全くの矛盾である。』

『次の矛盾は、一方では人間は智能によつては指導されない、彼の慾情と本能的欲求とに支配されるといふことを承認しながら、他方ではその文化服從の感情的基礎を合理的基礎を以て置き換へようといふ提案をされることである。これが理解できる人はするがいい。私には一方か然らざれば他方を取

る外ないやうに思はれる。」

『それにあなたは歴史を學ばれたことはないのであるか？ 宗教を理性によつて交代させようといふやうな試みは既に嘗て公に、大規模になされたのである。あなたはフランス革命とロベスピエールのことを思ひ出されるであらう。しかし又同時にその實驗の短命と慘憺たる不結果とを。それは今ロシアに於て繰返されてゐる。我々はその結果に對して好奇心を起すまでもない。人間は宗教を缺くことが出來ないと考へるべきだとあなたはお思ひにならないか？」

『あなたは自ら、宗教は單なる强迫神經症以上のものだと言はれた。だが宗教のこの他の方面についてはあなたは何も論じられなかつた。神經症との類推を行ふだけで滿足された。神經症からは人間は救はれなければならない。その際他に何が失はれようと、あなたの構ふ所ではないのである。」

矛盾の外觀は恐らく私が複雜な事柄をあまりに急いで論じたから生じたのである。我々は二三の補充をすることが出來る。私の書き物には或點に於て全く危險性がないといふことを私は依然として主張する。信者はこの或は類似の論證によつて惑はされはしないであらう。信者といふものは宗教の内容と一定の愛情的結合をなしてゐるものである。勿論この意味に於ける信者でない無數の他の者がある。彼等は宗教の威嚇によつて脅かされるが故に文化規定に服從するのであり、宗教は彼等を制限

する實在の一部分と考へねばならない間はそれを恐れるのである。これらの人々が、宗教の實在價値を棄ててもいいとなるとすぐ樣羽目をはづす人々である。だが彼等に對しても亦論證は影響を及ぼさない。彼等は、他の人々も亦宗教を恐れてゐないことに氣がつくと、自分も恐れることをやめるのであつて、前に主張した通り、たとひ私の書き物が發表されなくとも、彼等は宗教的影響の衰微を經驗するであらう。

だが私は、あなたの非難されるも一つの矛盾の方にあなたは重きを置いて居られると思ふ。人間は合理的根據には耳を傾け難く、專らその本能的慾望によつて支配されるものである。然らば何故に彼等から慾望滿足を奪ひ、合理的根據を以て置き換へようとする必要があらう? 成程人間はその通りである。だがあなたは、人間がその通りであらねばならぬか、彼の最も内なる本性が彼にそれを强要するか、といふことを自ら問うて見られた事があるか? 人類學者は、子供の頭を幼時から繃帶によつて變形させる習慣を有する國民の頭顱指數を決定することが出來るか? あなたは健康な子供の優秀なる智能と、一般の大人の思考力不足との悲しむべき對照を考へて見られるがいい。宗教的教育にこそこの相對的萎縮の責任は大部分ある、とは決して言はれないであらうか? 何等の影響を受けない子供が、神及び彼岸の事物について考へ始めるまでには、隨分永くかかるであらうと思ふ。恐らく

その考へは彼等の祖先の考へと同一の道を辿るであらう。然るに人はこの發達を待つことなく、宗教教義に對して興味もなく、その意義を理解する能力もない時代にそれを子供に注ぎ込む。性的發達を遲らすことと宗教的感化を早めることとが、今日の教育學の綱領の二要點であるらしい。かくて子供の思考力が目醒める時分には、宗教教義は既に拔くべからざるものとなつてゐる。所であなたは、思考作用に取つてかから重要な領域が地獄の罰の嚇しによつて塞がれることが、その增進に有効であると思はれるか？　一たび宗教教義の齎す凡ゆる不合理を無批判に受け入れ、その間の矛盾さへ看過するに至つた人の思考力不足は、大して驚くにあたらない。ところで我々の慾望性を統御するには智能より外に方法がない。思考禁止の支配の下に立つてゐる人々から、彼等が心理學的理想、即ち智能の最高權威性を獲得することがどうして期待できよう？　あなたは又、婦人は一般に所謂『生理的精神薄弱』、即ち男子のそれよりも低い智能の所有者であるやうに言はれてゐることを御存知であらう。事實そのものには議論の餘地があり、その説明には疑はしい點があるが、この知的萎縮の二次的性質に對する一つの論據は、婦人は、その思考を彼女に最も興味のあるもの、即ち性生活の問題に向けることの早期の禁止の苛酷に苦しめられるからだといふのである。性的思考抑壓の外に宗教的及びそれから誘導される御用的思考抑壓が人間の幼時に働いてゐる間は、我々には、人間が本來どういふ物で

あるかといふことは言へない譯である。

だが私はあまり熱中することを止めて、私も亦一つの幻想を追つてゐることの可能性を承認しよう。宗教的思考禁止の惡影響は私の考へる程甚だしいものではないかも知れない。教育を宗教への隷屬に惡用しなくても、人間の本性は變らないことが明かになるかも知れない。それは私にも分からないし、あなたにも分からない筈である。人生の大問題が今の處解決出來ないやうに見えるばかりでなく、多くのもつと小さい問題も決定するに困難である。しかしあなたは、此處には將來への希望に對する權利があること、文化を豐かならしめる寶が掘り當てられるかも知れないこと、非宗教的教育の試みを企てるのは無駄な骨折でないことを承認さるべきである。もしそれが不滿足な結果になるならば、私は早速改革を止め、以前の、人間はその本能的慾望によつて支配される智能の弱い生物であるといふ純記述的斷定に立ち歸る。

他の一點に於ては私は腹藏のないところあなたに贊成する。宗教を暴力を以て突然に揚棄しようとするのは確かに馬鹿げた企である。何よりも先づそれは見込みのないことだからである。信者はその信仰を奪はれはしない。論證によつても、禁止によつても。もし二三の者に於てそれが達せられるとすれば、それは殘酷であらう。數十年に亙つて催眠劑を取つてゐる者は、勿論この藥を取り上げられ

ては眠ることが出来ない。宗教的慰安の作用が麻酔劑のそれと同一視され得ることは、アメリカに於ける一現象によつて立派に證明された。其處では今——明かに婦人の勢力の影響の下に——人間からあらゆる刺戟劑、興奮劑、嗜好品を奪ひ去らうとし、その代償として敬神を過飽せしめてゐる。この實驗の結果に對しても人は好奇心を起すにあたらない。

それでもしあなたが進んで、人間は一般に宗教的幻想の慰安を缺くことが出來ない、それなしには人生の重荷、悲慘な現實に耐へ得ないであらうと、推定されるなら、私はあなたに反對する。如何にも、あなた方がこの甘い——或は甘苦い——毒を子供の時から注ぎ込んだ人間はさうであらう。しかし他の醉はされずに育てられた者は？ 恐らく神經症に罹つてゐない者は、それを麻痺させる爲の麻醉を必要としないだらう。勿論さうなると人間は困難な境遇に立つであらう。彼は自己の全無力を、宇宙の機構に於ける自己の瑣末性を、最早宇宙創造の中心でもなく、慈愛深き神の恩寵の對象でもないことを認めねばならないであらう。彼は暖く住み心地よき父の家を見捨てた子供と同一の境遇にあるであらう。だが發育不全症（Infantilismus）は克服さるべき運命を持つてゐるものではあるまいか？ 人間は何時までも子供である譯には行かない。遂には「憂き世」へ出て行かなければならない。これを「現實への教育」と稱してもいい。なほこの上、この進歩の必然性に對して注意を促すのが私

の書き物の唯一の意圖であることを、あなたに打明ける必要があるだらうか?

多分あなたは、それが困難な試練に堪へ得ないことを氣遣はれるであらう。しかしまあ希望を持つてゐようではないか? 人が自分の外に頼るものがないと知つただけでも既に何等かの意義はある。次いで人はそれを正しく用ひることを覺える。人間は全然手段を有してゐない譯ではない。彼の知識は大洪水の時以來多くを數へて來たし、今後も益々彼の力を増大するであらう。然して防遏の道なき大なる運命的必然性に關しては、諦め忍ぶことを覺えるであらう。未だ何人もその收益の一部さへ見たことのない、月世界に於ける大所有地の手供購しが何にならう? この地球上の眞面目な小農夫として、彼は自分の土地を耕して暮しを立てるであらう。來世に對する期待を捨て、自由になつた全力を地上の生活に集中することによつて、恐らく彼は、人生が總ての人に耐へ得られ、文化は最早何人をも壓迫しないやうにすることが出來るであらう。さうなれば彼は何等の悔いなく我等不信者仲間の一人と共に言ふことが出來よう。

天國は

天使と雀に任せ置く。

十

『それは全く大したことのやうに思はれる。あらゆる幻想を捨て、それによつて此世を住み易くすることの出來る人類！　しかし私はあなたと期待を共にすることは出來ない。それは私が、恐らくあなたの思ふやうな頑固な反動家であるからではない。冷靜に考へて、決してさうではない。私は、今や我々は役割を交換したと思ふ。あなたは幻想に捕はれた熱狂者として現れ、私は理性の要求、懷疑の權利を代表する。あなたの論述されたことは、私には錯誤の上に築き上げられてゐるやうに見える。この錯誤は、明かにあなたの願望の影響を暴露してゐるから、あなたの先例に從つて幻想と呼んでもいいのである。あなたはあなたの希望を、幼時に宗敎敎義の影響を受けなかつた人々が容易に望み通りの、慾望生活を支配する智能の最高權威性に到達するであらうといふことに掛けて居られる。それは恐らく幻想である。この決着點に於ては、人間性は殆ど變化しないであらう。もし、私が誤つてゐなければ、——他の文化については極く僅かしか知られてゐないが、——今日でも宗敎體系の壓迫を受けずに成長してゐる國民がある。而も彼等は他の國民以上にあなたの理想に近づいてはゐないので

ある。もしあなたが我が歐洲文化から宗教を取り除かうと思ふなら、それはただ他の教義體系によつてのみ行はれ得る。然してこの體系は始めから宗教のあらゆる心理的特徴を、同樣の神聖さと硬直性と排他性（イントレランス）と自己を守る爲の同樣の思考禁止とを引き繼ぐであらう。教育の要求を滿たす爲には、あなたは何等かのこの種のものを持たねばならない。所で教育は捨てる譯に行かない。乳兒から文化人に至る道は遠い。餘りにも多くの小人達は、もし指導なしに自己の發達に任されたならば、道を迷つて了つて、畢生の仕事が間に合はなくなるであらう。彼等の教育に使用される教義は、丁度あなたが今日宗教に對して非難されるやうに、彼等が壯年に達してからの思考を常に制限するであらう。大人の成熟した智能のみが承認し得る決定を、本能的な、思考力の弱い子供に強ひるのは、我々の、否總ての、文化のどうにもならない先天的な缺陷であることにあなたは氣が付かれないか？　しかし僅か數年の幼年期に、永い間の人類發達を壓縮する結果として、文化には外に仕方がないのである。然して子供はただ感情的な力によつてのみ、彼等に課された任務の成就に誘致され得るのである。これが、即ちあなたの「智能の最高權威性」に對する見込みである。」

「今やあなたは、私が教育及び人間の共同生活の基礎としての宗教的教義體系の存續を擁護したからとて、驚くべきでない。これは實際問題であつて、實在價値の問題ではない。我々は我々の文化の支

持の爲に、個人が文化成熟期に達するまで——多くのものは全然其處まで達しないであらう——その干渉を差し控へてゐる譯には行かないから、我々は若者達に、批判を離れた前提として彼等に働き掛くべき何等かの教義の體系を強ひるべく餘儀なくされてゐるのだから、私には宗教體系がその目的に最もよく叶つてゐるやうに思はれる。勿論それは、あなたがそのために「幻想」だと言はうとされる所の、願望成就的な、慰安的な力の爲にである。實在について何物かを認識することの困難を前にして、のみならず、それが大體我々に可能なことであるかどうかといふ疑を前にして、我々はしかしながら、人間の欲求も亦實在の一部であり、而も重要な、特に我々に密接な關係のある部分であることを我々は見落すまいと思ふのである。』

『宗教教養のなほ一つの長所を私は、あなたがそれについて特に憤慨して居られるらしいその特性の一つに於て見出すのである。それは概念的淨化乃至昇華を許し、それによつて原始的及び小兒的思考の痕跡を留めてゐる多くのものが取り除かれ得るのである。後に殘るものは、最早科學とも矛盾せず、又科學も反駁し得ない所の思想內容である。この宗教教養の改造はあなたは、それを半可と妥協であると斷定されたが、教養のない大衆と哲學的思索家との間の分裂を防ぐことを可能ならしめ、文化の安定に重要な彼等の間の共同を維持するのである。さうすれば、民衆の中の或者が、社會の上層では

「最早神を信じてゐない」ことを知るのを恐れなくてもすむのである。これで私は、あなたの努力は結局、試驗濟みの、感情的に價値の多い幻想を、他の、試驗未濟の、どつちつかずの幻想で置き換へようとする試みに還元されることを指摘したと信ずる。」

私があなたの批評を理解しない程固陋であると思つてはいけない。幻想を避けることの如何に難かしいかを私は知つてゐる。恐らく私の告白した希望も亦幻想的性質のものであつたかも知れない。しかし私は何處までも區別を立てる。私の幻想は――それをもつてゐないからとて罰せられる心配のないのは別としても――宗教的幻想の如く改正不能ではない。妄想的性質は持つてはゐない。もしも經驗が――私にではなく、私よりも後の同樣な考へを持つた人々に――我々の誤つてゐたことを示すならば、我々は我々の期待を斷念するであらう。どうか私の試みを有りのままに考へて頂きたい。この世界のことに精通するのが如何に難かしいかといふことは十分知り拔いてゐる一人の心理學者が、個人の子供から大人に至る發達の間の精神的課程の研究によつて得た僅かな識見によつて、人類の發達を批判しようと努めてゐるのである。所で彼には、宗教は幼時の神經症に比すべきだといふ考へが込み上げて來るのである。そして彼は、多くの子供がこれに似た神經症に打ち勝つて成長するやうに、人類もこの神經症時代を克服するであらうと信ずる程、十分樂觀的なのである。個人心理學からのこ

の見解は不十分であり、人類への轉化は當を得て居らず、樂觀は根據のないことかも知れない。私はあなたにこれら總ての不正確を告白する。しかし人は屢ゝ自分の思ふことを言はずにはゐられないものである。それで、それを眞の價値以上に言ひふらさないことを以て言譯とする。

なほ言つて置かなければならない點が二つある。第一に私の地位の弱いことがあなたの地位を強めることにはならない。あなたは失はれた事物の辯護なして居られると私は思ふ。我々はなほ屢ゝ、人間の智力はその慾望生活に比較して無力であることを力說するかも知れない。そしてそれは正しいであらう。しかし、この無力には少し特別な所がある。智能の聲は低いが、聽かれるまで止まない。遂に、無數に繰返された拒絕の後で、たうとう聽かれるのである。これが人類の將來にたいして樂觀出來る僅かな點の一つである。しかしこの點そのものには少からぬ意義がある。この點になほ他の希望を結び付けることが出來る。智力の最高權威性の前途は成程甚だ遼遠だが、しかし無限に遼遠ではない。そしてそれは恐らくあなたがあなたの神について實現を期待する――勿論外部の實在、アナンケー('Αναγκη)が許す限りの人間的緩和において――のと同一の目的を抱くであらうから、即ち人間愛と苦惱の輕減とを目的とするであらうから、我々の敵對はほんの一時的のもので、和解し難きものではないと言ふことが出來る。我々は同一のものを望んでゐるのであるが、あなたの方が私及び私

の仲間よりもより性急で、より不遜で、それから――どうしてこれを言はない譯に行かう？――より利己的なのである。あなたは至福な死のすぐ後に、始まらせようとし、それに對して不可能事を要求し、個々人の欲求を捨てまいとする。我々の神ロゴス（Λόγος）（註）も、これらの願望の内外界の自然が許すものは實現するであらう。

（註）オランダ人ミユルタチユリの對偶神 Λόγος 'Ανάγκη

しかし極めて徐々にであつて、豫測の出來ない未來に於て、新しく生れる人間の爲にである。人生の苦惱に惱む我々への賠償は約束しない。この遠い目的への途上に、あなたの宗教敎義は遺棄されねばならない。最初の試みが不成功に終らうが、最初の代償物が、他愛のないものであることが分からうが、そんなことには關係なく。あなたはその理由を御存知の筈である。永い間には理性と經驗には何物も抵抗できない。然して宗教のこの兩者に對する矛盾は餘りにも明白である。淨化されたる宗教思想と雖も、それが宗教の慰安成分の幾分でも留めて置かうとする限り、この運命を免れることは出來ない。勿論それが、性質の決定し難い、意圖の認識し難い、より高き精神的本體の主張に止まるならば、科學の抗議に對しても安全である。が、さうなると人間の興味からも見棄てられる。

次に第二の點。幻想に對するあなたと私の態度の差に注意されたい。あなたは全力を盡して宗教的

幻想を擁護しなければならない。もし、その價値が無くなると、——そして實際無くなりさうなのだが、——さうするとあなたの世界は崩壞し、あなたはあらゆるものに、文化にも人類の將來にも絕望するより外ないのである。かかる隸屬から私は、我々は自由である。我々は幼時の願望の大部分を斷念する覺悟なのであるから、我々の期待の二三のものが幻想であると分つても平氣でゐられるのである。

宗教教義の壓迫から解放された教育は人間の心理的本性を餘り變へないかも知れない。我々の神ロゴスはあまり全能ではなく、彼の先輩が約束したことのほんの一小部分しか實現しないかも知れない。それを認めなければならないとなれば、我々は諦めを以て忍ばう。宇宙人生に對する關心を我々はその爲失ひはしない。何故なら我々は一箇所に、あなたの持つてゐない足場を持つてゐるからである。我々は科學的硏究によつて宇宙の實在に關して何事かを知り、それによつて我々の力を高め、我々の生活を整へることが出來ると信じてゐる。この信念が幻想であるならば、我々はあなたと同じ地位にある譯である。だが科學は數多くの重要な成績によつて、幻想ではないと言ふ證明をしてゐる。科學は多くの公然の、然して更に多くの覆面の敵を、科學が宗教的信仰を衰微せしめ、それに沒落の脅威を與へたことを許し得ない人々の間に持つてゐる。人は科學が如何に僅かしか教へ得ず、如何に較べ

物にならない程多くを闇の中に殘してゐるかを責める。だがその人は、科學が如何に若いか、その始まりは如何に困難であつたか、そしてその問題に對して人智が進んだのは如何に問題にならない程僅かな期間であるかといふことを忘れてゐるのである。我々の判斷があまりにも短い期間を基礎にしてゐるといふ風に、我々は皆誤解してはゐないだらうか？　地質學者の例を考へて見るべきであらう。同樣人は科學の不確實性について、今日法則として傳へられることも次の時代には誤謬と認められ、同樣に短い適用期間を持つ新しい法則によつて換へられるといふことを訴へる。だがそれは不當であり、又幾分事實に反してゐる。科學的意見の變化は發達であり進歩であつて、顚覆ではない。始め無條件に妥當だと思はれてゐた法則が、より總括的な法則性の特殊例であることが分つたり、後になつて初めて知られた他の法則によつて制限されたりするのである。眞理への粗野な接近が、もつとよく順應したものによつて置き換へられ、それが更により以上の完成を待ち受けるのである。多くの領域の研究に於てはまだ、やがて不十分として捨て去らねばならない假定を試みてゐる時代が過ぎ去つてゐない。が、他の領域には既に確かな、殆ど不變の認識の核心がある。最後に人は、科學的努力は我々自身の統率の條件と關聯して、主觀的結果より外供給することが出來ないから、外界の事物の眞の本性には到達し得ないものであると考へることによつて、その價値を根こそぎ奪ひ去らうと試みた。此處

では人は科學的研究に取つて決定的な二三の重要點を見逃してゐる。卽ち、我々の統率卽ち我々の精神的裝置は外界の探索のための努力によつて發達したものであり、從つて幾分の合目的性をその構造の內に實現してゐるに相違ないこと、それ自身が我々の究めんとする宇宙の成分であること、そしてそれはかかる研究を甚だよく許すこと、科學の任務は、宇宙が我々の統率の特質に從つて如何に我々に現れねばならないかを示す事に制限するならば、十分劃定されてゐること、然して、最後に、我々の知覺的精神裝置を度外視した宇宙構成の問題は空虛な抽象であつて、實際的利益のないものであることを見逃してゐる。

さうだ、我々の科學は幻想ではない。科學の我々に與へ得ないものが、何處か他の處から得られると思ふのが幻想であらう。

素人分析の問題

序　言

この小論文の題は、其の儘では明瞭でない。そこで説明するならば、素人とは卽ち醫者でないものであり、そして問題は素人にも分析を行ふことが許さるべきかと言ふのである。この問題には時間的な、又場所的な制限がある。誰が精神分析を行ふか、といふことを、從來何人も顧慮しなかつたといふ限りに於て時間的である。實際このことに就ては人は餘りに無關心であつて、何人も精神分析を行ふことは當を得ない、と希望する點で一致してゐた。尤もこれには種々の理由はあつたが、それら異る諸理由の根柢には同樣なる忌避が含まれてゐた。從つて唯醫者のみが分析すべきだといふ要求は、分析に對しては、一つの新しい、明かにより好意的な態度である。――但し好意的態度と言つても、單に以前からの態度の稍調節された派生物に過ぎないといふ疑念を避け得る場合のことである。分析治療は、事情に依つては企てられるべきものであるが、然し若し企てられる場合には、唯醫者のみに許されなければならないと考へられてゐる。然る時はこの制限の何故かが調べられる必要があらう。

この問題が場所的に制限されてゐるといふ理由は、それが總ての國々に同一の意義を以て觀察され

ないからである。獨逸と亞米利加に於ては、この問題はアカデミツクな論爭を意味してゐる。何故かといふと、この國々に於ては、總ての病人が彼の望む方法と望む人とに依つて治療し得るし、又希望の人は誰でも、單に彼の行爲に對して責任をもちさへすれば「素人醫者」Kurpfuscher として任意の病人を治療し得るからである。法律は、病人の受けた損害の賠償に呼ばれる前には、決して干渉しない。所が墺太利に於ては、私はこの國でこの國の爲に書いてゐるのであるが、法律は豫防的のものであり、素人は、その結果如何を問はず、病人に治療を施すことを禁じてる。此點佛蘭西も同樣である。此處に於て素人卽ち醫者ならざる者が、病人に對し精神分析を以て臨むことが許されるかどうかの問題が、實際的意義をもつてくる。然し此問題は提出せられただけで、もはや、法律の條文に依り旣に決定されてゐる樣にも見える。病人は神經病患者であり、素人は醫者でないし、精神分析は神經病患者の恢復及び快癒に對する處置であり、總て、此等の治療は醫者に留保されてある。從つて素人が神經病患者に分析を行ふことは許されてゐないし、若しそれが行はれる場合には罰せられるのである。斯かる簡明な事情の下にあつては、素人分析の問題は敢て、取扱はれないかも知れない。然しながら、法律的に問題にならない迄もやはり顧慮せねばならない二三の錯雜したことが出てくる。恐らくこの場合には、病人は他の病人と異り、素人も本來の素人でなくなり、醫者も人々が醫者として

期待し得るものではなくなり、又醫者の權利として與へられてゐたものとは違つて來るといふことが起るであらう。この事が證明されるならば、法律を若干變更して當面の場合に適用することは正當な要求であらう。

一

上述の事項の行はれるか否かは、分析治療の特殊事項を知る義務を負つてゐない人々に依属する。我々の任務は、此公平なる人々即ち我々が今日尙この問題に就て無知であらうと豫想したい此等の人人に、それについて敎示を與へることである。我々の遺憾とする所は、彼等を斯樣な治療の傍聽者になし得ないことである。「分析の狀態」は第三者の介在を許さない。又、それぞれの治療時間も、きはめて不當に評價せられるものであり、任意の會合に居合はせる――無權能な――傍聽者は大抵は何等の有益な印象を得ないで、分析者と患者との間に何が行はれてゐるかを理解出來ぬ恐れもあり、或は又退屈して仕舞ふであらう。だから結局我々の報告で滿足しなければならない。我々はそれを出來るだけ信ずるに足るやうに書かうと思ふ。

そこで病人は彼自ら制御し得ない氣分の動搖に惱むこともあり、又自分は何一つ相當なことが出來ないといふので、精力の衰微を感じさせられる小心な臆病に惱んだり、更に又、未知の人々の中で感じる不安な當惑に惱むこともあらう。彼は理解せずして、彼の職業の履行が故障をもたらすと考へて

ゐるかも知れぬが、それのみでなく、總てのより重大な決定や、すべての企圖も亦故障をもたらすと考へるかも知れぬ。彼は或日——何に依るかは知らないが——恐怖感情の恐しい發作に惱み、それ以來その發作を征服せずに、唯一人で町を歩いたり、汽車に乘つたり出來ず、遂には兩方とも斷念しなければならぬやうになつた。或は又、非常に注目すべきことであるが、思想が勝手に自己の道を歩いて、意志に依つて指導されないこともある。その思想は、病人にとつては無關係ではあるが然し、逃れることの出來ない諸問題を追求するのである。又、家の前面の窓の數を合計しようと言ふやうなひどく滑稽な問題を自分に課したり、又手紙を郵便函に投げ入れたり、ガスの火を消したりするやうな簡單な仕事の際でも直その後で一體自分がそれをやつたかどうかといふ疑念に陷るのである。このことは恐らく不快な煩はしいことに過ぎないが、若し彼が突然に、子供を車輪の下に突き倒したとか、未知の人を橋から河の中に投げ込んだとか、といふやうな考へを防ぎ切れない場合とか、或は自分を警察が今日發見せられた犯罪の張本人として探してゐるその殺人者ではないかと疑つたりする場合には、耐へ得られぬ狀態となるだらう。それは實際明かに馬鹿げたことであり、彼も自分が決して他人に對して何等惡事をやらなかつたことを知つてゐるのであるが、然しこの感情——罪惡感情——は、彼が眞に探索されてゐる殺人であつた場合でもこれより強くはならない位に強いのである。

或は、我々の患者は――今度は女の患者といふ事にする――前のとは違つた風で、違つた種類の病氣をわづらつてゐる。彼女はピアノ彈奏者であるが指がひきつつて役に立たない。若し彼女が會合に出席することを考へる場合直に、自然の欲望がおこるのであるが、その欲望の滿足と社交とは一致しない。そこで會合に、舞踏會に、劇場に、音樂會に出席することを斷念した。最少限度に指を使ふ場合にも、彼女は激しい頭痛や、他の苦痛感に襲はれる。場合に依つては彼女はすべての食事をも、ひきつづいて脅す嘔吐のために放棄しなければならない。最後に、彼女がこの人生に於てはどうしても避け得ない激動を、耐へ得られなくなるのは悲慘である。斯樣な場合には、彼女は、怖しい病狀を想ひ出させる筋肉痙攣を起して屢々氣絕する。

又、他の病人は感情生活が肉體への要求と一致する特殊の領域に於て、自分を妨害されたものとして感ずる。男性としての彼等は異性に對する最も優しい感動に肉體的表現を與へることが出來ないと感ずるが、一方あまり愛してゐない對象に對しては恐らくすべての反應が思ふままになる。或は又、肉感が彼等を、彼等の輕蔑し、又、離れたがつてゐる人々に結び付ける。或は、肉感は、彼等に、遂行することの不快な條件を課する。女性としての彼等は恐怖と嫌惡とに依り、又は未知の障碍に依つて性生活の要求を追ふことが妨げられて居ると感じたり、或は彼等が愛を受け容れた場合には、この

柔順に對して自然が景品として與へた享樂を詐取されたと思ふ。

此等の人々はすべて自分を病氣であると認め、醫者を訪問して、斯樣な神經障害を除去しようと期待する。醫者は又、此等の疾病の屬するカテゴリーを適用する。各自の立場に從つて、Neurashenie Psychasthenie, Phobien, Zwangsneurose, Hysterie 等の異つた名目で病人を診斷する。彼等は症候を與へてゐる器官、心臟、胃、腸、生殖器等を調べて異狀ない事を發見する。彼等は在來の生活法の中止、精神休養、元氣回復の方法等を勸め、それによつて一時的の緩和に成功する——或は何の効果もないこともある。最後に病人は全く專門的に、かうした疾病の治療に從事してゐる人々の居ることを聞き、彼等の分析をうけに出かける。

神經症の現象に就て說明してゐる間に、私の今考へてゐる私の公平なる第三者は、短氣の徵候を示した。さて今、彼は注意に緊張してかういふ。「そこで我々は、今は醫者に見放された患者を相手に分析者は何を企てるのかをきかう」と。

然し兩者の間には、彼等が相互に話す以上には何も起らない。分析者は診察のために器械も用ひないし、又藥劑の處方もしない。若し、出來るならば、治療中に患者を、彼のなれてゐる環境と關係の中におく。このことは何の制限もないが又必ずさう行はれ得るとも限らない。分析者はある一定の時

間に患者に命じて話をさせて聞いたり、又彼に話しかけ、又話を聞かせたりする。

すると第三者の顔には明かに緩和と弛緩とが現れるが然し又、ある輕蔑も明かに現れる。恰も「それつきりか？ ハムレット皇子の言ふやうに言葉・言葉・そして又言葉だ」とでも考へたいやうに。確かに彼の心には、如何なる獨逸人も忘れないだらうあの詩句、即ち言葉は如何に容易に取扱ひ得るかといふ惡魔の嘲笑が思ひ浮ぶ。

彼は又かう言ふ。「それは魔法の一種だ。君は會話をやつて患者の病氣を吹きとばすのだ」と。

若し、それがより速い効果があるものならば、全く正當に魔法であるかもしれない。迅速は魔法の絕對的屬性である。迅速といふよりは効果の突然性と言ひ度い。然るに、分析治療は數箇月又は數箇年をさへ要する。斯かる緩漫な魔法は不思議の特性を失つてしまふ。然し我々は言葉を輕蔑しようとは思はぬ。何と言つても言葉は力强い器械であり、我々が相互に感情を通ずる手段であり、他を承服せしめる方法である。言葉は、言ひ盡し難き有益なものであり得ると共に、恐るべき傷碍を與へ得るものでもある。確かにあらゆるものの始めに行爲があつて言葉はおくれて來た。行爲が言葉に制限された場合には、言葉は多くの關係に於て、文化的の進歩であつた。然し言葉は何といつても元來、魔法であつたし、魔法の作用であつたし、尙、未だに多くの古來からの魔力を保つてゐる。

第三者は更に續けて言ふ。『患者が私よりもより分析治療を理解しようとする心構へがないものと假定する時、君はどうしてその患者の病氣を治癒すべき魔法、卽ち言葉、或は會話の魔法を彼に信じさせようとするか』と。

勿論彼には準備を與へねばならぬし、又それには簡單な方法がある。分析者に對して率直であること、何事も心に浮んだことを故意にかくさぬこと、更に、多くの思想や想起を報告することを拒みたがるすべての妨害を顧慮せざること等が彼に要求せられる。人間はすべて、他人には仲々打明けたがらない。或は絕對に報告出來ないものと考へてゐる事柄があることを知つてゐる。それは彼の『祕密』である。彼は亦、――このことは心理學上の自己認識に於ける大なる進歩を意味してゐるが――自分でさへも認めたがらず、自分にさへも祕密にしたがり、それ故にそれが現れる場合には素早く中斷し、思想の外へ追ひ出さうとする。恐らく彼は自分の思想を、自分自身の自我に祕密にせねばならぬといふ狀態に於て、注目すべき心理學上の一問題の坏芽をさへ認めるだらう。これは實に、彼が常に統一體であると考へてゐた彼の自我は最早統一體でないかのやうな、或はこの自我に對立し得る他の何物かが尙彼の中に存在してゐるかのやうなものである。自我と廣義の精神生活の間の何かしら對立的のものが朧氣乍ら示されよう。そこで彼が何事もかくさずに言へといふ分析の要求を認める場合

には、交際と思想交換はかうした特別な假定の下で、獨得の効果に導き得るといふ期待を容易にいだき得るであらう。

公平なる傍聽者は言ふ。『成程君は神經病者は、すべて彼を壓迫する何物かを、秘密をもつてゐると認め、その秘密を打明けるやうに誘ひ乍ら、彼を壓迫から開放して愉快にするのだ。これは正しくカトリック敎會が昔から人々を支配する保證として利用して來た懺悔の原則である』と。

我々は然りとも又否とも答へなければならない。懺悔は多分いはば『序』Einleitung として分析にはひつてゐるだらう。然し、分析の本質に觸れるとか、或は分析の結果を明かにするとか言ふことからは遙かにはなれてゐる。懺悔に於ては罪人が彼の知つて居ることを語り、分析に於ては、神經病者が知つてゐるよりもより多くを語らなければならぬ。又我々は懺悔が、かつて直接の症候を除去するに與つて力があつたといふ話をきかない。

それに對して第三者は答へる。知つてゐるよりも多くを語るといふことは一體どういふ意味であるか、了解出來ない。然し私は分析者としての君は、患者に對して、懺悔僧が懺悔者に對するよりも、より強い影響を及ぼし得るといふことは考へられる。何故ならば、君はそれだけより永く、より強く、より個人的に患者と關係するから。それから又、君がこの高められた感化を利用して患者を病的思想

から解放し、恐怖を說伏したりすることも考へられる。若し斯樣な方法で、嘔吐、下痢、痙攣等の純粹の肉體症候をも征服し得るならば、それは十分に注目すべきことだらう。然し私は、かうした影響が若し或人を催眠的狀態においた場合に、非常に甘く行くことを知つてゐる。恐らく君は、患者のために盡力することに依つて、たとひ企圖しないでも斯樣な催眠術の關係、卽ち君の人格への暗示的結合を達成するだらう。然る時は君の治療法の不可思議は催眠術的暗示の作用である。私の知る限りではこの催眠術的治療法は、君の言ふ何箇月、何年と永びく分析よりも迅速にやつてゐる」と。

第三者は旣に、我々が最初に彼を評價したやうに、そんなに無知でもなく、當惑してもゐない。彼が精神分析を彼の以前の知識の助けをかりて理解しようと努め、又彼が旣に知つてゐる他の事に結び付けようと努めてゐることは明かにわかる。今我々はこの事は成功しないだらうといふこと及び分析は Sui generis の方法であり、唯、新しい見解を以てのみ或は假定といつてもよいが——理解される新しい、獨得のものであることを彼に明かにするといふ困難な問題をもつてゐる。然し、我々は尙又、彼の先程の注意に對する答を與へねばならない。

君が分析者の特殊の人格的感化のことに就て述べたことは、確かに非常に注意すべきことだ。斯樣な感化は存在するし、又、分析に於ては大きな役割をもつてゐる。然し催眠術に於けると同一のも

のではない。兩者に於ける狀態が全く異つてゐることは、君に證明出來なければならぬだらう。恐らく、我々がこの人格的感化を——「暗示的」要素を——催眠術的暗示の際のやうに症候を壓迫する爲に利用するものでないことを注意すれば十分だらう。更に、この要素を飽くまで分析治療の支持者であり、促進者であると信ずることは誤りだらう。それは最初だけのことで、後には我々の分析の意圖に反抗するので、最も強力な防壓處置に我々を導く。私は今例を以て話を引出すことと、及び打明けることが、如何に甚しく分析のテクニークと隔つてゐるかを君に示したい。若し我々の患者が重い罪を犯してもしたやうに罪惡感情に惱んでゐる場合に、我々は、彼の明白な無罪を高調して良心の苛責から逃れさせやうと助力はしない。このことは既に試みられて無駄だつたから。然し、かうした強い持續的の感情は、恐らくは發表され得る現實のことにどうしても根據をもつてゐなければならぬことを彼に思ひ出させる。

第三者は言ふだらう。『若し、君がかうした同意に依つて患者の罪惡感情を緩めることが出來たなら、不思議に思ふ。然し一體君の分析上の意見は何であるか。そして君は患者を相手に何を試みるのか?』と。

一一

若し、私が君に何か解り易いことを言はねばならぬならば、私は恐らく分析の範圍外では認められない、又評價されない心理學の一部分を知らせねばなるまい。この學說から、我々が病人から何を望み、如何なる方法でそれを達するかが容易に說明せられるだらう。私はそれを、完全な體系づけられた學說であるかのやうに獨斷的に陳述しよう。然しこの學說が哲學的體系と同一に成立したものと信じてはいけない。我々はそれを徐々に發展し永くかかつて各斷片を求め、絕えず觀察との一定の接觸を保ち乍ら變更し、遂に我々の目的に十分適ふやうな形式を獲得したのである。數年前ならば私は尙、この學說を他の形式に表現せねばならなかつたかもしれない。勿論私は今日の表現形式が決定的のものであるだらうとは保證し得ない。君も知る如く、學は決して啓示ではなく、學は其起原を越えて永い間人間の思考の非常に憧れてゐる正確・不變・確實の特性を缺いてゐるのである。然し學は存在すると同樣に、我々のもち得るすべてである。若し君が、我々の學が非常に新しく未だ一世紀にもならぬこと、又それが人間の研究に提出せられ得る最も困難な材料であることを認めるならば、君は私の陳

迹に對して容易に正當な觀方をもたれるだらう。若し君が私について來ることが出來なかつたり、或はより詳細な說明を望むならば、その度每に隨意に尋ねられたい。

『君が始める前に尙聞きたい。君は新しい心理學を講義するといはれるが、私は心理學は決して新しい學ではないと思ふ。心理學や心理學者は十分に存在してゐたし、私は學校でこの學の領域に於ける偉大な行績を聽いて來た。』

私はその行績に就て論駁しようとは思はぬ。然し、若しより詳細に調べるならば、君は此等の偉大な仕事を寧ろ Sinnesphysiologie（感覺生理學）に從屬せしめなければならぬだらう。精神生活に就ての學問は唯一の重大な誤解に依つて妨げられて居たので發展し得なかつた。今日その學は何を包括し、如何樣に學校で敎へられてゐるか？　かの價値ある Sinnesphysiologisch（感覺生理學的）判斷以外に言語の使用の爲にすべての敎養人の共有財となつた我々の精神的事象の若干の分類及び定義がある。このことは我々の精神生活の理解にとつて十分でない。すべての哲學者、詩人、歷史的自傳記錄作者が各自自分の心理學を組織し、精神活動の關係や目的に就て特有の假定を提出してゐるのを君は氣が付かなかつたか？　尤も其等の假定はすべて多少は心をひくが、同時に、すべてが一樣に不確實である。そこには明かに共通の基礎が缺如してゐる。それ故に心理學的領域に於てはいはば何等の

尊敬も、何等の權威もないことになる。そこでは各人が隨意に『暗撃』（Willerm）出來る。若し君が物理學的又は化學問題を投ずる場合に、專門知識をもたぬ人はすべて沈默するだらう。然し君が心理學的主張を敢てしようとする場合には、君はすべての人からの判斷及び反對に對して心がまへをしてゐなければならぬ。恐らくこの領域には何等の『專門知識』もないだらう。各人が各自の精神生活をもち、それ故に各人が各自を心理學者と考へる。然しこれは何等十分に正當な主張であるとは思はれない。保姆を志願したある人が、お前は又小さな子供をも扱ふことが出來るかと聞かれて、私自身も一度小さな子供だつたと答へたといふ話がある。

「そして、精神生活のこのすべての心理學者に看過されてゐる『共通の基礎』を君は病人の觀察に依つて發見しようとするのか？」

私はこの由來が我々の狀態を無價値にするとは思はぬ。例へば胎生學は、若しそれが生來の不具の發生を容易に說明し得なかつた場合には、何等の信用もかち得ないだらう。然し、私は、思想が獨自の道を進み、その結果非常に無關心な問題を思案するやうに强ひられてゐる人々のことを君に語つた。君は學校の心理學が、かつてかかる異常性の說明に最小限度の貢獻でもしたと思ふのか？最後に夜間に、思想が獨自の道を辿り、我々が理解出來ず、我々を驚かし、又病的所產ではないかと思はせる

樣な事物を作り出すことは、我々すべてに起つてゐる。私は夢のことを言つてゐるのである。人々は常に夢が或意味、或價値をもち、何かを意味してゐると堅く信じてゐた。この夢の意味を學校心理學は決して說明出來なかつた。學校心理學は夢とは少しも關係出來なかつた。若し說明を試みた場合には、それは非心理學的なもので、感覺の刺戟や種々の腦の部分の不同な睡眠等々へ歸着せしめるだけだつた。然し我々は夢を說明出來ぬ心理學は、ノルマルな精神生活の理解にとつても無用であり、學と呼ぶ何等の權利も持たぬものと言ひ得る。

「君は挑戰的になつて來る。實際君は急所にふれた。私は實際、分析の大なる價値が夢におかれてゐること、分析とは、夢の背後にある現實の事件の想起を求めることを意味してゐること等々を聞いた。然し又、夢の解釋は、分析者の自由意志に委ねられてゐること、分析者自身が夢の解釋の方法や、又夢から結論を抽き出すことの是非に就ての論爭を終へてゐないことなども聞いてゐる。若しそれが事實ならば、君は分析が學校心理學に對しても優越をそんなに太くアンダーラインすることが出來るのか？」

君は本當に、多くの正當なことを言つた。夢の解釋は分析の理論にとつても、實際にとつても、比較すべからざる重要性をもつに至つた。若し私が挑戰的に見えるならば、それは私にとつては單に精

護の手段にすぎない。然し、若し私が多くの分析者が夢の解釋を以て惹起したあらゆる不都合を考へる場合、私は、元氣を失ひ、我々の偉大な諷刺家、ネストロイの悲觀的な言葉を、卽ち、すべての進歩は常に最初見たより、丁度半分だけの大きさに過ぎないといふ言葉を承認したくなるだらう。然し君はかつて人間は彼の手にはひるすべてのものを錯亂し、歪めるといふこと以外のことを見たことがあるか？　幾分の周到さと自制とを以てせば、夢の解釋も大部分の危險は確かに避け得られよう。然し君は、我々が斯樣に話を進める時、私の講義を始めることが出來ぬだらうと思ひはしないか？

『左樣、私は君をよく理解したのに、君は新しい心理學の基礎的假定などを語らうと欲したのだ』

そこから始めようとは思はなかつた。私は君に我々が分析研究の間に、精神器官の構造に就て如何なる概念を形成したかを聞かせようと企ててゐるのだ。

『君の言ふ精神器官とは何を意味してゐるのか？　そして何から作られてゐるのか？』

精神器官は何であるかは間もなく解るだらう。如何なる物質から出來てゐるかは、どうか聞かないで欲しい。それは心理學的關心事でない。心理學は、丁度、光學が望遠鏡の側面が金屬か、厚紙叢か、どちらから作られてゐるかに無關係であると同樣に無關係であることが出來る。我々は素材の見地を一般に顧みずに、空間的のそれを顧みよう。我々は精神作用を營む未知の器官を、卽ち眞に、多くの

部分から——それを我々は Instanzen と呼んでゐるが——構成されてゐる一つの器械のやうに考へる。其等の部分の各々が獨得の機能を備へ、一定の空間的關係を、相互間に保つてゐる。卽ち、前と後、表面と內面の空間的關係は、先づ單に我々に機能の規則的な關聯を說明するといふ意味をもつてゐる。解るか？

『否、多分後には解るだらう。然し、それはどつちにしろ、博物學者には最早存在しない精神の特殊な解剖である』

君の欲することは科學に於ける他の多くの補助概念同樣、補助概念である。最初のものは、常に可なり粗野であつたのだ。Open to revision（修正に進め）とは、かうした場合に言ひ得る。私はこの場合、通俗的になつた『かのやうに』（Als ob）を引合に出すことを無用と考へる。かくの如き「虛構」——さう哲學者ヴァイヒンゲルは、呼ぶだらうが——の價値は、如何に多くそれを以てなし得るかにかかつてゐる。

更に先を續けるために、我々は常識の上に立たう。そして人間の中に一つの精神知識を認める。それは一方には感覺の刺戟と肉體慾望の知覺との間、他方ではそれと發動的行爲との間に介在し、一定の意圖で彼等の間を調停するものである。我々はこの知識を自我とよぶ。これは何も新しいことでは

なく、哲學者でない皆がさう認めてゐるし、たとひ哲學者でもさう認めてゐる人がある。然し我々はこの假定で精神器官の説明が言ひ盡されたとは思はぬ。我々はこの自我の他に、自我よりも一層包括的な宏大な朦朧とした他の精神領域を認めて、それを他我（Es）と呼んでゐる。先づ兩者の關係を見なければならぬ。

君は恐らく、我々がこの二つの精神の Instanz 或は Provinz の記號に、響よいギリシヤ語の名稱を引用せずに、簡單な代名詞を選んだことに異議をはさむだらう。然し我々は精神分析に於ては、通俗の思考法と絕えず接觸することを好むし、又其等の概念を放棄する代りに、學的に利用しようとする方を選んでゐる。さうすることに依つて、利得がある譯ではないが、我々の學問が、非常に聰明ではあるが、必ずしも學的知識のあるとは限らない患者から理解されなければならぬといふ理由からである。非人稱の他我（Es）は直接に普通人の或表現法と密接に關係してゐる。人はいふ『何か自分の頭に閃いた。この瞬間自分よりも强いものが自分の內部にあつたのだ』と。

心理學に於ては我々は唯比較對照の助力を以て說明出來る。このことは何等特殊のことでもなく、他の學に於てもさうである。然し我々はこの比較を常に變化しなければならぬ。何物と雖も我々を十分永く止めることは出來ない。そこで若し私が自我と他我の關係を明瞭にしようとするならば、どう

か君は、自我は他我の前面の一種であり、前地であり、いはば、同一のものの外部の樹皮層（Rinden-schicht）であることを考へて欲しい。後者の比較は固持され得る。我々は Rindenschicht がその特性を、接觸する外部の媒介物の修正する影響に負うてゐることを知つてゐる。故に我々は自我は外界の（現實の）影響に依つて、精神器官の卽ち他我の修正せられた層であると考へる。ここで君は、我々が精神分析に於て如何なる方法で空間的理解を愼重に取扱つてゐるかを知るだらう。實際、自我は表面的であり、他我は內面的である。尤も外からの觀察に依るが。自我は現實と他我、卽ち本來の精神的なものとの中間に存在する。

『私は君に、どうしてこのすべてのことが知られるかを聞かうとは少しも思はぬ。が、この自我を他我とをどうして分離したか？　又、何が君をさうさせたかを聞きたい。』

君の問は私に話を進めるのに適當な道を示して吳れる。卽ち、自我と他我とは多くの點で非常に相互に違つてゐることを知るのは重要なそして價値あることである。又、自我に於ては、精神的活動の經過にとつて他我に於けると異つた規則が適用され、自我は他の目的を他の方法で追求する。それに就ては多くのことが言はれ得るだらう。が、君は一つの新しい比較と一つの例證を以て滿足してはくれまいか？　戰爭中に作られた前線と後方との差異を考へ給へ。我々はその當時、前線には後方に於

けると違つた多くのことが起つたこと、又後方には、前線に禁ぜられねばならぬ多くの事が許可されてゐたことなどを不思議と思はなかつた。決定的の影響は勿論この場合には敵の接近だつたし、精神生活にとつては外界の接近である。外——他——敵、この三つはかつては同意語の概念であつた。さて今後は例證であるが、他我の中には、何等の葛藤も起らぬ。矛盾對立は錯綜せずに竝存し、又屢々、調停の成立に依つて相殺される。斯樣な場合に、自我は決定せねばならぬ葛藤を感ずる。そしてこの決定はある努力が他の努力の犧牲になることに依つて生ずる。自我は合一へ、綜合への著しい努力を特徴とする組織である。この特性は他我には缺如してゐる。いはば無聯絡なのであり、個々の努力は、その目的を相互間の顧慮なしに獨自に追求する。

『若し、斯樣な重大な精神的「後方」が存在するならば、分析の今日まで、それが看過されて來たことを君はどう說明し得るか？』

そこで我々は君の以前の質問に歸つたことになる。心理學は十分接近してはゐるが、支持出來ない假定を固執し乍ら、他我の領域への入口をさへぎつてゐた。卽ち、すべての精神活動は意識的であり、精神的なるものの特質は有意識であること、又、無意識的な事件が我々の腦髓に存在しても、それは精神活動の名に價せず、心理學は何等關知しないことである。

『私は、然しそれが自明のことだと思ふ。』

實際多くの心理學者もさう考へてゐる。然し、それが誤りであること、即ち、全く目的に適はない分離であることは、容易に示される。安易な自己觀察は、準備なくして起り得る想起をもち得ぬと說いてゐる。然し何と言つても眞に精神的性質であつたに違ひない君の思想のこの前階について、君は何も知らない。君の意識には準備の終れる結果のみが現れる。君は時々追補的に、この準備の思想構成を再構造に於けるやうに、意識し得るのである。

『恐らく注意がそれた結果、此等の準備に氣が付かなかつたのだ。』

獨斷だ。君は事實を顧みない結果、精神的性質の活動、屢々非常に混亂した活動が、君の頭の中を通るのだ。其等に就ては、君の意識は少しも經驗してゐない、即ち君は少しも知らないのである。それとも君は、君の言ふ「注意」の多少といふことが非精神的活動を精神的活動に變化するに十分であると認めてゐるのか？　結局、何の爲の論爭か？　催眠術的實驗に於ては、斯樣な意識されなかつた意志の存在が、知らうと欲するすべての人に否定し難く立證されてゐる。

『私は否定しようとは思はない。最後には理解すると思ふ。君の自我と呼ぶものは、意識であり、君の曲我は、現今問題となつてゐる所謂潜在意識である。然し何の爲に新しい名稱に依る假装舞踏が必

要なのか？」

決して假裝舞踏ではない。これ等の異名などは不用である。科學の代りに文學を與へようとし給ふな。若し誰か潛在意識に就て語る場合に、私は知らないが、彼は、局部的に精神の内部に、意識の下部にある何物かを、或は、質的に、いはば下界のといつたやうな他の意識を考へてゐるやうだ。恐らく彼は結局何物も明瞭にしないだらう。唯一の許される對立は意識的か無意識的かの間にある。然しこの對立が自我と、他我との分離と一致すると信ずるならば、重大な誤謬だらう。全くかく簡單ならば、素晴しいものであり、我々の學問は譯のない遊戯であらうが、然し實際は、かくの如き簡單なものでない。他我の中に起るすべてが無意識であり、無意識に止り、自我の中の事象のみが意識的であり得るといふことだけが正しい。然し、自我の中の事象がすべて常に必然に意識的であるのではない。寧ろ自我の大部分は永久に無意識に止り得る。

精神的事象の意識化は複雜な問題である。私はどうしても、それについて假定してゐることを――再び獨斷的に――君に語りたい。君は自我が他我の外的な、周圍の層であることを記憶してゐる。我我はこの自我の最も外部の表面に、特殊の、外界に直接に向けられた Instanz 系統・器官があると信ずる。その器官の刺戟に依つてのみ、我々が意識と呼ぶ現象が起るのである。この器官は外部から

刺戟されて、即ち感覺器官の助力に依つて外界の刺戟を受け容れる。と同様に内部からも刺戟せられる。そこでは最初に他我の中の感覺を、次に自我の中の事象を知覺し得る。

『話はだんだん不快になり、だんだん私の理解からはなれて行く。君は素人が、即ち醫者でない人が分析治療を行ふべきかどうかの問題の討議に私を呼んだのだ。さうすると、君は何の爲に、君がどうしてもその權能を私に納得させ得ない大膽な漠然たる理論に就て説明をするのか?』

私は君を納得させ得ないことを知つてゐる。それはどうしても不可能であり、それ故に亦私は企圖しない。若し我々が學生に精神分析に於ける理論的敎授を與へるならば、我々は最初は如何に少く彼等に印象を與へるかを觀察出來る。彼等は分析の理論を彼等を養つてゐる他の抽象的學問と同様に同一の冷淡さを以て受け取る。若干の人は恐らく納得させせられることを望むだらうが、然し彼等が納得してゐるといふ痕跡は少しもない。さて我々は亦、他人に分析を行はうと望む各人は、前以つて自分が分析を受ける事を求める。先づ『自己分析』(誤解されてかく呼ばれてゐるのだが)の過程に於て、若し彼等が分析に就て主張した事象を自分自身の身體で――より正確に言へば、自分自身の靈で――如實に體驗するならば、彼等は確信を得、それに依り他日分析者として指導されるのである。さういふ譯で、私は君に、自身の經驗に依る確證を持たない君に、唯不完全な、短縮された又それ故に不明

瞭な理論の叙述を述べ得るだけであるから、如何して第三者たる君に我々の理論の正當さを納得させることを期待出來よう？

私は別の意圖で取扱つてゐる。我々の間には分析が有用であるか、無意味であるか、又、分析がその提出に於て正しいか或は大きな誤謬におちてゐるか、の問題は決して存在しないのである。私は君に我々の理論を解からうとする。何故なれば、かくして、私は君に、分析は如何なる思想內容をもち、個々の病人の場合に如何なる假定から出發してゐるか、又病人に何を試みるか等を最もよく明瞭にすることが出來るから。それに依つて全く決定的の光が素人分析の問題に投げられる。兎に角、靜かに し給へ。君がここまで私について來たから、もう君は最も不快なことを征服したのだ。すべての次の事は容易になるだらう。然し、今一寸休憩させて呉れ給へ。

三

『如何にして神經病の發生が考へられるかを、君の精神分析の理論から說教して貰ひたいと思ふ。』

說明しよう。然し、その目的のために、我々は自我と他我とを、新しい見地から、力學的のそれから、即ち、彼等の中に、或は彼等の間に動いてゐる諸々の力を顧慮して研究せねばならない。先刻は實際精神器官の說明で滿足したのだ。

『若し、先刻のやうに、そんなに理解し難いものにならないなら!』

ならないやうに私も希望する。君は間もなく正しい通路を見出すだらう。そこで我々は、精神器官を活動に驅る諸々の力が、大なる肉體欲求の表現として、肉體の諸器官の中に生ぜしめられたことを認める。君は我々の詩人哲學者の「飢餓と愛」といふ言葉を記憶してゐるだらう。兎も角、頗る重んずべき一對の力である。我々はこの肉體欲求を、それが精神活動に對する刺戟を現す限り、衝動(Triebe)と呼んでゐる。この語は多くの近代語がドイツに對して羨望してゐる言葉である。この衝動は他我を充してゐる。要約すれば、他我の中のすべての精力は、この衝動から生れる。自我の中の

諸々の力も決して他のものから生れず、他我の中の衝動から生れる。然らば衝動は何を欲するか？満足、即ち肉體欲求が消滅し得るやうな狀態の發生を望む。欲求緊張の低下は我々の意識器官から、愉快に感ぜられ、その上昇は不快に感ぜられる。この動搖から、快不快感情の連續が生じ、その連續に從つて全精神器官はその活動を調節する。我々はここで「快樂の原理の支配」に就て語らう。

若し、他我の衝動要求が何等の滿足をも見出さぬ場合には、耐へ得ない狀態になる。經驗は斯くの如き滿足狀態が唯、外界の助力を以てのみ恢復され得ることを示す。かくて、他我の外界に向けられた部分自我が活動する。船を動かすすべての力が他我に依つて齎されるとすれば、自我はいはば、それなしでは目的を達し得ぬ舵の役目を引き受ける。他我の內部の衝動は迅速な顧慮する所なき滿足を目がけて突進するが、斯くの如き方法では、何事も達し得ないし、又、大きな損害をさへ蒙ることがある。そこでこの不成功を防ぎ、他我の要求と現實世界の反抗との間を調停するのが自我の任務となる。自我は二つの方向に活動を展開する。一方に於て自我は、無害な滿足の惠まれたる瞬間を捕へるために感光器官、意識系統の助力を以て外界を觀察し、他方、他我に影響し他我の「情熱」を制御し、衝動を誘つてその滿足を延期せしめ、必要と思はれる場合には、衝動の目標を修正し、又は報償を以て、それを（目標を）斷念せしめる。斯樣な方法で自我は他我の興奮を制御し乍ら、以前の唯一

の標準である快樂原理を、所謂實在原理を以つてかへる。此實在原理は快樂原理と同一の究極目標を追求するが、然し現實世界に依つておかれた諸々の條件を斟酌する。自我は後に、滿足の保證に對し上述の外界への顧慮の他に、尙他の方法があることを知る。人々は亦變化し乍ら、外界に干渉し、外界の中に故意に滿足を可能ならしめる條件を再生することが出來る。然る時に、この活動は自我の最高の仕事となる。激情を抑へ、實在の前に屈し、或は、その味方となり外界に對して自己を防禦することが、如何なる時に、より合目的であるかの決定は、世才の總てを要する處である。

「若し、他我が自我のかくの如き支配に滿足するならば、私が誤解して居ないとして、一體どちらが强いのであるか？」

若し、自我が完全なる機能と實行能力とを有し、他我のすべての部分に接近し影響を及ぼし得るならば、結構である。自我と他我との間には何等自然の對立はなく、兩者は相關し、健全なる場合には實際的に相互に分離する必要はない。

「それはすべて本當らしい。然し、私はこの理想的狀態の何處に疾病障害が起るかわからない」

尤もだ。自我と自我の他我に對する關係が、この理想的要求を充す限りは、何等神經障害はおこらぬ。病氣の侵入地點は豫期せぬ所にある。たとひ、一般病理學の通曉者は、最も意味深い發展と分化

こそ、病氣や機能の故障に對する萌芽を含むと確證されても、不意打ちを喰ふ事はないにしても。

「君はあまりに學者らしくて、私には解らない。」

少し詳しく話さねばならない。小さな生物は、破壊的な作用に充ちてゐる強力な外界に對しては、實に貧弱な無氣力な物ではないか。何等十分な自我組織を發展し得なかつた幼稚な生物は、すべてこれ等の「傷害」にさらされてゐる。それは衝動欲望の「盲目的」な滿足に生き屈きその爲に破滅する。第一に、自我の分化は、生命保存への第一歩である。破滅からは何も學ぶものがないが、若し幸ひに、傷害に打勝つた場合には、同様な狀態の接近を注意し、傷害に依つて體驗した印象を短縮して反覆することに依り、即ち恐怖感情に依つて危險を豫知する。危險の認知に對するこの反作用は、十分に強くなり外界の危險なものに、能動的な方法でのみならず恐らくは攻撃的に向ひ得るやうになるまで、生命を別條なからしめる逃亡の手段を準備する。

「この話は前に、君の約束したものとはひどくかけ離れてゐる。」

君は、私が如何に約束の實行に、近づいてゐるかに氣がつかないのだ。後に實行能力のそなはる自我組織をもつ生物においても、自我は最初幼年時代には弱くて、他我から殆ど區別されない。さて君は、この無力な自我が、他我の中からの衝動欲求を知る場合に何が起るかを考へ給へ。自我は已に他

我の衝動欲求の滿足が危險であること、又傷害狀態を、或は未だそれに對する力をもたない故に制御出來ない外界との衝突を惹き起すだらう、といふことを感付いてゐるために、他我の衝動欲求に反抗したがつてゐるのである。その時自我は衝動の危險を、恰も外部の危險でもあるやうに取扱ひ、逃亡手段を試み、他我の關與から身をひいて、いつもは衝動の刺戟に向けるすべての助力を拒んだ後それを成行にまかせる。自我はこの衝動刺戟の排斥を企ててゐると言へよう。このことは一時的には危險を防ぐに成功するが、然し罰せられずに內なるものと外なるものを交換することは出來ぬ。自己自身から逃亡することは出來ない。この排斥に於て、自我は常に彼を修正してゐる快樂原理に從ひ、その代りに損害を負はねばならない。この損害は自我が絕えず彼の勢力範圍を制限したことに存する。排斥された衝動興奮は今は孤立し、獨立し、接近し難く、然し又影響も受けず、それ自身の道を行く。自我は大概は强化された後に於ても、最早この排斥を斷念し得ない。彼の綜合は妨害せられ、他我の一部分は自我にとつて、常に禁制の地である。孤立せしめられた衝動興奮は、然し又、無爲に終らず、ノーマルな滿足が禁ぜられてゐるのに對して代償することを知り、自分を代表する精神的派生物を生み、同等に自分の影響に依つて自我から奪ひ取つた他の諸々の事象を連結し、最後には、認知し難きまで毀損せられた賠償の形で自我の內部に意識にまで貫き、人々が症候と呼ぶものを作る。突然

に、我々は神經障害の狀態を見る。卽ち自我は彼の綜合を妨げられ、他我の諸部分に何等の影響も及ぼさず、排斥されたものとの新しい衝突を避ける爲に多くの活動を斷念せねばならず、症候卽ち排斥された興奮の派生物に對する無益な防止活動に疲れ切つて仕舞ふ。又他我の中には個々の衝動が獨立し、全體の關係に顧慮なく、目標を追求し、他我の深底に命令してゐる單純な原始心理學の法則に、より多く聽從するのみである。我々が全體の狀態を槪觀する時、神經病の發生の單純な形式として次のことが示される。卽ち自我は他我の或關與を不適當な方法で抑壓せんと試みて失敗し、それに對して、他我が復讐したのである。それで、神經病は自我と他我との間の葛藤の結果であり、自我は、精細な硏究の示す如くに、徹底的に現實の外界への順應性を固持しようと欲するが故に、葛藤の中にはひるのである。外界と他我との間には對立があり、そして自我が自己の最も內的な本質に忠實に外界に味方をするから、他我との葛藤に陷るのである。然し、注意し給へ。この葛藤の事實が、病氣の條件を作るのでなく、——何となれば、實在と他我との間のかかる對立は避け難きものであり、自我は兩者を調停するといふ固定の任務をもつてゐるから——寧ろ、自我が葛藤の調停に不十分な排斥手段を利用した事情に依る。このことは然し、自我がその任務を課せられた時には、未だ發達しない無氣力の狀態であつたことに原因をもつてゐる。決定的排斥は實際すべて幼年時代に起る。

『何といふ注目すべき方法だらう。私は君の忠告に從ひ、批評はしないが、君は唯精神分析が神經症の發生に就て信ずること、及び、その結果、精神分析が何をその抵抗に企てるかといふことを示さうとするに過ぎない。私は多くの質問をもつてゐるが、二三のものは後に亦提出するだらう。第一に私は君の思想過程の根據をもつと構築し、自ら一の理論をも試みて見たいといふ誘惑を感ずる。君は外界——自我——他我の關係を展開し、神經病の條件として自我が外界に從屬して、他我に抵抗することを擧げてゐる。斯樣な葛藤に於て、自我が他我から奪ひ去られ外界への顧慮を拒絕するといふやうな他の場合は考へられないのか？　かくの如き場合には何が起るか？　素人としての私の、精神病の性質に就ての考へに依れば、自我のこの決定的危機が精神病の條件であるやうだ。斯樣な現實からの絕緣が、どうしても精神病の本質的なもののやうに思はれる。」

左樣それに就ては私自身も考へた。のみならずそれは、たとひ、この臆測の證明が眞に複雜した關係についての議論を要するとは言へ、適切なものと思ふ。神經病と精神病とは明かに密接な相似をもつてはゐるが、然し、どうしても決定的な點で相互に分れねばならぬ。この點は、恐らく斯樣な葛藤に於ける自我の左袒といふことであらう。他我は兩方の場合に於ても、彼の特性を盲目的な頑固に依つて保存するだらう。

『續けて下さい。君の理論は神經病の治療に對して如何なる暗示を與へるか？』

今、我々は治療法の目標を容易に書きかへることが出來る。我々は、自我を回復し、制限から解放し、以前の排斥の爲に失つた他我に對する支配を再び自我に與へようと欲する。唯この目的の爲に我我は分析を行ひ、我々のすべての技術はこの目標に向けられてゐる。我々は、かつて起つた排斥を探求し、そして自我を動かし、排斥を我々の助力を以て修正し、葛藤を逃避の試みに依るよりも一層よく調停しなければならぬ。この排斥は非常に早い幼年時代に屬するから、分析の仕事も我々をその時代まで遡らせる。我々が病人の想起の中に再生させようと望む以前の大概忘れられてゐる葛藤狀態を知る道を示して吳れるのは、病人の症候、夢、自由な想起等である。其等は、他我の心理學の影響の下に我々の理解にとつて異れる表現法をとつてゐたから、我々は先づ、第一に其等を解釋し、飜譯せねばならない。患者が我々に、內部の反抗なしに、報告し得ない想起、思想、記憶等から、我々は、其等は何かしら排斥されたものと關係してゐるか、或はそれの派生物であることを假定出來る。我々は病人を反抗を越えて報告するやうに勵まし、彼の自我を、逃亡の誘惑への愛着を征服し、排斥されたものの接近を調停するやうに敎へ込む。最後に排斥の狀態を彼の想起の中に再現させ得れば、彼の柔順は輝かしく報いられるのだ。時の全き差異は好都合であり、幼稚な自我が、かつて驚かされ、逃

避させられたものも、成長した強化された自我には、屢〻單なる兒戲として現れるのだ。

四

「君がこれ迄、語つたすべては心理學であつた。屢ゝ奇妙にもろく、朦朧と響いたが、然し兎に角純粹だと言へよう。成程私はこれ迄君の精神分析には殆ど知識がなかつたが、然し精神分析は、その名稱に何等の權利も與へられてゐない事物を主として取扱ふといふ評判を私は聞いてゐた。君がこれ迄何等さうしたことに觸れなかつたのは、私にわざと控目にしてゐるといふ印象を與へた。又私は他の疑問を抑へることが出來ない。神經病は何と言つても、君自身の言ふやうに精神生活の障碍である。此等の根柢の深い障碍に於て、我々の倫理學、良心、理想等の重大なものが何等の役目をも演じてはならぬだらうか?」

「君は我々のこれ迄の議論の中で、最もつまらぬものと最も意味あるものとの注意を缺いてゐる。然し、それはつまり、精神生活の內容を未だ取扱はなかつたからであらう。然るに今、君は私に、議論の進渉を妨害する妨害者の役目をさへ演じさせてゐる。私が君に心理學を話したのは、君に、分析の仕事は應用心理學、而も分析を除外しては知られてゐない心理學の一部分であるといふ印象を與へる

ことを望む限りに於てであつた。そこで、分析者は第一に、この心理學、無意識の心理學を學ばねばならぬ。少くともそれが今日知られてゐる限りに於て。我々はこのことを後になす推定に用ひよう。然し君の今言つた純粹性に對する暗示は何を意味してゐるか？

『さて、分析に於ては、最も祕密な――而も最も不快な性生活の問題が徴を盡して話題に上るといふことが一般に言はれてゐる。若し、さうであるならば――私は君の心理學的說明からは、それがさうでなければならぬといふことを推定出來ないが――それは斯樣な治療法は、唯醫者にのみ許されるといふことの論證であるだらう。その沈默に安心出來ず、その特性に、何等の信用もおけぬ他の人々に、如何にしてかく危險な自由を許すことなど考へられようか？』

確かに醫者は性的領域では、ある特權をもつてゐる。彼等は亦、實際、生殖器を檢査することが許されてゐる。たとひ、東洋に於ては、許されてなくとも、又多くの理想改革者達は――君は私が誰を考へてゐるか、知つてゐるだらうが――この特權に抵抗した。然し君は分析に於てはそれが許され、そして何故に許されなければならぬかを知りたいだらう。――實際、それは許されてゐる。それは、第一に、分析が結局、完全な公正といふことに基礎を置いてゐるから、さうあらねばならない。デンゲは言ふ。分析に於ては例へば、財產狀態は各市民に彼が競爭者か、收稅官でない場合にも亦保留せ

られてゐると同樣の精密と公明とを以て取扱はれると。この公正に對する義務が、分析者を重い道德的責任の下におくことに、私は異議ないし、寧ろそのことを元氣に高調するだらう。第二には、神經症の原因と機因の中で、性生活の要素が非常に主要な、優れた恐らく特殊な役目をさへ演じてゐるから、さうあらねばならない。分析は病人の提出する素材、材料に縋り付く以外に何が出來るか？分析者は決して患者を性的領域に誘はないし、又性生活の祕密を取扱ふなどと患者に豫め言ひはしない。彼は患者を隨意に、報告を始めさせ、患者自身が性的事件に觸れるまで靜かに俟つ。私は學生にかう忠告して來た。卽ち我々の敵は、我々が、性的要素が何の役目をも演ぜぬ場合に、打突かるだらうと言つた。我々は性的要素を分析の中に移入しないやうに注意しよう。又かうした場合を見出す好機會を失ふまいと。然し、今日まで、何人もこのことに成功しなかつた。

私は勿論我々の性的狀態の承認が――明瞭な、或は不明瞭な――分析に對する他の人々の敵意の最も强い動機となつたことを知つてゐる。このことは我々を當惑させ得るか？このことは、唯、如何に我々の全文化生活が神經病的であるかを示すに過ぎない。何故なれば一般の自我普通人(ノルマール)も、さう大して神經病者と違つた振舞ひをしてゐないから。かつて獨逸の學者團體の間に、精神分析に就て堂々たる審判が行はれた當時――今日では著しく靜まつたが――一人の辯士は、特殊の權威を要求した。

何故なれば、彼の報告に從へば、彼は病人にも意見を發表せしめるからである。これは、明かに、診斷的な目的でそして、分析者の主張を試みる爲にであつた。然し、彼は附言して、若し彼等が性的の事柄について話を始める時には、彼等の口を閉ぢてやると。君はかかる論據に就て、どう考へるか？學者團體はそれに相應しい方法で、この辯士のために恥ることをせずに、却つて彼に喝采を與へた。

この辯士の論理的撞着は共通の偏見の意識が與へた勝利の保證が說明してゐる。數年後、私の當時の學生の二三のものは、人間社會を性的狀態の束縛から開放しようとする欲求に從つた。この束縛が、精神分析を彼等に課せんとするのであるが。或者は、性的なるものは決して性的狀態を意味せず、他のもの、抽象的なもの神秘的なものを意味すると言ひ、他の者は、性生活は唯、それに於て人間が、彼を權力と支配とへ驅る欲求を實證しようとする領域の一つに過ぎないと言ふ。彼等は少くともその當座は非常な喝采を博した。

『然し、私はこの場合一應は贊成するが、性的狀態が、生物の自然な、根本的の要求でなく、何か他のものに對する表現であると主張するのは、極めて大膽のやうに思ふ。それには唯動物の例をとればよい。』

それは何でもない。若し、それが唯性的狀態の恐しい勢力に對する解毒劑として廣告される場合に

も、世間の人々がそれを喜んで飲み下さないやうな、不合理な混和劑はないものだ。

更に告白するが、君自身が洩らした、神經病の惹起に於て、あまり大きな役目が性的要素に許されてゐるといふことの嫌惡は、第三者としての君の任務と、旨く調和しないやうに見える。君は斯樣な嫌惡に依つて正しい判斷の宣告が妨げられるのを恐れないか？

『さう言はれるのは遺憾だ。私に對する君の信頼は動搖してゐるやうだ。それならば、何故に君は、他の人を公平な第三者に選ばなかつたのか？』

それは、他の第三者も、君と違つた考へ方をしなかつたらうから。若し彼に以前から性生活の意義を承認する心構へがあつたならば、全世界の人々はかう言つただらう。それは、決して公平な第三者ではない。實は君の同志であると。否、私は君の意見に影響を及ぼすことの期待を、決して放棄しない。然し、この場合は、私にとつて以前に取扱はれた場合とは違つてゐるのを認める。心理學的論議に於ては、唯、君が專純粹に心理學問題に關してゐるといふ印象を受取つて與れればよかつたので、君が私を信ずるか否やは問題でなかつた。今度の性的狀態の問題に於ては、君が、君の反對への最も強い動機は丁度君が多くの人々と分ちもつてゐる共同の敵意であるといふ見解をいだくことを希望したい。

『然し、私には何と言つても君に、そんな風な確かな保證を與へた經驗といふものがない。』

よろしい。私は今は、說明を續けることが出來る。性生活は單なる刺戟のみではなく、又、嚴肅な科學的の問題である。そこには知るべき多くの新しいもの、說明すべき多くの特殊なものがある。既に私は君に言つた。分析は患者の幼年時代まで溯らねばならぬ。何故なれば、決定的排斥は、この幼年時代に、そして自我の無力な間に起つてゐるから、と。然し、思春期と共に初めて始まる性生活は、何と言つてもこの幼少時代には存在し得ないではないか？　反對に、我々は性的の衝動興奮は、生れる前から伴つてゐるものであること、然してこの衝動こそ正しく幼稚な自我が防禦の爲に排斥を企てるそれであることを發見せねばならなかつた。既に、小さな子供が、先の學者團體の辯士のやうに、更に、自分自身の理論を提出してゐる私の學生達のやうに、性的狀態の力に反抗してゐるといふことは、注目すべき一致ではないか？　このことは如何にして起るか？　最も普通の報告は、我々の文化が結局、性的狀態を犧牲にして建設せられるといふのである。然し、それに就ては多くの異論が唱へられてゐる。

子供の性的狀態の發見は恥べき發見に屬してゐる。少數の子供の醫者は、少數の保姆と同樣に、それが如何に現れるかを知つてゐた。自ら子供の心理學者と稱する怜悧な人々は、非難に充ちた口調

で、『子供の有邪氣』について語つた。常に推論の代りに感情が支配する。我々の政治的團體に於ては、斯様な事件は日常茶飯事である。反對黨の誰かは立上つて、行政、軍事、司法等の不當な處置を非難する。それに對して、他のもの、卽ち政府黨の一人は、最も好んでかかる斷言は、國家、軍隊、君主の、或は國民の名譽をさへ侮辱するものであり、それは虚僞に等しいと宣言する。彼等は誠實ではない。彼等の感情が少しも侮辱を耐へ得ないのである。

子供の性生活は勿論大人のそれとは違ふ。性的機能はその最初から、我々に非常に密接なる最後の形體に至るまで、複雜なる發達を遂げる。それは特殊の目標をもつ數多の部分衝動から合生し、組織の多くの階段を涌過し、最後に生殖の任務を帶びる。個々の部分衝動は、すべてが一樣に究極の結果に有効なものではない。彼等は轉向され變型され、一部分は抑壓されなければならない。かかる錯雜なる發展は常に完璧には行はれない。發展阻止が起るか、早期の發展過程に於て部分的の固定が起る。後に性的機能の遂行に障碍が起ると、性的渇望は――我々はリビドと呼ぶが、かかる早期の固定狀態に退抑したがる。子供の性的狀態及び其成熟への變化の研究は、我々に所謂性的倒錯症の理解の鍵を與へる。この性的倒錯症は常にすべての强要された嫌惡の徵候を以て說明されてゐるが、然し、未だその發表は明瞭にされてゐない。この問題の全領域は非常に興味があるが、私がそれに就てより多

く語つても、我々の議論の目的にはあまり意味はない。此處で正しい方向を見出す爲には、勿論解剖學、生理學の知識が必要であるが遺憾なことには、此等の知識は醫學校で全體をかち得られない。然し、文化史及び神話學の精通も同様に缺くべからざるものである。

『私はどうしても子供の性生活に就て考へることが出來ない。』

そんならもつとこの問題に止まらう。その上、私としても、この問題から離れることは難しい。子供の性生活に於て最も注目すべきものは、それが最初の五年間に全く非常に廣大な發展を經過するとのやうに思ふ。この時から思春期までは、所謂潛伏期が擴がり、その期に於ては——普通に——性的狀態は何の進步もせず、性的欲望は反對に强さを減じ、子供が既に稽古したり知つたことの多くは斷念せられ、忘れられる。性生活の早期の花がしぼんだ後のこの時期に於て、あの自我の態度が形成される。その態度といふのは、羞恥、嫌惡、道德等の如く、後に來る思春期の嵐に抵抗し新に目ざめて來る性的慾望に道を示すやうに規定されてゐる。この所謂性生活の二期の萌芽は、神經病の發生に非常な關係をもつてゐる。それは人間にのみ見出されるやうに見え、恐らく神經質になる、といふ人間の特權の諸條件の一つであらう。性生活の最初の時期は精神分析の前に看過されてゐる。丁度、他の領域に於て意識的精神生活の背景が看過されてゐるやうに。君は兩者が密接に相關してゐること

を、正しく推察するだらう。

性的狀態のこの早期の內容、變化、行動などに就ては非常に多くのことが報告されようが未だ期待がかけられてゐない。例を擧げると、子供が屢々父親から食ひ盡されはしないかと恐れてゐる、と聞いて、君は確かに驚くだらう。(君は亦、私がこの恐怖を、性生活の變化の中におくことを不思議に思はないのか?）然し、私は君に神話を想ひ出させることが出來る。多分、君はクロノス神も彼の子供達を呑み込むといふ話を學校時代から未だ忘れなかつたらう。君が初めてこれを聞いた時に、この神話は如何に不思議に見えなければならぬことか。然し、我々は當時は何も考へなかつたやうだ。今日我々は亦、狼のやうな食人獸が現れる多くの童話を考へ、そしてその獸の中に父親の變裝を認める事が出來る。私はこの機會をとらへて君に神話學と、童話の世界とは、結局先づ子供の性生活の知識に依つて理解せられるだらうと斷言したい。これは分析研究のこの種の副產物である。

男兒が父親から自分の男根を奪はれるといふ恐怖に惱み、その結果、この去勢の恐怖が彼の性格發展と性的方向の決定に最も強い影響を與へるといふことを聞く時、君の驚愕は少からず大きいだらう。ここに於ても亦、神話學が君に精神分析を信ずる勇氣を與へるだらう。かの自分の子供達を呑込んだクロノスは又、父のウラノスを去勢し、そして彼は、その代りに、母の策略に依つて救はれた彼

の子のツオイスに依つて去勢せられた。若し、君が、精神分析が子供の早期の性的狀態について語るすべてのことが、分析者の荒唐な想像から生じたといふ假定に心を傾けても、尙少くともこの想像は、神話と御伽話とを沈澱した原始人類の想像作用と同一のものを創造したことは認めるだらう。今日も尙、子供の精神生活の中にかつて太古に於て一般に人類文化を支配したと同一の古代的要素が立證されるといふ解釋は、より好意的な恐らくより適切なものであらう。胎生學が既に肉體的發達に對して認めた樣に、子供は精神生活の發展に於て系統の歷史を省約的方法で繰返すだらう。

更に子供の早期の性的狀態の特徵は、その時期に於ては女性の生殖器が何の役目をも演ぜず、子供には未だ發見されないと言ふ事である。總ての重點は男性生殖器におかれ、すべての興味は、それが存在するか、しないかに向けられる。女兒の性生活に就ては、男兒のそれに就てよりも少ししか知られてゐない。我々はこの差異を恥る必要はない。然し亦、成長せる婦人の性生活も心理學にとつては ein "dark continent"（暗黑の大陸）である。然し我々は少女が男性のそれと同價値の生殖器の缺乏を重大に感じ、それ故に自分を劣等と考へてゐること、又、この「男根の羨望」が全體の特殊な女性の反作用に原因を與へてゐることは既に認められてゐることである。

兩者の排泄の要求が、性的興味を以て充されてゐるのも子供に特有のことである。敎育は後に、明

瞭な區別をつけるが、頓智の實用は再びその區別をなくする。このことは、我々にはまづく見えるかも知れぬが、子供に於ては周知のやうに、嫌惡の念が現れるまでの全時期を必要とする。このことは亦、平素、子供の心の天使の如き純潔を辯護してゐる人々も否定しなかつた處である。

我々の注意を最も多く要求する權利をもつてゐるのは、子供が性的の希望を、一般に彼に親しい最も接近してゐる人々に、即ち第一に父母に、次に兄弟姉妹に向けるといふことである。男女兩性の素質が同時に又、反對の態度を與へぬ限り、男兒にとつて愛の對象は母であり、女兒にとつては父である。他方の親は、妨害する競爭者として感ぜられ、屢々は强い敵意をもつて考へられる。君も理解せられるだらうが、私は、子供が唯、我々大人が、好んで兩親=子供の關係の本質をその中に見るかの情愛を、好きな方の親から望んでゐるといふことを言はうとしてゐるのではない。否、分析は子供の希望がこの濃い情愛を越えて、彼の想像力の達し得る限り我々が官能の滿足として考へてゐるすべてのものを求めてゐることに、何の疑もはさまない。子供が兩性結合の實際の事情を少しも推測せず、その代りに、彼の經驗と感覺とから導かれた想像をあてはめることは容易に解せられる。通常、子供の希望は、子供を產むか或は——不確かな方法で——こしらへるといふ意圖に於て絕頂に達する。子供を產むといふ希望に於ては、無智ではあるが、男兒も亦、除外されてゐない。この全精神的構造を

我々は既に知つてゐるギリシャの傳說に從ひ、エデプス錯綜と呼んでゐる。この錯綜は、普通、性的早期の終結と共に放棄せられ、根本的に廢棄せられ、變更せられ、そしてこの變化の結果は、後の精神生活に於ける偉大なる行爲にまで規定されてゐる。しかし通常それは根本的に十分に行はれずして、思春期が更に重大な結果を惹起し得るこの錯綜の再生をよびさます。

私は、君が沈默してゐるのを不思議に思ふ。それは同意を意味してはゐるまい。——若し分析が子供の第一の對象選擇が、術語の所謂「近親相姦」的であると主張する場合には、確かに分析は再び、人類の最も神聖なる感情を害し、そしてそれに相應せる程度の不信、反對、彈劾等を覺悟せねばならない。此等のことは實際亦、これまで十分に、分析に與へたのである。同時代の人々の恩惠の中に於て、一般人間的な運命に束縛された型としてのエデプス錯綜の提出程、分析に損害を與へたものは何もなかつた。確かにギリシャ神話は、これと同一のことを意味したに違ひない。然し今日の多數の人人は學者も無學者も自然が近親相姦の可能性に對する防禦として、先天的の嫌惡を植付けたと信ずる方を好んでゐる。

第一に歷史が我々を助けなければならぬ。ユリウス・シーザーがエヂプトに踏み込んだ時、間もなく彼にとつて非常に重大なものとなるべき若い女王クレオパトラが、彼女の弟のプトレメウスと結婚

してゐるのを發見した。このことはエヂプト王朝に於ては少しも不思議なことでなかつた。原始ギリシャのプトレメウス達も唯、數世紀以來彼等の先人、古代埃及王達の行つた習慣を繼續してゐた。然し、これは今日に於ても、尙、寛大に批判されてゐる兄弟姉妹の相姦に過ぎない。それ故に太古の關係に對する主要證人を求めるならば、それは、神話である。神話は我々に、單にギリシャのみならず、すべての民族の神話が、父と娘、そして母と息子とさへの戀愛關係に充ち溢れてゐる事を知らせねばならぬ。王族の鬪爭と系圖は近親相姦の上に築かれてゐる。如何なる意圖の下に此等の話が創られたと君は考へるか？　神々や諸王を犯罪人として燒印を捺し、彼等に對して人類の嫌惡を誘ふ爲にか？　それは普通の人間の多數がそのことを斷念しなければならなかつたからではなくて、寧ろ近親相姦は太古の人間の遺産で、決して完全に征服せられなかつた結果、人々が尙、神々やその子孫にそのことの遂行を喜んで許してゐたからである。歷史と神話學のこの學說と完全に一致して、我々は個々の人人の幼少時代に於て近親相姦の望みが、今日尙存在し働いてゐるのを見出すのである。

「私は惡意にとつてゐるかも知れぬが、君はこのことをすべて子供の性的狀態に抑留しようと望んでゐるやうだ。このことは正しく、人間の太古史に對するその關係の爲に、非常に興味あるやうだ」

私は、それが我々の意圖から餘りに遠くに導きはせぬかと心配する。然し恐らくそれはそれだけの

利益があらう。

『さて、君は子供の性生活に對する分析の結果に、如何なる保證を與へなければならぬかを話して與れぬか？ 君の確信は、神話學及び歴史との一致の上にのみあるのか？』

否、決して。確信は直接の觀察の上にある。卽ち次のことが行はれた。我々は先づ二十歳から四十歳迄の大人の分析から、性的の幼少時代の內容を明かにした。後に我々は分析を子供自身に企てた。そして彼等に依つて、我々が中間時の介在と歪曲にもかまはずに推測したと同樣に、すべてのことが實證された時には大きな勝利であつた。

『どうして君は小さな六歳以前の子供に分析をやつたのか？ 一般にそれが行はれてゐるのか、そして子供等にとつて心配はないのか？』

それは非常によく行つてゐる。このやうな四歳から六歳迄の子供に、どんなことが起るかは信じられまい。子供達はこの年頃に於ては精神的に非常に活潑である。性的早期は彼等にとつては亦、智的の開花期でもある。私は、彼等が潛伏期の入來と共に、精神的にも阻止せられ、魯鈍になると言ふ印象を受ける。多くの子供はこの時から又、肉體的の美を失ふ。早期分析の傷害に就ては、私は君に次のことを報告し得る。卽ち、殆ど二十年前に實驗された第一の子供は重い精神上の傷害にも拘らず、

その思春期を無事に通過し、それ以來、健康な實行能力のある若者となつた。早期分析の他の「犧牲者」にも、より不首尾にはならぬことを希望する。此小兒分析には多くの關係がつながつてゐる。小兒分析が將來より大きな意義をもつだらうといふことは可能である。理論に對するそれの價値は實際疑ひない。小兒分析は成人分析に於て未決定に止つてゐる問題に對し、明確なる敎示を與へ、又分析者を彼にとつて容易ならぬ誤謬から防禦して與れる。神經病を形成する諸要素は分析の仕事の際にとらへられ、人はそれを誤認する事はない。確かに子供の爲には、分析の影響は敎訓的處置と柔和せられねばならぬ。この技術は尙その完成を待つてゐる。然し實際的興味は、大多數の子供が、その發展中に、明瞭な神經病的階段を通過すると言ふ觀察に依つて呼びさまされる。我々がよく鋭く觀察し得て以來、子供の神經病は除外例ではなく、恰も幼稚な素質から社會的文化に至る迄の途上に於て避け得ない規則であると言はうと試みてゐる。大抵の場合、この幼年時代の神經病の發作は、自然に征服せられる。しかし、一般に普通人に於てもこの發作は、その根跡を殘してゐないものであらうか？反對に何人であれ、後年の神經病者に於ては幼少時代の發病との連關を見出す。その病氣は幼少時代に於ては、さう目立たなくとも差支へないが。今日、內科醫は、全く類推的方法で、すべての人は幼少時代に一度結核を病んでゐると主張してゐるやうに思ふ。神經病者にとつては、確かに接種の見地

は問題にならず唯素因の見地が問題になる。

私は君の保證への質問に戻らうと思ふ。卽ち、我々は全く一般的に子供の分析的觀察に依つて、我我が大人の幼年時代についての告白を正當に解釋したといふことを論證した。數多の場合に於て、我我には亦、實證の他の方法も可能であつた。我々は分析の材料から病人の意識的記憶が少しも保存してゐなかつたある外的の事件を、幼年時代の印象深い事件を再現した。そして幸ひな偶然又は、兩親や養育者の許に於ける尋問は我々に、この推論された事件が實際さう起つたといふ否定出來ない證據をもたらした。このことは勿論そんなに屢々成功しないがそれが實現された場合には、壓倒的の印象を與へた。斯くの如き、忘れられた子供の體驗の正しい再現は、常にそれが客觀的の實證を許すかどうかといふ大きな治療法上の効果をもつてゐる。勿論これ等の事件の持つ意義はそれ等が無力なる自我に、肉傷害的に作用し得た時期に起つたといふ事情に負うてゐる。

『分析に依つて發見されねばならぬ如何なる事件がここでは問題になり得るか？』

種々ある。第一には、子供の芽生えつつある性生活に絶えず影響を與へ得た印象である。例へば大人同志の性的事件の觀察、或は自分と大人と、又は他の子供との性的經驗――決して稀な事件ではない――である。次には、子供がその當時或は後になつて初めて理解し、またそれ等から祕密的な又は

氣味惡い事に就て解釋を得ようと思つた會話を一緒に聞くことである。更には、他人に對して意味深い、優しい又は敵意の態度を示す子供自身の言葉と動作である。子供の忘れられた性的行爲と、それを中止せしめた大人の干渉とを想ひ出させることは分析に於ける特に重大なことである。

「今この機會に、永らく質問しようと思つてゐたことを訊かう、卽ち、この早期の間の子供の「性的行爲」が如何なる點に存するのか？　而もこの時期は、君の言ふやうに分析の時期前までは看過せられて來たのに。」

さうは言ふが、注意すべきことには、この性的行爲に於ける規則的なものと、本質的なものとは、決して看過せられなかつた。卽ち、それは殊更に注目すべきことではないし、又、同時に看過されもしなかつた。子供の性的興奮はその主要な表現を、自己の生殖器の、實際に於ては、男性のもつそれの刺戟に依る自慰に見出す。子供のこの「不品行」の驚くべき流布は、大人にも常に知られて居り、それ自身重い罪惡と考へられ、嚴重に追求される。子供等のこの不道德的な傾向の觀察が――子供等は彼等自身の言ふやうに、快樂を與へるからこのことをやつてゐるのであるが――彼等の未來の純潔性と非肉慾性との理論と、如何にして一致し得たかといふことを君は尋ねない。君はこの謎を反對の側から解くことが出來よう。我々にとつては重大な問題が生ずる。どうして早期の幼少時代の性的行

爲は反對されなければならないのか？　その抑壓に依つて生ずる責任は知られてゐるが、尙束縛せずにそれを許可することを敢てなし得ない。低い文化の國民や、文化の下層階級に於ては、子供の性的狀態は解放せられてゐるやうに見える。かくすることにより、恐らく後に起る個人的の神經病に對しては强い防衞が達せられたやうだが、然し同時に亦文化的事業への適應の點に於ては、異常なる損失ではなからうか？　多くの人々は我々がここで、新しい危險の前に立つてゐると語つてゐる。

然し、神經病者の性生活の研究に依つて刺戟される興味は、淫蕩な欲望の喚起に好都合な雰圍氣を作りはせぬかといふことに就ては、私は敢て君自身の判斷に任せる。

五

「私は君の意圖を理解しようと思ふ。君は分析の實施の爲に、如何なる知識が必要であるかを示さうと欲してゐる。それで、私が醫者のみが分析に資格をもつてゐるかどうかを判斷出來るのだ。さて、これ迄は醫術のことはあまり問題にならず、問題になつたのは多くの心理學と、生物學及び性科學の一部分であつた。然し多分未だ最後まで觀察しなかつたのではないだらうか？」

確かにさうだ。未だ論さねばならぬ缺陷が殘つてゐる。君に少しお願ひしたいが、君は如何に分析治療を考へてゐるかを說明して吳れぬか？　丁度君がその治療そのものを企てなければならなかつたといふやうに。

「それはやれるだらう。私は我々の論議を斯樣な實驗に依つて決定する意圖は實際もつてゐないが、君の氣に入るやうにしよう。勿論責任は君の上にあるが。そこで病人が私の許にやつて來て苦痛を訴へると假定する。若し彼が私の命令に從はうと思ふならば、その病氣の治療恢復を約束する。私は、

彼が知つてゐる想ひ付いたことをすべて十分に率直に私に語らせ、たとひ彼にとつて話すのに不快な多くのことがあつたとしても、この決心から離れてはいけないと要求する。私はこの規則を間違へなかつたか？」

尚彼の想起が、つまらぬこと又は無意味なことと思はれてもといふことを付け加へなければならぬ――。

「それもさうだ。それから彼は語り始め、私が傾聽する。さう、それから？　彼の報告から、私は彼が如何なる印象、體驗、希望などの衝動を排斥したかを推測する。何故なれば此等のものは彼の自我が倘弱く、彼等と交渉する代りに彼等を恐怖してゐた時に於て、その自我と對立してゐたからである。彼がこのことを知つた時に、彼は自分を當時の狀態に移し、そして、今は私の助力でよりよく償ふのである。それから彼の自我を强制してゐた制限は消失し、彼は恢復する。それでいいのか？」

うまい、うまい。私はまた、私が素人を分析者に作り上げたと非難されるだらう。君はそのことを非常に上手にものにしたのだ。

「私は唯何か暗記したものを繰返して言ふ場合のやうに君から聞いたことを繰返したに過ぎない。然し私は私がそれをどうしたのかを考へることが出來ないし、又何故に、斯樣な仕事が毎日一時間づつ

數箇月もかかるか少しも解らない。普通の人は、何と言つても通常そんなに多くを體驗してもゐないし、又、幼少時代に排斥されるものは恐らくどんな場合でも同一であらう。」

分析の實施の際には多くのことが學ばれる。例へば君は患者のなした報告から、彼が忘れてゐた事件や彼が排斥した衝動興奮を推定することを、決してそんなに簡單にはなし得ないだらう。患者は最初は君にも彼にも大して意味のないことを言ふだらう。君は被分析者が普通と違つて從順に提供する材料をば、全く特別の方法で解釋しようと決心せねばならぬだらう。一定の過程に依つて貴重な金屬の成分が得られる鑛石のやうに。それから君は亦、恐らく、唯少しの要求の貴重な材料しか含んでゐない多量の鑛石を利用する準備が出來てゐる。ここに、治療の廣大さに對する第一の理由があるだらう。

「然し君の比喩を守る爲に、如何にこの素材を利用するのか？」

病人の報告と想起とは、求められるものの歪曲に過ぎないといふ事、卽ち君がそれ等から、何がそれ等の背後に隱されてゐるかを推測する。いはば暗示に過ぎないといふ事を、假定してである。換言すれば、君は先づ、此材料をそれが想ひ出であれ、想ひ付きであれ、又は夢であれ、解釋しなければならぬ。それは勿論君が傾聽してゐる間に、君の專門知識に依つて作り上げた期待を顧慮して出來る。

「解釋する。それはいやな言葉だ。その言葉は聞きたくない。その言葉で、君は私のすべての確信を奪ふのだ。若しすべてが私の解釋にかかつてゐるならば、誰が一體、私の解釋が正しいと保證するのか？ その場合には何と言つてもすべてが私の自由意志に委ねられてゐる。」

靜かにして呉れ。心配することはない。何故に君は、君自身の精神的事象を、君が他人のそれに對して認めてゐる合法性から除外しようとするのか？ 若し、君がある自制をもち、明確な知識を處理するならば、君の解釋は、君の人格的特性から影響を受けず、正當なことを言ひ當てるだらう。私はこの仕事にとつて、分析者の人格が無關係だとはいはない。各人が同一の限度をもつては居ないが、無意識の排斥されたものにとつて感覺の銳敏さが問題である。そして、殊に、分析者にとつては、深く掘り下ける自己の分析に依つて、分析の材料の公平なる採用に、自己を有用ならしめるといふ義務が結び付いてゐる。勿論、天文學上の觀察に於ける「人的の時差」と同等に考へらるべき一事が殘つてゐる。此個人的の要素は、精神分析に於ては、他の何物よりも、大きな役目を演ずるだらう。異常（アブノルム）な人間は正確な物理學者たり得るだらうが、分析者としては彼は自己の異常性に依つて、精神生活の表象を歪曲せずにとらへる事を妨げられて居る。何人にも自己の異常性を說明し得ないから、心理學的の事象に於て、普遍的の一致は特に達し難い。のみならず、多くの心理學者は、このことが全く見

込みのないことであり、又總ての患者は、自分の愚を智慧だと稱する一樣な權利をもつてゐると考へてゐる。私は、この點ではより樂天的である。我々の經驗は、確かに、心理學に於ても、かなり滿足の行く一致が達せられる事を示してゐる。すべての研究領域は正しく特殊な困難をもつてゐる。我々はその困難を排除するために努力せねばならぬ。且又、分析の解釋技巧に於ても、他の知識材料のやうに、多くのもの、例へば、象徵に依る特有の間接描寫と相關するもの等を修得せねばならぬ。

「さて、私は、單に思想の中でのみ分析治療を企てるのにはもう何の興味もない。どんな不意打が尙私を待つてゐるだらうか？」

君は、かかる意圖を斷念する方がよからう。君は如何に多くの訓練と、演習とが必要であるかを認めるだらう。若し君が正當な解釋を見出したならば、更に新たな問題が起る。君は患者に好結果を期待して君の解釋を報告する爲に適當な瞬間を待たねばならぬ。

「何を手がかりに、適當な瞬間を、その度毎に認めるのか？」

それは、經驗に依つて非常に純粹化され得る調子の要領だ。若し君が、多分、分析を短縮しようと努力して解釋が見付かるや否や、直ちにそれを患者の頭に投げつけるならば、重大なる誤謬を犯すのだ。君はそれに依つて、彼に、反抗、忌避、憤激等の言葉を述べさせるだらうが、彼の自我が、排斥

されたものを支配することは達せられない。守るべき規則は彼の自我が、君の解釋呈示の指導の下に、もう二三歩進めばよい程度まで排斥されたものへ近づくのを俟つことである。

「このことはどうしても習得し得ないやうに思はれる。それで、若し、私が解釋の際にこの規則を守つた場合、次には何が来るか？」

それから、君は思ひがけない發見をすることが確かだ。

「その發見は？」

君が患者を思ひ違へてゐた事、患者の助力と、從順とは信用するに足りないこと。患者は共同の仕事に、すべての妨障を加へたがる傾きのあること。一言で言へば、彼は結局、健康にならうと欲しないといふことである。

「否、それは君がこれ迄、私に語つたことの中で、最も馬鹿なことだ。私はそれを信じない。そんなにひどく惱み、そんなにひどく苦痛を訴へ、治療に對しては、そんなに大きな犧牲を拂つてゐる患者が、健康にならうと欲しないなんて。君も亦、確かにさうは考へないのだらう。」

私はさう考へる。私の言つたことは眞理である。勿論、完全な眞理ではないが、非常に注意すべき眞理の一片だ、病人は確かに健康にならうと欲するが、然し又、欲しない。彼の自我は統一を失つて

ゐる。それ故に、彼は何等、統一的意志を現さぬ。若しさうでなかつたら、彼は決して神經病者でないだらう。

「ぐづぐづものだつたら、テルとは呼ばれなかつたらう、と言ふ譯だね。」

排除せられたものの派生物は、彼の自我の中に突き入りその中で勢力をはる。自我は此派生物の要求に對しては、排斥されたもの自身に對すると同樣に殆ど支配し得ず、また、普通には、此等のものに就て、少しも知らないのである。此等の病人は、正しく特殊の性質と、我々が豫期するに慣れてゐない多くの障碍とを持つてゐる。すべての我々の社會的制度は、統一的な尋常な自我をもつ人々を目當に設定されてゐる。その自我は、善か惡かに分類され得るし、そして彼の機能を果すか或は力强き影響に依つて除かれるかのどちらかである。それ故に責任か、無責任かの、法律上の二者其一の選擇がある。神經病者には、この決定は適合しない。社會的要求を彼等の心理學的の狀態に適合させることは困難だと認められねばならぬ。このことを人は大規模に最近の大戰で經驗した。服務から逃去つた神經病者達は虛病人であつたか、さうでなかつたか？ どちらでもあつたのだ。若し、彼等が虛病人の如くに取扱はれ、病氣でゐることが實際不快にさせた場合には、彼等は健康になつた。そしてこれ等僞の全快者達を、服務に送ると、正確に再び病氣になつて仕舞つた。彼等は手のつけ樣がなかつ

た。同一のことが日常生活の神經病者にも起る。彼等は自分達の病氣を訴へるが、然し、病氣を出來るだけ利用してゐる。そして若し、彼等から病氣をとり去らうとすると、彼等は、諺の牝獅子が子供を保護するやうに、病氣を擁護する。彼等にこの反抗を非難することは、無意味であるだらう。

『然し、この氣むづかしい人々を治療せずに、放つておいたならば、最上ではないのか？　かういふ病人の一人一人に、君の言葉から認めねばならぬやうなそんなに多くの努力を拂ふことは無駄ではないかと思ふ。』

私は君の申出を是認することは出來ない。生活の錯雜に對して反抗する代りに、それを受け入れる方が確かにより正當である。我々の、治療する神經病者のすべてが分析の利用に、値しないのではなく、中には非常に値する人もある。我々は、かうした缺點のある精神的武裝をもつて文化生活に進む人間を、出來る限り少くすることを以て、我々の達すべき目標とせねばならぬ。それ故に、我々は多くの經驗を集め、多くのことを會得せねばならぬ。すべての分析は、個々の病人の人格的價値は全然除外するとして、敎訓的であり得るし、我々の新しい文化に有用である。

『然し、若し、病人の自我の中に、病氣を保持しようとの意志活動が形成された場合、この意志活動は、理由と動機とを擧げ、何物かに依つて辯明され得なければならない。然し何の爲に、人は病氣に

ならうと欲したか、それは彼に何の爲になるか？　少しも解せられない。」

否、それ程不可解の事ではない。病氣である故に、何等、服務に役立たない戰爭の神經病者を考へ給へ。市民生活に於ては、病氣は、職業及び他人との競爭に於ける不十分さを辯解する爲の避難所として役立つし、家庭に於ては、他人を犧牲と愛の證明とに強ひる爲、或は、彼等に彼の意志を强制する爲の手段として役立つ。このことは、すべて、かなり皮相的であり、我々はこれを「病氣利得」として包括してゐる。注目すべきことは、唯、病人、即ち彼の自我は、かくの如き動機の全連鎖に就ては、彼の合理的な行爲を以てしながら、何も知らないことである。人は自我を、これ等の努力に注意するやうに强ひて以て、それらの影響と戰ふ。尙、病氣にならうとする、他のより根强い動機があるが、これはさう容易には片付けられない、この後者の動機は心理學の理論への新しい飛躍なしには理解せられない。

「先をつづけて呉れ給へ。少し許りの理論は、今はもう問題でない。」

私が、君に、自我と他我との關係を説明した時に、私は精神器官の重要な部分を匿くして言はなかつた。即ち、我々は、無理に、自我そのものの中に、超我と呼ぶ特殊の段階が分れてゐたことを承認させられた。この超我は自我と他我の中間に特殊の位置を占める。それは自我に屬し、自我の高い心

理學上の組織を分ち持つてゐるが、他我と特殊の密接な關係にある。超我は他我の第一の對象構成の沈澱であつて、エディプス錯綜の放棄後に於ける、その錯綜の後繼者である。此超我は、自我に對立し得るし、自我を物體のやうに屢々殘酷にさへも取扱ふ。自我にとつては、超我と一致して行くことは他我との一致と同樣に重大なことである。自我と超我との分離不一致は精神生活にとつて重大な意義をもつてゐる。君はもう、この超我が、我々の良心と呼ぶあの現象を支持するものであることを推測するだらう。精神の健康にとつては超我が尋常に作られてゐること、即ち、十分に非人格的になつてゐることは非常に關係のあることである。エディプス錯綜が、正當な變化を經なかつた神經病者に於ては、この事があてはまらない。神經病者の超我は、常に自我に、嚴格な父の息子に對する如くに對立してゐる。彼の德義性は、單純な方法で、自我が超我に罰せられるといふ點に實證される。病氣はこの（自我の）「自己矯正」の手段として利用せられ、神經病者は、彼の病氣を滿足するために、懲罰として必要な罪惡感情が彼を支配してゐるやうに振舞はねばならない。

「それは實際全く不思議である。最も注目すべきことは、病人にはこの良心の力も意識せられてならぬといふことである。」

左樣、我々は先づ、すべてこの重大な關係の意義を評價することを始めよう。その爲に私の說明は

こんなに曖昧にならねばならなかつたのだ。さて續けよう。我々は恢復の仕事に反抗する力を總て病人の「抵抗」と呼ぶ。「病氣利得」は斯樣な抵抗の源である「無意識の罪惡感情」は超我の抵抗を代表し、それは、最も强く、そして我々に最も恐れられてゐる要素である。我々は尙、治療の際に、他の抵抗と出會ふ。若し、自我が早期に於て、恐怖から排斥を企てたとすると、この恐怖は絕えず起り、若し自我が排斥されたものに接近せねばならぬ場合には、抵抗として現れる。數十年間一定の道を進んで來た衝動事象が、突然に開かれた新しい道を行かねばならぬ場合には困難なくしては經過しないといふことが、遂には考へられる。これを他我の抵抗と呼んでよいだらう。之等すべての抵抗に對する戰が、分析治療中の我々の主要な仕事である。それに反して解釋の問題は消失する。然し、亦、この戰と抵抗の克服とに依つて病人の自我は非常に、變化せられ、强化せられるので、我々は、治療の終へた後の彼の未來の行動に、安心して相對し得る。他方、君は今我々が何の爲に、永い治療の繼續を必要とするかがわかるだらう。發展經路の長さと材料の豐富が決定的のものではない。方法が自由であるかどうかが、はるかに問題である。軍隊が平時に於ては汽車で數時間かかれば通過する區域に、若し、そこで敵の抵抗を征服せねばならぬ時には、數週間も滯在することがある。斯樣な戰は精神生活に於ても時を消費する。私は遺憾乍ら、認めなければならぬが、分析治療を豐かに促進するあらゆ

る努力が、從來失敗してゐた。時の短縮への最善の道は正確なる實行であるやうに思はれる。

『若し、私が、かつて君の仕事に、手を出して、他人に分析さへも試みようとする興味を感じたとしても、君の抵抗に就ての報告は、私にその興味を冷させるだらう。處で、君の認めた特殊な人格的感化はどうなるのか？　それは抵抗と爭はないのか？』

君が今それを尋ねたのは結構なことだ。この人格的感化は、我々の最も强い力學的の武器であり、それは我々が新しく狀態の中に導き入れ、それに依つて我々が抵抗を溶解させるものである。我々の文化の知的成分はこのことを成し得ない。何故なれば、周圍のすべての偏見を分ちもつてゐる病人は、我々の科學上の批評家と同樣に、殆ど我々を信ずる必要がなかつたから。神經病者は、彼が分析者を信ずるから、その仕事に從事するのであり、彼が分析者の人格に特殊な感情的態度をとる爲に、分析者を信じ得るのだ。子供も亦唯彼がなついて居る人をのみ信ずる。私は旣に、何のために我々が、この特殊な偉大な「暗示的」の影響を利用するかを語つた。症候の抑壓のためにでなく——このことは分析の方法を他の精神治癒の方法から區別するが——病人の自我をその抵抗の征服に促す爲の原動力としてである。

『さて、それが成功すると、それからは、すべてが圓滑に運ぶのではないのか？』

左様、さうあるべき筈だ。然し豫期せぬ混亂が現れる。恐らく、分析者にとつて、病人の彼に對してとる感情關係が全く特有な性質である事は最も驚くべき事だ。分析を試みた最初の醫者は——私ではなかつたが——この現象に遭遇し、迷つて仕舞つた。この感情關係は卽ち——明瞭に言ひ切れば——戀愛の性質をもつてゐる。更に君は、分析者がこの關係を決して刺戟しようとはしない事、反對に、寧ろ人間の常として患者から遠ざかり、自己の人格を或警戒を以て取りまく事などを觀察する場合、或は、君が更に、この特殊の戀愛關係が、凡ゆる他の現實の愛顧を眼中におかず、個人的牽引力、年齡、性、階級の差を越えてゐる事を知る場合、どうだ。それは、注目すべき事ではないか？ この戀愛は直接的な強制的なものである。この特性は自然的戀愛にも從來稀なものではなかつた。君は、これと反對の事が屢〻起るのを知つてゐる。然し、分析狀態に於て、この性質は全く規則的に起り、この分析狀態に於ては、合理的の說明は見出されない。患者の分析者に對する關係から、前者にとつては、後者に對し或程度の尊敬、信賴、感謝、人間的同感以上のものが生ずる必要はないと考へられてゐる。然るに、之等の代りにそれ自身が病的現象の印象を與へるこの戀愛が生ずるのである。

「然し、このことは、君の分析の目的に好都合だと考へたい。戀する時は、柔順であり、愛の爲には相手に、すべての可能なことを爲すから。」

左様、始めの中は、好都合でもあるが、後になり、この戀愛が深刻になつた場合には、その全體の性質が現れる。この性質には、分析の仕事と一致しない多くのことがある。患者の愛は、服從することで滿足しない。强請的になり、優しい官能の滿足を望み、獨占を要求し、嫉妬を起し、若し、彼の目的を達し得ない場合には愛の反面卽ち敵意と復讐心とに對する心構へを次第に明瞭に示して來る。同時に、この戀愛は、すべての戀愛の如くすべての精神的內容を排斥し、治療と恢復とに對する興味を消して仕舞ふ。要するに、この戀愛は、神經病の代りになり、我々の仕事は、病氣の或形式を他の形式で追ひ拂つた結果になつたことは疑ひ得ない。

『それは望のないことだ。その時にはどうするのか？ 分析は斷念されねばならないだらう。然し、君の言ふやうに、すべての場合に、斯様な結果が生ずるとすれば、結局少しも分析は實行し得られないだらう。』

我々は狀態から學ぶ爲に、先づ狀態を利用しようと欲する。かくして得たものは、我々を助けて狀態を支配することが出來るやうにする。我々が、任意の內容をもつ神經病を病的戀愛の狀態に變化することが出來るのは、非常に注意すべきことではないか？

神經病には、異常に轉向せられた戀愛生活の一部分が根柢にあるといふ我々の確信は、この經驗に

依つて堅固にかためられねばならぬ。この見解を以て、我々は再び堅固な足場をとらへ、さてこの戀愛そのものを敢て分析の對象にする。我々は、又、もう一つの觀察をも試みる。如何なる場合に於ても、分析上の戀愛は、私が描寫しようと試みた程、そんなに明瞭に現れるものではない。何故に明瞭に現れぬのか？　それは直ぐに解る。戀愛の十分に知覺し得る側面が現れようとすると同程度に、それに對する患者の反抗も目覺めて來る。彼は、我々の監視の下で、この側面と戰ひ、追ひ拂はうと試みる。そこで我々は事件を理解する。患者は、分析者への戀愛の形式の中で、彼がかつて一度經驗した精神的事件を繰返す――彼は、既にその中に存在し、そして彼の神經病の發生と密接に連結してゐた精神的事件を分析者に移送する。彼は亦、當時の防禦行動を我々の眼前に繰返し、最も好んであの忘れられた時代のすべての運命を、分析者に對する關係の中で繰返したがる。彼の、我々に示すものは、卽ち彼の祕密の生活記錄の核心であり、彼はそれを回想する代りに、目前に、明白に再現する。これに依つて移送の謎は解かれ、分析は非常に脅威的に見えた新しい狀態の助力を以て、繼續し得るのである。

『それはするい。そして、病人は愛してゐないで、唯、昔のことを再び實演するやうに強ひられる程そんなに容易に君を信ずるのか？』

問題の焦點はそこにある。そしてそれを達するには「移送」の取扱ひに於ける完全な熟練が必要である。君は、分析の技術に對する要求が、この場合に最も高められてゐるのを見るだらう。ここに、最も重大な過誤を犯す可能性があると共に、最大の効果を保證し得る可能性もある。移送を壓迫したり、等閑に付したりして、この障碍から遠ざからんとする試みは無意味であらう。さうなれば、之まで何をやつて來たとしても、それは分析の名に價しない。移送神經病の不快が生ずるや否や、直ちに病人を送還するのは怜悧なことでなく、それどころか臆病である。それは、殆ど、幽靈を呼び出して、それが現れると逃け出すやうなものである。成程、實際これ以外に出來ぬ場合もあらうが、然しそれにしても少くとも出來る限りは惡魔共と戰つて見なければならぬ。移送の要求に應じ、優しい官能的滿足への患者の希望を充すことは、唯々道徳的顧慮から正當に禁ぜられてゐるのみならず、倚又、分析の目的の成就のために、技術的手段としても、全く不十分である。神經病者は、彼の中に準備せられてゐる無意識の鉛版の無校正の反復を可能ならしめられたことに依つて、恢復せられることは出來ない。若し、病人に、分析に協同するといふことと交換して、部分的の滿足を與へ乍ら、彼と妥協を試みる場合には、病氣にかかつてゐる保險代理者を改宗させねばならぬ僧侶の滑稽な狀態に陥らぬやう注意せねばなら

ぬ。病人は改宗しないが、僧侶は確信して去る。移迭の狀態からの唯一の可能な逃路は、病人の過去への復歸である。如何にして彼が實際に體驗したか、或は如何にして彼が希望をみたす空想の活動に依つて作つたか等々。然して、このことは、分析者にあつては、多くの熟練、忍耐、平靜、沒我等が必要である。

『そして、何處で、神經病者は彼の移迭愛の原像を體驗したと君は考へるのか？』

彼の幼少時代に、通常に一方の親に對する關係に於て君は、我々が、如何なる重大性を、この最も早期の感情關係に負はねばならぬかを想ひ出すだらう。これで卽ち說明は了へる。

『到頭濟んだのか？　私は、君から餘り多く聞いたので、幾分混亂してゐるやうだ。唯この上、如何に、又何處で分析の實施に必要なものが學ばれるかを語つて貰ひ度い。』

現今は精神分析の教授が許可されてゐる二つの設備がある。第一のベルリンにあるものは、同地の會の、ドクトル・マツクスアイチンゴンが設けたもの、第二のものは「ウイーン精神分析會」が、著しい犧牲を拂つて自身の費用で經營してゐる。政府の關與は一時、彼がこの新しい事業に對して出てくる多くの妨害に疲れ切つてゐる。第三の教授設備は、丁度今、ロンドンに於て、ドクトル・エー・ジヨンス氏指導の下に、彼の地の團體に依つて開かれる筈である。この設備に於ては、候補者自身が分

析にとられ、彼等にとつて重要なすべての對象の中で、講義に依る理論の敎授をうける。若し、彼等が、より容易に最初の試驗が許される時には、年長の經驗ある分析者の監視を受ける。この敎育には約二箇年を要する。勿論その後と雖も、初步の人に過ぎず、決して大家ではない。尙、不足の所は、若干の會員が、年長の會員を一致してゐる精神分析學上の團體の中に於ける演習と思想交換に依つて、獲得せられねばならぬ。分析の仕事に對する準備は決して容易でも簡單でもない。仕事は困難で、責任は大きい。然し、かくの如き敎育を通過したもの、自己を分析したもの、今日丁度敎へられてゐる無意識の心理學を會得したもの、性生活の科學に通曉してゐるもの、そして、精神分析の至難な技術を、卽ち解釋術抵抗に對する戰、移送の處置等を學んだものは、精神分析の領域に於ては、最早、決して素人ではない。彼は神經病の障害の治療を行ふ能力をもち、そしてその點に於て、やがてこの治療法から望まれるすべてのことを行ひ得るだらう。

六

『君は、精神分析とは何か、又効果の豫望を以て精神分析を行ふ爲には如何なる知識が必要であるかを、非常に饒舌を費して私に說明した。宜しい。君を傾聽したことは少しも損ではなかつた。然し、君が、君の講演から、私の判斷に如何なる影響を期待してるかは、私は知らぬ。私は、それ自身少しも異常なものをもたない或場合を考へる。神經病は特殊の病氣であり、分析は、その治療に對する特殊の方法醫術的の專門である。醫術の或專門を選んだ醫者が免許狀に依つて認められた教育に滿足しないことは普通のことである。殊に、彼が唯、專門家のみを養ひ得る大都會に定住せんと欲する場合に。外科醫にならうと欲するものは、數年間は外科の臨床に勤めようとする。眼科醫も咽喉科醫も同樣である。のみならず精神病醫は恐らく、決して國家の經營や、養療院から逃れる事は出來ないだらう。又、精神分析者に於ても、さうなるだらう。此新しい醫術の專門に決心するものは、彼の研究完成後、教育設備に於て二年間の教育を受けるだらう。これは、君が言つたやうに、實際そんなに永い時日が必要な場合にである。その時に彼は精神分析の團體に於て、同僚との接近を努めることが利益

であることを認めるだらう。そして一切が、最も美しい秩序で行はれるだらう。一體どこに素人分析の問題の起る餘地があるのか、私にはわからない」

君が醫者の名に於て期待したことを成す醫者は、我々すべてに歡迎されてゐるだらう。私が自分の學生として認める人の五分の四は實際、勿論醫者である。然し、私が君に、如何に醫者の分析に對する關係が實際に形成されたか、そして如何にこの關係が更に發展して行くだらうかを說明するのを許して貰ひたい。醫者は分析の獨占に對する歷史的の權利をもたない。寧ろ、最近までは、分析を傷つけんとして、淺薄なる嘲笑から、最も激しい誹謗に至るまで、全力を盡してゐた。君は正當に、このことは過去に屬し、未來に影響するを要しないと答へるだらう。私は同意するが、然し、未來は君の豫言したと違ふであらうと懸念する。

私が素人醫者といふ言葉に、それが法律上の意識の代りに要求する他の意味を與へるのを許して貰ひたい。法律上で、素人醫者とは、國家の免狀の所有に依つて自分を醫者として證明し得ずして病人を治療するものである。私は他の定義を選びたい。卽ち素人醫者とは、治療に必要な知識と能力をもたずに、治療を企てる人であると。この定義に基いて私は――唯に歐洲の諸國に於てのみならず――醫者が、分析上の素人醫者に十分な配當を出す事を敢て主張する。醫者は分析を學ばず、そして理解

せずして非常に屢と分析治療を行ふ。

君が、これは、不正直であるとか、これを醫者に期待したくないとか言つても無駄である。醫者は、然し、醫者の免狀は、決して、海賊の敵船捕拿免狀ではなく、病人は、法律の保護の外には居ないことを知つてゐる。醫者には、常に、彼が錯誤を犯して居る場合でも亦、善良な信念を以て行つてゐるといふことは是認されるだらう。

事實が存在する。我々は、君が考へるやうに、事實が說明されることを希望する。私は君に醫者が精神分析の場合に於て、彼が、すべての他の領域に於ては愼重に避けたであらうやうな振舞ひをするのは、如何にして可能であるかを說明したいと思ふ。

第一に、醫者が、醫學校に於て精神分析の準備として必要であつたらうと思はれるものと殆ど正反對の敎育を受けた事が觀察に上る。彼の注意は、客觀的に確立し得る解剖學、物理學、化學の事實に導かれた。醫術の職業の效果は此等のものの正しい理解と、適應せる效果とにかかつてゐる。人生の問題はそれが從來無機の自然物のなかにも明瞭に認められる力の活動から說明された限りに於て、醫者の視野の中にはひつてゐる。生活現象の精神的方面に對する關心が目ざめず、より高き精神的行爲の硏究は醫術とは何等關係せず、それは他の大學の領域である。精神病學のみが、精神機能の障碍を

取扱はねばならなかつた。然し、それを如何なる方法で、如何なる目的でやるかは既に知られてゐる。それは精神障害の肉體的條件を探し出して他の病氣の原因であるやうに取扱ふ。

精神病療學はこの點正當であり、そして醫術上の教育は明かに優れてゐる。若し、それが一方的であると言はれるならば、先づ、この特質描寫が非難される點を探求せねばならぬ。一切の科學はそれ自身一方的である。科學は一定の內容、觀點、方法に自己を制限して一方的でなければならぬ。一つの科學を他の科學に對立させて勝敗を決定することは不合理であつて、それに私は少しも關係したくない。物理學は、決して化學の價値を貶さない。又、物理學は化學に代り得ない。然し、化學から代られることも出來ない。精神分析は確かに、精神的無意識の科學としては全く特に一方的である。だからといつてこの一方性に對する權利が、醫學上から異論を唱へらるべきものではない。

要求された立脚點は先づ、我々が科學的の醫術から、實際の醫學に轉向する場合に見出される。病人は複雜なるものである。彼は、殆ど理解し難き精神現象でも、人生の相貌から消し去り得ないといふことを、我々に注意せしめる。神經病者は全く、望ましからぬ混亂である。法律や、軍隊勤務にとつてと同樣、醫學にとつても當惑である。然し、神經病者は存在するし、殊に醫學にとつては密接なる關係がある。而も彼の治療に對してと同樣、彼の評價に對しても、醫學の教育は何もやらない。全

く何もやらない。我々が、肉體的と精神的とに分離してゐる事物の間の深い關係を見れば、神經病の現象領域に對し認識の道が開かれる日、そして願はくは組織の生物學、化學に依つて影響される日が來ることを豫想してよい。この日は未だ遠くにあつて、現在ではこの病氣狀態は醫學の方面からは、手をつけられてゐない。

若し、醫學の敎育が、神經病の領域に於ける啓蒙を醫者達に拒絕してゐるだけだつたら未だよい。然しそれはもつと多くの事をやつてゐる。誤れる、有害な觀方をさへ與へてゐる。人生の精神的要素に對する關心を呼びさまされなかつた醫者は、餘りにも、此要素を輕視し、非科學的として嘲笑する傾向がある。それ故に、彼等はそれ等に關係するものを決して眞面目にとり得ないし、又、それ等から導かれる責任を感じない。それ故に彼等は心理學的研究に對しては素人的不注意に墮し、彼等の仕事を輕々とやるのだ。人々は實際、神經病者が病人であり、醫者に助力を請ふからして、治療せねばならぬし、又、常に新しい試みをしなければならない。然し何の爲に、永い準備の苦勞が課せられるのか？　この狀態はこのまま續くだらう。それが何の價値があり、何が分析の學校で敎へられるかは誰も知らない。彼等は對象を理解する事が少ければ少い程大膽になるだらう。唯眞に理解してゐる人のみが、謙讓にやるだらう。何故なれば、彼は如何に此學問が不十分であるかを知つてゐるから。

君が私を擁護する爲に引いた分析上の專門と、他の醫術上の部門との比較は、從つて、適用し得ない。外科醫、眼科醫等にとつては、學校自身が、より廣い敎育の可能性を提供する。分析學の敎育設備は、數も少いし、年數も若く、權威がない。醫學校は、それを承認もしなかつたし注意もしない。自分の判斷の養成には殆ど機會のないほど、先生達から多くのことを信じなければならない若い醫者は、未だに認められる程の權威者の出ない領域で、結局一度は好んで批評家の役を演ずる機會を掴みたがる。

また、分析上の素人醫者としての、彼の出現を辯護する他の事情がある。若し彼が十分な準備なしに、眼科手術を行はうとした場合、彼の白內障摘出術と虹彩切除の失敗と、患者の疎隔とは、彼の冒險に間もなく終りをもたらすだらう。分析の實施は、患者には、比較的無害である。大衆は、眼科手術の一般の好結果に依つて慣れ、手術者から治療を期待する。然し、若し、神經病醫が病人を恢復しない場合には、何人も、それに就て怪しまない。人々は神經病に於ては、治療法の効果に慣れて居ないし、神經病醫は少くとも「多くの神經病を取扱つて」きたが然し、今は、大したことは出來ないから、自然が、或は時が手傳はなければならない。卽ち、女性に於ては、第一に月經、次に結婚、後には月經停止が、最後には實際死が手傳ふ。又、醫者の分析者が神經病者に試みたものは、あまり目立

ためので、何等の非難も留め得ない。彼は何等の器具も、醫藥も用ひず、唯、病人と語り、彼に何か說得しようと、又は諫止しようと試みただけである。このことは決して有害ではない。殊にその際に苦痛を與へる刺戟的なことに觸れることが避けられた場合には。嚴格な指導から開放された醫學出身の分析者は、確かに分析を改良し、分析から毒窗を拔き去り、分析を病人に愉快にしようとする試みを放棄しなかつただらう。そして若し、彼がこの試みを續けてゐたならばとてもよいことだ。何故ならば、若し、彼が實際に反抗を起すやうにやつた場合、そしてそれをどう處置してよいか、知らなかつた場合に、その時には、彼は事實全く不人氣になつて了ふだらう。

敎育を受けない分析者の行爲が、未熟な手術者のそれよりも、病人にとつて無害であるといふことは承認される權利がある。可能な害は、病人が無益な贅言に誘惑されて、彼の治療の好機を失ふか、又は、却つて惡化せられることに限られてゐる。更に、分析治療法の評判が貶される害がある。このことはすべて望ましくない事であるが、然し、外科の素人醫者のメスを以て脅かされる危險とは全く比較にならない。私の判斷によれば、分析の未熟な應用の際にも、病氣の狀態の重い、繼續的の惡化といふことは心配せずともよい。不快な反作用は暫くして後には再び消えて仕舞ふ。病氣をひき起した爲の人生の傷害に比すれば、醫者に依る些細な過失は問題にならない。唯たまたま、不適當な治療

法が病人に何の効果ももたらさなかつただけのことである。

『私は君に妨害せずに、分析に於ける醫學上の素人醫者の說明を聞いた。そして君は醫術の歷史的說明に道を示して吳れたが、その醫術に對しては君が敵意をもつてゐるといふ印象をうけた。然し、更に次のことを付加したい。即ち、たとひ分析が行はれなければならぬとは言へ、分析について根本的に敎育を受けた人々に依つて行はれなければならぬと言ふことである。そして君は分析に轉向する醫者が、時と共に、この敎育を自己のものとする爲に、全力を盡すとは信じないのか？』

私は彼等がやらないだらうと懸念する。分析の敎育設備に對する學校の關係が變化しない限り、醫者は恐らくこのことを容易ならしめる試みをば、あまりに大きい仕事と考へるだらう。

『然し君は素人分析の問題についても直接の表現を徹底的に避けてゐるやうに見える。今、私は、分析しようと欲する醫者を監督し得ないといふ理由から、幾分復讐心から、彼等の懲罰として、分析の獨占を彼等から奪ひ去り、この醫術の仕事を素人にも開放せねばならぬ、とさういふことを君が提出してゐると推測しなければならない。』

君が、私の動機を正當に推測してゐたかどうかは知らない。恐らく、私は君に、後になつてから、君が殆ど公平な態度をとつてゐるといふ證據を示すことが出來よう。然し私は何人も、分析を行ふ權

利を一定の教育に依つて獲得せざる人は、分析を行ふべきでない、といふ要求に、重點をおいてゐる。その人が醫者であるか、さうでないかは、私にとつて第二の問題であるやうに思はれる。

「そんなら、君は如何なる明確な提議をしなければならないのか？」

私は未だ、そこまで行つてゐないし、又、結局、そこまで行くかどうかも解らない。私は君と他の問題を論究したいが、然し序論として、或一定の點にも觸れたい。所轄官廳では醫術奬勵のために、素人に對して、すべて一般に、分析の實施を禁じようとしてゐるといはれてゐる。この禁止に依つて、精神分析の會に屬して、醫者を職業としないが、すぐれた教育をうけ、演習に依つて非常に完成された會員も亦不意打を喰ふだらう。禁止が發せられるならば、一方に於ては、或人々には、彼等が非常によく成し得ると確信されてゐる仕事の實行が遮ぎられ、他方に於ては同一の能力の保證では問題にならない他の人々に、その仕事が解放されるといふ狀態が生ずるだらう。この事は、まさしく法律が達せんとした結果でない。然しこの特殊の問題は、餘り重大でもなく、又、解決するに困難でもない。この際には、少數の人々の問題で、彼等は大して損害もうけないだらう。彼等は恐らく獨逸に移住するだらう。そこでは何等の法律の規定にも妨げられず、直ちに、彼等の才能は承認せられるだらう。彼等に、これを省き、彼等の爲に、法律の苛酷を和げようとするならば、このことは、衆知の

先例を固持することをもつて、容易に行はれ得よう。君主政體の墺太利に於ては、有名な素人醫者には、彼の實際の力量が確信せられてゐたから、一定の領域に於ける醫者の仕事の許可が、人によつて、與へられてゐた事が繰返しあつた。此等の場合は田舍の醫者であつた。そして推薦は、かつては非常に多かつた太公妃の中の一人に依つてなされたのが普通だといはれてゐるが、然し之は、都會人にも、又、他の單なる専門家的知識の保證を根據としても起らなければならぬだらう。今後、醫者でないものの候補者は、何人も教育を受けることを許さぬといふやうな禁止が、ウイーンの分析教育學校に及ぼす作用は意義深いものだらう。これに依つて我が國に於ては、他國に於て自由に發展し得る精神活動の方向が再び壓迫せられるだらう。私は法律と命令との判決の中に權限を要求せんと欲する最後のものである。然し、我々素人醫者の法律の高唱は、今日明かに渇望されてゐる獨逸の狀態への同化を意味するものではないこと、及びこの法律の制定の當時は未だ何等の分析も存在せず、神經病の特性も尚、知られてゐなかつた故に、この法律の精神分析の場合への適用は、何か時代おくれのものをもつてゐること、これ等のことだけは私も見てゐる。

さて私は、一つの問題にぶつつかる。そしてその議論はかなり重要なものと思ふ。精神分析の實施は結局、政府の干渉に屈服すべき對象であるか、或は自然の發展に委ねるのがより合目的であるか？

私は、ここでは、確實に決定は出來ない。然し、君の考慮にこの問題を提出する自由はもつてゐる。我が國に於ては、古來、眞の furor prohibendi（禁止狂）が、卽ち監督、干渉、禁止の性癖が流布してゐる。これは我々皆の知るやうに、よい果實を結ばなかつたが。新しい共和政體の墺太利に於ても、尙、そんなに變つてゐるとは思へない。我々がやつてゐる精神分析の場合に對する判決の際に、重大な言葉を付加しなければならぬと私は思ふ。君が官僚政治の傾向に反對する興味を、又は力をもつてゐるかどうかは知らないが、私は、君に、我々の問題に就ての私一箇の考へを、どんな場合にも省約しようとは思はぬ。命令と禁止の夥多は、法律の權威を損ふと思ふ。僅かの禁令しかない所では、其等の禁止は注意深く守られ、一擧一動、禁令に伴はれてゐる所では、其等を越えんとする誘惑を明かに感じるといふことが觀察出來る。更に法律と命令とは、その由來に從へば、神聖と不可侵の特權を付與され得ないこと、その內容は屢〻不十分で、我々の法律感情を傷つけるか、或は暫く後にさうなること、又、社會を指導する人々の不活潑の下では、かかる非合目的の法律の矯正には、斷乎としてそれを犯すより他に手段がないこと等を熱心に洞察しようとする場合でも、決して無政府主義者ではない。又、法律と命令とに尊敬を拂ふ場合にも、その嚴守と、違反とを監視することとの困難なものは制定しない方がよい。我々が醫者に依る分析の實施に就て言つた多くのことは、ここで、法律

が壓迫しようとする本來の素人分析の爲に、繰返されるだらう。分析の進行は眞に地味であり、藥劑も、器具も、應用せず、會話と報告の交換とで成立する。素人に、若し彼が唯、慰藉の言葉を與へ、說明を與へ、精神的の貧困者に効果ある人間的感化をもたらさうと試みてゐる場合に、彼が「分析」をやつてゐると指摘することは容易でないだらう。然し、このことは禁じ得ない。何故なれば醫者も亦、度々やつてゐるから。英語を話す國々には「信仰療法」の實施が、非常に擴がつてゐる。それは基督教の敎義の引證に依る人生に於ける惡の辯證法的否定の一種である。私はこの方法が人間精神の悲しむべき混亂を示してゐると主張するに躊躇しない。然し、亞米利加及び英國に於ては、誰がこれを禁止し、罰しようなどと考へただらうか？　一體我が國の政府は、各人が「各自の型に從つて幸福にならう」と試みるのを敢て妨害出來る程、そんなに、幸福への正しい道を確信してゐるのか？　そして、多くのものは、獨立しては危險に陷り、有害であるといふことを是認して、政府は、侵し得ないものとして認めなければならぬ領域をば、注意深く制限し、尙、出來る範圍に於て、人間を經驗と、相互の影響に依る敎化とに委ねる樣に、よりよい方法をとらないのか？　精神分析は世界に於て、非常に新しいものであり、大多數の人々は、分析に就ては殆ど方向を定め得ず、又、分析に對する一般の科學の態度は尙非常に動搖してゐるので、私には、今既に法律の規定を以てそれの發展に干涉せん

とするのは早計であるやうに見える。我々は、病人自身をして、實際行はれてゐるやうに、學んだことのない人々の許で精神的助力を求めることが、彼等にとつて有害であることを發見せしめよう。我我がこのことを病人に說明し注意するならば、それを彼等に禁ずることはやらないでよい。伊太利の國道には、道標が簡潔に、印象深い題名を示してゐる。「觸るる者は死す」。(Chi tocca muore) 之は、垂れてゐる電線に對して通行者の行動を規定するに十分である。これに相當する獨逸の警告は、夥しい侮辱的の警言のやうである。即ち、生命に危險である故に、電線への接觸はかたく禁ぜられてゐる。何のための禁止か？　生命を愛する者は、自己の生命をいたはり、この道で自殺せんと欲する者は許可を問はない。

「然し、素人分析の問題に不利益として例證され得る場合もある。私は素人に依る催眠術を行ふことの禁止と、近頃制定された神祕學に關する會議の開催を始め、かかる團體の設立に對する禁止のことを考へてゐる。」

私は、此處置の讃美者であるとは言へない。後者は知的自由を損傷する警察の監督の全く明白な侵害である。私は所謂神祕的現象に多くの信仰をもち、又は進んでそれ等の現象を認めるものだと誤解されては困る。然し、斯樣な禁止があつても、此所謂神祕世界に對する人間の興味は窒息させられな

い。かかる事は反對に恐らく非常に有害な、卽ち、公平なる知識欲に對し、この彈壓されてゐる方面に就ての自由なる判斷をなさんとする道を閉ざしたものである。然し、これも單に墺國だけの事である。他の國々に於ては「超精神的」の研究も何等法律の障碍と衝突しない。催眠の場合は、分析の場合と幾分異る。催眠は異常な精神狀態を惹起する事であり、今日では素人には、唯、見世物の手段としてのみ役立つてゐる。若し、最初に非常に希望に充ちた催眠治療法が行はれたならば、分析の狀態と同樣な狀態が起つただらう。然し、催眠の歷史は、他の方面に於て、分析の運命に對して一つの先例を示してゐる。私が神經病理學の若い講師であつた時、醫者達は、非常に催眠に對して憤激し、これを詐欺であり、惡魔の魔法であり、最も危險な干涉であると宣言した。今日彼等はその催眠を獨占し、研究方法として憚る事なく利用し、多くの醫者にとつては、尙常に治療法の主要な手段である。

然し、旣に言つたが、私は、分析の事においては、法律を以て規定するか、或は自由に任せるか、何れがより正當であるかの決定如何の異議をしようとは考へない。このことは根本的な問題であり、その解決には論義よりも、權威ある人々の、關心がより大きい、勢力をもつてゐることを知つてゐる。Laissez faire（放任）政策の齎す結果については旣に一緖にして述べてきた。若し能勳的な干涉の政策をとる事になる場合、素人に依る分析を顧慮する所なく禁止するといふ不具な、不法な處置は、確

かに何等十分な、滿足させる行爲ではないやうに見える。その時には、より多くの面倒が起る。分析の實際の應用が許可せられる條件を、分析を行はんと欲するすべての人に對して確立せねばならないし、分析とは何であるか、又、分析には如何なる準備が必要であるかの敎示をうけることの出來る何かの權威を設けなければならないし、又分析に於ける敎育の可能性を促進せねばならない。卽ち、干涉しないか、又は、秩序と明快とを與へるかをせねばならない。然し、不十分な條文を以て機械的に作られる支離滅裂な禁令に依り、混亂せる狀態の中に入り込まないやうにしなければならぬ。

七

「左樣、然し、醫者が問題なのだ。私は君を我々の議論の本來の題に入つて來る樣にしむけ得ない。君はいつも避けてゐる。しかし、問題は何としても、醫者がある條件を充した後なら、彼等に分析應用に對する絕對的優先權を與へてはならぬかと言ふことだ。實際確かに醫者は、大多數は分析に於ては、君の述べたやうな素人醫者ではない。君自身も、君の學生と、弟子との壓倒的大多數は、醫者であると述べてゐる。私の言葉からは、此等の人々は素人分析の問題においては君と立脚點を同一にしてはゐないことが推測されよう。勿論私は、君の學生達が、君の要求に從つて、十分な準備等へ協力することは承認出來る。然し、彼等は、分析の應用を素人には遮ることに同意するだらう。さうだらう。そして若しさうならば君はそれをどう說明するか？」

君はよく解つてゐるやうだ。それはさうだ。成程、私の醫術上の、協力者の皆ではないが、大部分は、この問題では私を支持しないで、神經病者の分析治療に對する醫者の獨占權を保護してゐる。このことから君は我々の陣營に意見の相違が起り得ることを察知するだらう。私の左祖は衆知のことで

あり、そして素人分析の點に於ける反對は、我々の了解を放棄し得ない。如何に、私は君に、此等の學生達の態度を說明し得るか？　よくはわからないが、思ふにそれは職業意識の力であらう。彼等は私とは違つた途を進んで來たし、同僚から孤立することには尙、不快を感じてゐる。彼等は職業から完全に權能を與へられたものとして待遇されたいし、そして、それの人生に對する重要さの解らない位置に於て、この寛容に犧牲を齎さんと用意してゐる。又、恐らく他の理由もあらう。彼等に競爭の動機を强ひることとは、唯に、彼等に低級な性的の責を負はせるのみならず、又、特殊の近視性を彼等に期待することを意味するだらう。彼等は實際、常に、他の醫者達に分析を敎へたがる。而も利用すべき患者を、同僚或は素人のいづれと共に取扱ふべきかといふことは、彼等の實際の事情にとつては無關心事に過ぎないのである。然し、恐らく尙、他のことも問題とならう。私の學生達は分析實施に於ては、醫者に對して素人よりも明かに優越してゐることを保證する或要素の影響の下に立つてゐるのかも知れない。

『優越を保證するのか？　それ見給へ。そこで君も到頭優越を認めるのか？　これで問題は決定しただらう』

承認することは難かしくないだらう。今述べた事は、私が、君の考へてゐる程、そんなに短氣に目

な語まされてはゐないことを示すだらう。君の議論は、再び理論討究を必要とするから。私はこの關係の陳述を延したのだ。

「君は今、何を考へてゐるのか？」

先づ診斷の問題である。若し、所謂、神經障害に惱んでゐる病人に、分析治療を行はんと欲する場合、その前に——出來る限り——彼がこの治療に適してゐること、そこでこの方法で彼を救ふことが出來るといふことを保證しようとする。このことは然し、彼が眞實神經病である場合のみである。

「それは、病人の訴へる諸現象や、諸症候に依つて知られると思ふ。」

ここが、新しい混亂の起る所である。それは必ずしも完全な保證で認められない。病人は神經病の外觀を示し得るが、然し、それは他のものでもあり得ることがある。治療し難き精神病の發端とか、破壞しつつある腦髓の過程の準備であるとか、區別——區別診斷——は必ずしも容易でなく、又、すべての過程に於て直ちに出來るものでもない。勿論この決定に對する責任は、唯、醫者のみが負ひ得る。既に述べた如く、この決定は醫者にも必ずしも容易でない。病氣は、最後に惡性が現れるまで、永い間、無害の性質をもち得る。精神病にならないかどうかといふことは、實際神經病者の通常の恐怖である。若し、醫者が、斯樣な場合を、暫くの間、誤解してゐた時とか、又は、不確實に止つてゐ

た時とかにはあまり大したことは出來ずに、何等の害も起さず、又少しも利益にならなかつた。病人の分析治療は、成程、何等の害ももたらさなかつただらうが、然し無用な贅澤として暴露されたらう。のみならず、思はしくない結果を分析のせいにする人々も、確かに少くはないだらう。勿論不當ではあるが、然し斯樣な言ひがかりは、さけられなければならない筈だ。

「これは然し、望のないことだ。それは、實際、君が私に、神經病の性質や、發生に就て述べたすべてのことを根こそぎにするものだ。」

決してさうではない。そのことは神經病者が、すべての關係者に即ち分析者にとつても「不快」であり、「當惑」であるといふことを更に確證するだけのことだ。若し私の報告を、より正確な表現を以てするならば、恐らく君の混亂は再び解けるだらう。我々が今取扱つてゐる場合について言へば、それ等は實際に、神經病を進展させた。然し、この神經病は精神的でなくして、肉體的であつて、精神的ならざる肉體的の原因をもつてゐると言へば、恐らく一層正當であらう。君には解るか？

「解る。然し、私はそれを一方のもの、即ち心理學的なものと結合することは出來ない。」

然し、若し、生きてゐる實體の錯雜といふことを考へようとさへすれば、それが出來るだらう。どこに我々は神經病の本質を發見したか？　それは外界の影響に依つて育てあげられた精神組織の高級

機能である自我が、他我と實在との調停の作用を果し得ない點に又、自我が無氣力の狀態に於て他我の衝動關與から後退し、その爲に、この斷念の結果を、制限、症候、効果なき反動作用構成の形式に於て滿足せねばならぬといふ點にある。

斯かる自我の無氣力は、我々すべてにとつて通常幼少時代に起る。それ故に最も早期の幼年時の體驗は、後の生活に大きな意義をもつてゐる。この幼年時代の異常なる負擔の下で――我々は僅かの年數のうちに、石器時代の原始狀態から、今日の文化の關與者までの驚くべき發達の距離を通過せねばならぬし、そしてその際特に性的幼稚時代の衝動興奮を防止せねばならない――我々の自我は、排斥することに避難所を求め、そして小兒神經病に曝される。そしてその神經病の沈澱を、自我は後年の神經病への素因として生命が成熟するまで伴ふ。さてこの成長せるものが運命から如何に取扱はれてゐるかにすべての問題がある。生があまりに苛酷であり、衝動要求と現實の抗議との間の間隔があまりに大きくなる時、自我は、兩者を調停せんとする努力に失敗するだらう。そして自我が、同伴してゐる幼稚な時代の素因に依つて妨害されることが多ければ多い程、それだけ早くこの失敗が起る。それから排斥の現象が繰返され、衝動は、自我の支配から引きはなされ、復歸の方法で、補償の滿足を創る。そしてあはれな自我は、餘儀なく神經病にならざるを得ない。

我々は、ただ、全事情の交叉點及び回轉の中心點は自我の組織の相關的な强さであると固く信じてゐる。そこで我々は容易に病原學的知識の把握を完全にすることが出來る。我々は神經質の所謂普通の原因として既に幼少時の自我無力、早期の性的興奮征服の任務及び偶然的幼少時の體驗の影響等を認める。然し、幼少時代以前から由來してゐる他の要素もまた、その原因の一つとしての役目を演ずることが出來ないだらうか？　例へば、早くから自我に、あまりに大きな任務を課してゐる他我の中の衝動生活の本來の强さと制御し難き性質とか？　或は、未知の理由に依る自我の特別なる生長の無氣力とか？　明かにこれ等の要素は病原學的意義に、而も多くの場合、卓越せる意義にならねばならぬ。あらゆる場合に、我々は他我の中に於ける衝動の勢力を清算しなければならぬ。その衝動が過度に發達してゐる場合には、我々の治療の期待にとつて都合が悪い。我々は未だに自我の發展妨害の原因については殆ど知らない。このことが即ち著しく體質的（konstitutionell）基礎をもつ神經病の起る場合であらう。何等かの、斯樣な、體質的、同質的の後楯なしには、恐らく神經病は起らぬであらう。

しかし、自我の相關的無氣力が、神經病の發生にとつて、決定的な要素であるならば、後年の肉體的病氣が、若しそれが單に、自我の衰弱を招來し得る場合、神經病をおこすことも可能でなければな

らぬ。そしてそれは又非常に屢〻おこる。かやうな肉體的障害は、他我の中の衝動生活を襲ひ、自我が匹敵してゐる境界を越して、衝動の力を高めることが出來る。斯様な現象の普通の例は、月經障害と、月經中止の障害に依る女性の變化であらう。或は肉體の一般の病氣、左様、神經中樞器官の罹病は、精神器官の榮養條件を病め、その機能を低下せしめ、自我組織を維持してゐる纖細な働きを中止せしめる。すべて此等の場合には、ほゞ同一の神經病の形態が發生する。神經病は常に同一の心理學的構造を持つが、然し我々の認めるやうに、極めて多様な、屢々非常に混和された病原學をもつてゐる。

『君が到頭醫者のやうに話したのは大變嬉しい。さて、私は神經病のやうな、斯様な錯雜した醫術のことは、唯、醫者に依つてのみ取扱はれ得るといふ承認を君から期待する。』

私は、君が、それで目的以外に走りはせぬかと懸念する。我々の話したことは病理學の斷片であつた。分析に於ては治療法が問題である。分析が問題になつてゐる時には、如何なる場合にも、醫者が先づ診斷を試みなければならぬといふことを、私は許容、否、要求したい。我々を必要とする神經病者の大多數は、幸ひなことには、「精神的性質」であり、疑ひもなく病的である。醫者がこのことを確めたならば、彼はこの治療を安心して素人分析者に委ね得る。我々の分析學會に於ては、常に、かく

の如くに行はれてきた。醫者と素人との會員間の密接な接觸のお蔭で、心配される錯誤も完全な程度に避けられた。それから尙分析者が醫者の助力を求めねばならぬ第二の場合がある。分析治療の經過中に——最も早くは肉體的の——症候が現れることがある。その際に、この症候を神經病の關係の中に入れるか、或は、それから獨立した障碍として現れた組織上の病氣に關係せしむべきかに疑問が起る。この決定は再び、醫者に委ねられねばならぬ。

「それでは、素人分析者は、分析中にも亦、醫者を缺き得ないことになる。彼の有用性に反對する新しい論據だ。」

否、この可能性から素人分析者に反對する何の論據も案出出來ない。何故なれば、醫者の分析者と雖もこの場合、違つた處置は出來ないだらうから。

「私には、それは解らない。」

卽ち、次のやうな技術上の規定がある。若し、治療中に、斯樣な曖昧な症候が現れた場合には、分析者は、それを自分自身の判斷に從屬せしめずに、分析と離れてゐる醫者から、出來るならば內科醫から、判斷を求めるといふのであつて、これは、分析者自身が醫者であり、醫術上の知識に自信をもつてゐる場合にも守るべきである。

「何故に、そんな餘計に見えるものを規定したのか？」

それは餘計ではない。のみならず多くの論據をもつてゐる。第一に一人で器官上と精神上の治療の結合をうまく行ふことが出來ないし、第二には移送の關係が、分析者に、病人を肉體的に調べることを不得策にすることがあり、第三には、分析者は、彼の關心が非常に強く精神的要素に向けられる時には、彼のとらはれざる態度に疑ひをいだくやうなすべての理由をもつてゐるから。

「君の素人分析に對する態度は今は明瞭になつた。君は素人分析者がゐなければならぬと主張する。然し、君は彼等の仕事に對する不十分さを論爭することが出來ないので、彼等の存在の辯明と緩和とに役立ち得るすべてのことを集めるのだ。然し、結局、私は、何としても第二流の治療家にすぎない素人分析者が、何の爲に必要なのか解らない。私は既に分析者に仕上げられた二三の素人を除きたいが、新しい素人分析者は作られてはならぬし、教育設備も、素人を最早教育に採用しない義務をもたねばならぬと思ふ。」

この制限に依つて、すべての觀察に上る諸關心を滿足させ得ることが示されるならば、私は君と同意見だ。君はこの關心が、三つの種類から成つてゐることを認めるだらう。即ち病人のそれ、醫者のそれ、そして——最後が最少ではないが——すべての未來の病人の關心を包括する科學のそれであ

る。我々はこの三つの點を相互に研究しよう。

さて、病人にとつては、唯、治療前と、治療中の偶發事件の際に、需められた醫者の判斷に依つて、彼の狀態を誤解することの危險が除かれさへすればよいので、分析者が醫者であるかないかは無關心である。分析者が、信頼するに足る人格的特性をもつことと、彼が、唯、彼のみに、仕事の遂行の能力を與へてゐる知識と洞察と經驗とを獲得してゐるといふことは、病人にとつて、この上もない重要なことである。若し分析者が醫者でなく、多くの局面に於て、醫者の支持を缺き得ないことを患者が知るならば、分析者の權威を損ねるに相違ないことは考へられよう。我々は勿論患者に分析者の資格を知らせることは決して斷念しなかつた。そして、彼等に於ては、職業の偏見は、少しも反響を見出さないこと、又、彼等は治療法を如何なる方面から申出されても喜んで承認することを我々は確信出來た。尤もこのことは、然し、醫者を、ひどく立腹させたことだが。又、實際、今日、分析を行ふ素人分析者は決して任意の外來の人ではなく、アカデミックの敎養のある人、哲學の博士、敎育學者、偉大な經驗と優れた人格とをもつてゐる婦人達等である。分析の敎育學校のすべての候補者が企てねばならぬ分析は、同時に、このむづかしい仕事の實行に對する彼等の人格的適應性を解明する爲に最良の方法である。

次は醫者の利益問題である。私は、それが精神分析を醫術に併合する事に依つて獲得すべきだとは信じ得ない。醫學の研究は、今日では、五年もかかる。そして卒業試驗の完了は、六年目にはひる。二三年毎に學生にとつて、新しい要求が現れるが、その成就なしには、彼の未來に對する準備も不十分と宣言されねばならぬだらう。醫術の職業への入門は、困難であり、熟練は非常に滿足なものでも又非常に利益のあるものでもない。醫者は病氣の精神的方面をも習得せねばならぬといふ確かに正當なる要求をもつならば、そしてその爲に醫術の敎育を分析の準備にも幾分なりと擴張するならば、それは敎材のより廣い擴張とそれに相當する學年の延長を意味する。醫者が精神分析に對する彼等の要求から導かれて、斯かる結論に依つて滿足させられるかどうかは、私は知らない。然し、この結論は拒否する譯にいかない。而もこのことは、實際生活の條件が、將來醫者になるこの階級にとつて、非常に低下し、その爲に、若い人々は、出來るだけ早く自活しようと渴望してゐるやうな時代に於てである。

然し、君は恐らく、醫術の研究が分析實習に對する準備を以て煩はされることを望まないだらうし、又、未來の分析者は醫術の研究の完成後に初めて必要な敎育に關心することをより合目的的だと考へるだらう。君は、それに依つて生じた時間の空費も、實際的には問題とならぬ、何故ならば、三十歳

前の若い人は精神上の扶助條件である患者の信頼といふものをどうしても得られないからとさう言ひたいだらう。それに對しては、次のやうにも答へられるだらう。肉體の病氣を取扱ふ新米の醫者でも、病人の許では、そんなに大した發敬を豫期する事が出來ないし、又、若い分析者は經驗ある實際家の指導の下で、精神分析の外來診斷をやることで、十分に、時間を使用し得るだらうと。

然し、私には、君が、このやうな困難な時代に、實際何等經濟的辯明を見出し得ない樣は力の浪費を、この提議で、代辯してゐることが、より重大なことに思はれる。分析の敎育は、成程、醫術の準備の範圍を突破してはゐるが、然し、醫術の準備を包括してもゐないし、又、それに包括されてもゐない。今日では、尙、空想的に響くかも知れぬが、若し精神分析の大學が設立されなければならぬ樣なら、醫科大學でも敎へてゐる多くのことが敎へられなければならぬだらう。卽ち、常に主要部門に止るだらう深部心理學の他に、生物學の紹介、性生活の出來るだけ廣範圍に亙る知識及び精神病理學の疾病表象の通曉等である。他方、分析の敎育は、醫者に縁遠い醫者の仕事に於ては關係のない他の部門をも包含するだらう。卽ち、文化史、神話學、宗敎心理學、文藝學等である。この領域に對する正しい研究なしには、分析者は彼の材料の大部分を理解し得ずに居ることになる。その代りとして、彼は、醫學校で敎へることの大部分を、彼の目的に役立てることは出來ない。踝骨の知識、炭化水素の

構成の知識、腦神經纖維の迷走の知識、及び醫學がバチルスの病原と、その抵抗に就て、又、血淸反應と纖維の新組織について明かにしたすべてのこと。此等すべては確かに、それ自身、非常に價値あるものであるが、分析者にとつては、然し全然無關係であり、何等問題とならず、神經病を理解し、治療する直接の助けともならず、又彼の仕事が非常に要求する知的能力の銳敏化にも役立たない。この場合は、醫者が他の醫學の專門、例へば、齒科學に向ふ場合と似てゐるのだと抗議してはならない。さうした場合でも、不必要なものを試驗しなければならなかつたし、學校が彼に準備しなかつた多くのことを附加して學ばねばならない。兩者の場合は然し、同一にはおかれない。齒科學にとつても、病理學の大きな見地、炎症、化膿、骨症の理論、人體諸機官の相互作用の理論は大きな意義をもつてゐる。然るに、分析者の場合には、彼の經驗が彼を他の現象と、他の法則とをもつ他の世界に導くのである。如何に哲學は、常に、肉體的なものと、精神的なものとの間隙を飛越えようとも、哲學は我我の經驗の爲に、第一に存在し、のみならず我々の實際的努力の爲に存在するのである。

他人を恐怖症、或は强迫觀念から解放しようと欲する人を醫術の研究への迂路を强ひるのは不當であり、合目的的でない。分析を全然壓迫することに成功しなければ、それはまた、何の効果も齎さぬだらう。ある眺望の地點に行くのに二つの道があると考へ給へ。一本は近く、直線であり、他方は遠

く迂廻してゐる。恐らく、その近道は、大事にいたはられて欲しい二三の花壇の側を通つてゐるといふ理由で、君は禁止の黑板でその近道の通行を遮らうと試みる。遠い道が、ゆるやかに上つてゐるのに、近い道が險しく、骨の折れる場合にのみ、君の禁止も顧慮されるだらうと期待出來る。しかし、それとは違つて、反對に迂路が、より不便である場合には、禁止の適用と、花壇の運命とを容易に推測出來るだらう。私は、君が素人に醫術を學ばしめようと强ひることは、私が醫者を動かして分析を學ばしめることに成功しなかつたと同樣に、出來ないだらうと懸念する。君も實際、又、人間の性質を知つてゐる。

「若し、君の言ふやうに、分析治療が特別の教育なしに行はれること、然し、醫術の研究は、それに對する準備に依つて負擔を增すことを得ないこと、又、醫術の知識は分析者にとつて、大部分餘計なものであること等が正當であるならば、我々が、醫者の職業のすべての任務に耐へなければならぬ醫者としての理想的人格を達成することは、何になるのか?」

私は、この難點からの逃路が何であるかを豫見出來ない。又、それを說明するに相應しくない。唯私は二つのことが解るのみだ。第一は、分析が君にとつて混亂である事、混亂はどうあつても存在してはならぬこと、——確かに、神經病者も混亂である——そして第二には、醫者が、治療家のある階

緩み寛容に認めようと決心した場合には、その前に、あらゆる關係が斟酌せられることである。この治療家達は、非常に屢々起る精神上の神經病の困難な治療を醫者から除き、彼等と常に接觸して、この病人達の利益になるのである。

『これが、この問題に於ける君の最後の言葉であるのか、或は尚、言ふことがあるのか？』

勿論、尚、第三の關係、科學の關係を見ようと思ふ。私が、ここで言はなければならぬことは、君には可なり縁遠いだらうが、それだけ私には多くの意義があることだ。

我々は、精神分析が醫學に呑込まれ、そしてその最後の沈澱を精神病理學の教科書中の治療法の章に、催眠術の暗示、自己催眠說得法と相竝んで見出すことを望ましいものとは決して考へない。此等は、我々の無學から創り出され、彼等の短命な効果を大衆の、怠惰と卑怯とに負うてゐる。精神分析は、よりよき運命に値してゐるし、又恐らくは、それを持つだらう。深部心理學は、精神的無意識の學として、それは、人間文化の發生史と、藝術、宗教、社會秩序の如きその文化の偉大なる設備と關係あるすべての學に缺くべからざるものと成り得る。精神分析は此等の學に、これまで、旣に、彼等の問題の解決に、大きな助力を與へて來たと思ふ。が然し、文化史家、宗教心理學者、言語學者が彼等の自由になつたこの新しい研究手段を、自ら把握し、應用することを承認する場合に達成せられるもの

に比較すれば、些細の貢獻に過ぎない。神經病の治療に分析を用ひることは、精神分析の多くの應用の中の一つに過ぎない。恐らくそれは將來は、最も重大なものでないことが示されるだらう。應用領域が醫術上の關係の範圍と接觸してゐるといふ單なる理由で、この一つの應用の爲に、他のすべての應用を犧牲にするのは、如何なる場合と雖も、不當なことだらう。

何となれば、ここに、損害を與へずには干渉し得ない廣い關係が展開する。若し、種々の精神科學の代表者達が、彼等の材料に、この方法と見地とを應用する爲に、精神分析を學ばねばならぬ場合には分析上の文獻の中に書かれてゐる結果に賴ることは十分でない。彼等はそれに開かれてゐる唯一の方法で、即ち自分で分析を企て乍ら分析を十分に理解せねばならないだらう。かくして分析を必要とする神經病者に、分析を知的の動機から承認する第二の人々が加はるだらう。然し、序に達せられる實行能力の向上といふことは歡迎されよう。此等の分析の實行には、多數の分析者が必要であり、彼等にとつては臨時の醫術の知識は、特別に無價値な意義しかもたぬだらう。此等の人々は——我々は理論分析者と呼びたいが——特別に細心な敎育を經驗してゐなければならない。この敎育を彼等に妨げようと欲せぬならば、彼等に、敎訓的な、論證的な場合に於ける經驗を集める機會を與へなければならぬ。そして知識慾の動機の缺けてゐる健康な人々は分析治療を受けないから、理論分析者が——

細心な監督の下に——依つて以て將來の素人分析的實行に敎育されるのは、唯神經病者を相手にしてのみ可能である。然して、全體は、或限度の自由行動を要求して、些末な制限を忍び得ない。

恐らく、君は精神分析の此等の純理論的な關係を信じもしないだらうし、又、此等の關係に素人分析の實際問題に對する何等の影響も認容しようと欲しないだらう。そんなら君は、素人醫者取締法の領域から取除かれ、又、醫者が何等要求を提出しないだらうやうな精神分析の、他の應用領域があることを考へ給へ。私は敎育學の中に於けるその應用を考へてゐる。若し、子供が望ましくない發育の徵候を現し始め、不氣嫌に、きむづかしく、放心したやうになる場合には、小兒病の醫者も、又校醫でさへも、これに對して何も爲し得ないだらう。又、子供が、恐怖、食欲不振、嘔吐、睡眠障碍等のやうな神經病的現象を示す場合でさへも、何も爲し得ないだらう。分析の影響を敎育的處置と結合した治療が、子供の周圍の關係を注意することを輕んぜず、又子供の精神生活への入口を心得てゐる人々に依つて行はれた場合には、その治療は一擧にして兩得、卽ち、神經病の症候を破却し、始まりかけてゐる性格の變化を退却させることに成功する。屢々不明瞭な子供の神經病の意義を後年の生活の重い病氣の素因として見る我々の判斷は、この小兒分析を優れた豫防法として示してゐる。尙、然し、明白な分析の敵が居る。私は、この敎育學的分析者や、分析學的敎育學者の行動を妨害する爲に、彼等

にどんな手段が意のまゝになるかを知らないが、又仲々、それは容易に出來るものでないとも考へてゐる。然し、勿論、決して安心し過ぎてはいけない。

兎に角、我々は大人の神經病者の分析治療の問題に戻るとするが、我々は又此處でも、尚未だ、すべての意見の立て方を言ひ盡さなかつた。我々の文化は我々の上に、殆ど耐へ難い壓迫を加へてゐる。何か修正が我々の文化に必要なのだ。精神分析が、その困難にも拘らず、人間をかくの如き修正に準備する使命を持ち得るといふことを期待するのはあまりに空想的であらうか？　恐らく、今一度、或る亞米利加人が、彼の國の社會運動家に分析教育を施して、文化的神經病の征服の爲に援兵を作る目的で、かなりの金額を費さうといふ思ひ付きに至るかも知れない。

『ハハア、救世軍の新しい種類だな。』

何故、いけないのか。我々の空想は實際いつまでも模範に從つて働くのだ。研究慾に充された人人の潮は、やがて歐洲に彌漫するだらうがウイーンは通り過ぎねばならぬだらう。何故ならば、此處では、分析の發達が手廻しの早い禁止傷害に依つて殺害せられて居るだらうから。君は微笑してゐるね。私は君の判斷に阿ねる爲に、このことを言ふのではない。決してさうではない。私は實際、君が私を少しも信用しないことを知つてゐるが、將來も信用しないだらうとは保證出來ない。然し、次の

ことは解つてゐる。君が素人分析の問題に、如何なる宣言を下すかといふことは、決して大して重要なことでないことだ。それは局部的の影響はもつだらう。然し問題の重點である精神分析の內容發展の可能性は、どうあつても、命令や禁止などに依つて止めを刺されることはないのである。

自傳

一

この『自家報告』集(註)の寄稿者達の二三の人々は、引き受けた課題の特殊性と困難に就て、二三の考へ深い注意を以つてその寄稿を書き起して居られる。私の課題は更にもう一段困難な事情にあると言つても差支へないと私は思ふ。といふのは私は今課せられてゐるやうな記事は既に再三發表したことがあり、そして題材の性質上、他の場合に普通であり或は必要と思はれる以上に私の個人的な役割について述べる結果になつたからである。

註　譯者註。この論文は Prof. Dr. L. R. Grote 編輯の叢書『自家報告による現代の醫學』第四卷に載せられたものである。(一九二五年)。

註　American Journal of Psychology 1910 に英語で掲載。獨譯は "Über Psychoanalyse" の題の許に F. Deuticke によりて。Wien, 7. Aufl. 1924. (Enthalten in Bd. IV der Gesamtausgabe.)

精神分析の發達及び内容に關する最初の報告は、一九〇九年、私がその創立二十年記念祭に招聘されたマサチユーセツツ・ウォースターのクラーク大學に於ける五回の講義でなした(註)。最近にはア

メリカの或叢書に同樣な内容の寄稿をする誘惑に從つた。それはこの出版物「二十世紀の初めに就て」が特別な一章を設けることによつて精神分析の意義を認めてくれたからである(註)。兩者の間には一九一四年に書いた『精神分析運動の歴史』(註)がある。これには本來私が現在の地位に於て報告すべきである總ての要點が述べてある。私は自家撞着をしてはならないし、又何の變更も加へずに同一のことを繰返し度くはないので、主觀的及び客觀的敍述の間の、傳記的及び歴史的興味の間の新しい混合の割合を見出すべく努めねばならない。

註 These eventful years. The twentieth Century in the making as told by many of its makers. Two volumes. London and New York, The Encyclopaedia Britannica Company. 私の論文は Dr. A. A. Brill によつて飜譯され、第二卷第七十三章を占めてゐる。(ドイツ文は Bd. XI der Gesamtausgabe.)

註 Jahrbuch der Psychoanalyse Bd. VI 掲載。一九二四年新たに別刷として發行。(Enthalten in Bd. IV der Gesamtausgabe.)

私は一八五六年五月六日メーレンのフライベルグといふ今日のチエコスロヴァキアの小さい町に生れた。私の兩親はユダヤ人であつた。私も亦ユダヤ人で留まつてゐる。父方の家系については、永い間ライン河畔(ケルン)に住まつてゐたが、十四世紀或は十五世紀のユダヤ人迫害の折に東へ逃れ、十九

世紀の間にリクウエンからガリシアを經てドイツ系オーストリアへ歸つて來たことが分つてゐると信ずる。四歳の時私はウィーンへ來て、そこで總ての學校を修了した。ギムナジウムでは六年間首席で通し、特別待遇を受け、殆ど一度も試驗されたことがなかつた。我々は隨分窮迫した暮しをしてゐたにも拘らず、父は私の職業選擇に於ては專ら私の嗜好に從ふべきことを要求した。醫師の地位と職業に對する特殊な嗜好はその頃の青年時代には感じなかつた。これは後になつても同じことであつた。寧ろ一種の知識慾、それも自然物よりは人間關係の方へ多く向つた。そして又主要手段としての觀察の價値を滿足の行くやうには認めなかつたところの知識慾が私を動かした。だが又その頃はやつてゐたダーウインの學說は恐しく私を引き付けた。それはそれが宇宙理解の素晴しい促進を期待させたからであつた。そして或通俗講演に於けるゲーテの美しい論文「自然」についての講話が、卒業試驗の少し前に、醫科へ願書を出す決心を與へたことを憶えてゐる。

一八七三年に入學した大學は最初私に幾らかの認め得べき幻滅を齎した。先づ第一に私がユダヤ人であつた爲に、私は自分を劣等なるものと思ふべきであり、且、國民所屬でないものと思ふべきだといふ要求に出遇つた。初めは私は斷乎として拒絕した。私は自分の血統を、或は人の言ひ始めた樣に言ふと、人種を耻ぢねばならない理由がどうしてもわからなかつた。私を拒む國民的團體を私は別に

大して殘念とも思はず諦めた。熱心な協力者に取つては、人類の埓内に於て、さうした仕組のない場所もあるに相違ないと私は思つた。だがこの大學の最初の印象の後の重大な結果は、私が非常に早くから反對の中に立ち「堅固なる多數黨」から追放される運命と仲よしになつたことであつた。判斷の或獨立性はかくして準備された。

なほその外に私は最初の大學時代に於て、次のやうな經驗をしなければならなかつた。卽ち私の天分の特性と狹隘とが、私が青年の過度の熱心から盲進した多くの學科に於て何等効果を上げさせなかつたのである。私はかくしてメフイストの警告の眞理を學んだ。

君がいくら學問をしようとさまよつても、無駄だ。
てんでに學び得られる事しか學ばれない。

エルンスト・ブリユツケ (Ernst Brücke) の生理學實驗室に於て、私はやつと落付きと十分の滿足とを、それから又私の尊敬し模範とし得た人々を發見した。ブリユツケは私に神經系統の組織學から課題を與へ、私はそれを彼の滿足するやうに解決し、獨りでその先を續けることが出來た。私はこの

教室で、短い中絶はあつたが、一八七六年から一八八二年まで働き、そこに出來るこの次の助教授（Assistent）の地位に任命されるものと一般に思はれてゐた。本來の醫學各科は――精神病學を除いて――私の心を引かなかつた。私は醫學の研究を全く怠慢に行ひ、それで又一八八一年になつてやつと、卽ち可なり遲れて、全科醫學のドクトルの學位を授與された。

一八八二年に轉換が來た。私の何よりも尊敬する先生が私のよくない物質上の狀態を顧慮して、私が理論で身を立てることを罷るやうに切に忠告することによつて、私の父の寬大なる輕卒を訂正されたからである。私は彼の忠告に從ひ、生理學實驗室を去つて一般病院（das Allgemeine Krankenhaus）へ副手（Aspirant）として入つた。そこで私は暫くの後副醫長（Sekundararzt）（內科）に昇進し、方々の醫局に勤務した。その事實と人格とが旣に學生時代から私の心を奪つてゐたマイネルト（Meynert）の處にも半年以上務めた。

或意味に於てしかし私は最初に取つた研究の方向を忠實に守つた。ブリュッケは私に或下等な魚類（Ammocoetes-Petromyzon）の脊髓を研究題目として課したが、私は今人間の中樞神經系統に移つた。その複雜な纖維組織に對してフレクシヒ（Flechsig）の異時的髓鞘形成の發見がその頃丁度光明を投げてゐた時であつた。つゞいて私が全くの獨力で延髓を題目として選んだのも、私の初まりの績

きであつた。最初の大學時代の私の研究の漠然たる性質と全く反對に、私は今や一つの材料或は一つの問題に私の研究を専ら集中する傾向を現した。この傾向は何時までも私に殘り、後にはその爲偏狹の非難を招いた。

私は以前生理學敎室に於けると同樣に今は解剖學敎室に於ける熱心な研究者であつた。延髓に於ける纎維の經過及び核の起原に關する小さな業績はこの病院時代の産物で、それでもエディンガー(Edinger)に認められた。或日マイネルトが、彼は私が彼の所に務めなくなつてからもその實驗室の使用を許してくれてゐたのだが、私に次のやうな提言をした。即ち私は最後の決定として腦解剖學に向ふべきである。さうすれば彼はその講座を私に讓ることを約束する。彼は新しい方法を採用するには餘りに年を取りすぎてゐると思ふから、といふのであつた。私は任務の大きいのに驚いて拒つた。なほ私はその頃旣にこの天才的な人が決して私に好意を持つてゐないことを感付いてゐたのかも知れなかつた。

腦解剖學は實際的見地からすれば確かに生理學に對して進歩ではなかつた。私は神經病の研究を始めて物質上の要求に應じたこの專門學科はその頃ウィーンではあまり研究されてゐなかつた。材料は方々の內科へ散亂してゐた。勉强するよい機會がなかつた。自分で自分の敎師になるより外なかつた。

腦の局所分布に關する書物に基いて少し前に招聘されたノートナーゲル（Nothnagel）も亦、神經病理學を他の內科學の分科と區別しなかつた。遠くではシャルコー（Charcot）の偉大なる名前が輝いてゐた。そこで私はここで神經病に對する講師の地位（Dozentur）を得、それから更に勉强する爲にパリへ行く計畫を立てた。

副醫長として務めてゐたその後の數年間に、私は神經系統の器質的疾患に關する多くの決疑的觀察を發表した。私は段々にこの方面に精通して來た。私は病理解剖學者が何も附け加へることがない程正確に延髓に於ける病竈を局限することが出來た。急性多發性神經炎の診斷を付けて病例を解剖に送つたのはウイーンでは私が最初であつた。剖見によつて確められた私の診斷の評判はアメリカの醫者達を私の處へ押しよせて來させた。彼等に對して私は一種のピヂン・イングリッシュで私の醫局の患者について講習をした。神經症については私は何も理解しなかつた。或時私が固定頭痛を有する神經症患者を慢性限局性腦膜炎の病例として聽講者達に說明したので、彼等は正當な批評的叛逆に於て總て私から離れ去り、そして私の早過ぎた敎授は終りを告げた。辯解の爲に言はせて貰ふが、その頃はウイーンのもつと偉い大家達でも神經衰弱を腦腫瘍と診斷するのが常であつた時代である。

一八八五年の春、私は組織學的及び臨床的業績に基いて神經病理學の講師の地位を得た。續いて間

もなく、ブリュッケの親切な取り成しによつて可なりの旅行給費金を與へられた。その年の秋私はパリへ旅立つた。

私は生徒としてサルペートリエールへ入つた。が初めの内は外國から來てゐる多くのわいわい連の一人としてあまり顧られなかつた。或日私にシャルコーが、彼の講義のドイツの飜譯者が戰爭以來何の便りもしないのを殘念がつて話すのを聞いた。誰か彼の『新しい講義』のドイツ譯を引き受けてくれると有難いんだが、と言つた。私は手紙でそれを引き受け度いと申込んだ。私は手紙に、自分は單にフランス語の運動失語症（Aphasie motrice du français）に侵されてゐるだけで、知覺失語症（Aphasie sensorielle）には侵されてゐませんといふやうな言ひ廻しをしたことをたほ憶えてゐる。シャルコーは私を採用して、その私的な交際に引き入れた。この時から私は病院に起つた總てのことに完全に關與することが出來た。

私がこれを書いてゐる間に、精神分析に對する烈しい反抗を示し、フランス學派に對する私の關係について屢々非常に見當違ひた主張を竝べてゐる數多くの論文や新聞記事を私はフランスから受け取つてゐる。例へば私は私のパリ滯在をジャネー（P. Janet）の學説に親しむ爲に利用し、然る後獲物を持つて逃走したといふやうなことが書いてある。それ故私は、私のサルペートリエール滯在中ジャ

ネーの名前は全く人の口に上らなかつたことを明言して置き度い。

私がシャルコーの所で見たものの内では、何よりも先づ彼の、一部分は私の眼の前で完成された、ヒステリーに關する最後の研究が私に最大の印象を與へた。卽ちヒステリーの現象の眞實性及び法則性（"Introite et hic dii sunt" 入れ、然らば其處に神々あり）、竝に男にもヒステリーが屢々ある事の證明、催眠術的暗示によるヒステリー性麻痺及び拘攣の作製、この人工的產物が微細な點に至るまで特發的な、屢々外傷によつて惹起される發作と同一の特性を示すといふ結果であつた。シャルコーの供覽の多くは私にも又他の留學生達にも最初は奇怪の念と反駁の慾望とを起させた。我々は一般に勢力のある理論を引合ひに出して我々の駁論を支へようと努めたのであつた。彼はさういふ疑念をいつも親切に寬容に、しかし又甚だ明快に解決した。さういふ議論の時一度、私に忘れられない印象を殘した Ça n'empêche pas d'exister（それは存在するを妨げぬ）といふ言葉を聞いた。

人も知るやうに今日は最早あの頃シャルコーが我々に敎へたことが全部維持されてはゐない。或ものは不確かとなり、他のものは明かに時の試驗に及第しなかつた。だがその內から十分に、科學の永積的な財產として價値を認められるものが殘つてゐる。パリを去る前に、私は先生と、ヒステリー的及び器質的麻痺の比較についての仕事の計畫を相談した。私はヒステリーに於ては個々の身體部分の

運動麻痺や感覺脱失が人間の一般的な（解剖學的でない）觀念と一致するやうな風に區劃されるといふ命題を貫徹し度いと思つた。それは同意された。しかし彼が神經症の心理にもつと深入りすることに對しては何等特殊の興味を持つてゐなかつたことは容易に察せられた。彼は實に病理解剖學畠の人であつた。

私はウイーンへ歸る前に、小兒期の一般的疾病に關して二三の知識を得る爲に二三週間ベルリンに滯在した。或公立小兒科病院の院長をしてゐるウイーンのカソヴイツツ（Kassowitz）が、私の爲に其處に小兒神經科を設けてくれる約束になつてゐたのである。ベルリンではバギンスキー（Ad. Baginsky）の所で歡待と奬勵とを受けた。カソヴイツツの病院から私はその後數年間に、小兒の一側及び兩側腦麻痺に關する多くの稍大なる業績を發表した。その爲に又その後一八九七年にはノートナーゲルが、その大著『治療學概論及び各論』の該當材料の增訂を私に委託した。

一八八六年の秋私は醫者としてウイーンに落付き、四年以上も前からある遠くの町で私を待つてゐた少女と結婚した。私はここで後戻りをして、私が既にあの若い頃有名にならなかつたのは私の許嫁の罪であつたことを物語つてもいいだらう。或攻擊的な、しかし深甚な興味が、一八八四年に、私をして、その頃私のよく知らなかつたアルカロイドのコカインをメルクから取り寄せさせ、その生理學

的作用を研究させた。この研究の最中に、二年間別れてゐた私の許嫁に再び會ふ爲の旅行の希望が現れた。私は急いでコカインに關する調査を結了し、私の刊行物にやがてこの藥物のこれ以上の用途が現れるだらうといふ豫言を載せた。私の友人の眼科醫のケーニヒシュタイン（L. Königstein）にはしかし、どの程度までコカインの麻醉的性質が病眼に應用できるかを試驗するやうに仄めかして置いた。私が休暇を終へて歸つて見ると、彼ではなくて、私がやはりコカインの話をして聞かせた別の友人のカール・コラー（Carl Koller）（今ニユー・ヨークにゐる）が動物の眼で決定的な試驗を行ひ、それをハイデルベルグの眼科醫學會で供覽して了つてゐた。それ故當然コラーが小外科手術には非常に重要なものとなつたコカインによる局所麻醉の發見者として通つて居る。だが私は私の其時の手抜かりの爲に許嫁を慍みはしなかつた。

さて私は一八八六年神經醫としてウイーンに落付いた所へ話を戻さう。私はシャルコーの所で見、且學んだ事について『醫師協會』（"Gesellschaft der Ärzte"）で報告をする義務があつた。だが私は冷遇された。座長の内科醫バンベルガー（Bamberger）の如き權威ある人達が、私の物語つたことを信ずるに足らぬと斷言した。マイネルトは私が敍述したやうな病例をウイーンで探して協會へ示せと促した。私もさうしようとした。しかし私がさういふ病例を發見した科の醫長（Primararzt）達は、

それを觀察したり研究したりすることを私に拒絕した。彼等の內の一人、或年取つた外科醫は、いきなりかう叫んだものである。『だがねえ君、どうしてそんな馬鹿げたことが言へるんだい！ ヒステロン（彼の言葉のまゝ！）といつたら子宮のことだぜ。男が一體どうしてヒステリーになれるんだい？』私はただ病例の處理を必要とするのであつて、私の診斷の是認は必要としないと抗辯しても駄目であつた。たうとう私は病院外で男の模範的なヒステリー性半身感覺脫失の例を見付け出して、『醫師協會』で供覽した。今度は皆が私に喝采を送つたが、しかしそれつきり私に對しては興味を持たなかつた。偉い大家達が私の新報告を拒んだといふ印象はどうしても拔けなかつた。私は男のヒステリー及びヒステリー性麻痺の暗示的作製と共に反對の中へ押しやられてゐた。その後間もなく私は腦解剖學實驗室からは締め出され、一學期中講義をする場所がなかつたので、大學生活及び團體生活から退いた。私は三十年來二度と『醫師協會』の門をくゞつたことがない。

神經治療によつて生活しようと思へば、言ふまでもなく彼等に對して何事かをなし得ることが必要である。私の治療學的兵器庫にはたつた二つの武器があつた。電氣療法と催眠術と。何故なら一度の診察の後水治療院へ送ることは十分な生計の源ではなかつたから。電氣療法は、神經疾患のあらゆる症狀の治療法に對する詳細な指圖を與へてくれたエルブ（W. Erb）の書物に賴つた。が、遺憾ながら

この指圖に從ふことは何の役にも立たないこと、私が正確な觀察の凝結だと思つてゐたものは空想的な構成であつたことを間もなく經驗しなければならなかつた。ドイツの神經病理學の第一流の人の著書が、例へば我々の通俗書籍商に於て買ふことの出來るやうな「エヂプトの」夢占ひ書と同じ位しか實在に關係を持つてゐないことの洞察は悲しかつた。だがそれは、私がまだ其處から拔け切らなかつた素朴な大家信賴の一部を再び淸算するに役立つた。かうして私は、まだメービウス(Möbius)が、神經病者の電氣治療の效果は――もし有りとすれば――醫師の暗示の作用であるといふ救濟的な言葉を發しない前に、電氣裝置を取り拂つて了つた。

催眠術の方はこれよりはよかつた。まだ學生の時分私は「催眠術使ひ」("Magnetiseur")のハンゼン(Hansen)の公開演技に出席して、被術者の一人がカタレプシー的硬直に陷ると死んだやうに蒼白になり、その狀態の繼續中そのままでゐるのを見たことがあつた。これによつて催眠現象の眞實性に對する私の確信は固められた。その後間もなくこの見解はハイデンハイン(Heidenhain)に於て、その科學的代表者を見出したが、しかしまだ精神病學の教授達はその後永い間催眠術を何か詐欺的な、其上危險なものとして說明し、催眠術者を輕蔑的な目で見ることを罷めなかつた。パリで私は人々が躊躇する所なく催眠術を、患者に於て症狀を作り出したり、又取り上げたりする方法として用ひてゐ

ゐのを見た。ついでナンシーに、催眠術による、或はよらざる暗示を大がかりに治療的目的に應用して獨得の効果を上げてゐる學派が發生してゐるといふ知らせが我々の耳に入つた。私の醫療的活動の最初の數年間に於て、寧ろ偶然的な、非系統的な精神療法的方法を別にすれば、催眠術的暗示が私の主なる職業の手段となつたのは、それ故全く當然の成行であつた。

その爲器質的神經病の治療はそつちのけになつたが、しかしそれは大して何でもなかつた。といふのは、一方さういふ病態の治療は餘り見込のあるものでは決してなかつたし、又他方それに罹つてゐる人々は多くの神經質患者——この方はおまけに醫者から醫者へと救はれず廻り歩くので幾倍にもなる譯だが——に比して僅かな數しか町醫者の顧客の內から逃げなかつたからである。その他の點では催眠術を行ふ職業は實際誘惑的であつた。自分の無力の感じは始めて打ち勝たれてゐた。奇蹟を行ふ人といふ評判は全く惡くなかつた。それがこの方法の缺點であつたことは後になつて發見した。先づ差當りはただ二つの點が物足りなく思はれただけであつた。卽ち第一には總ての患者を催眠術にかけるといふ譯に行かなかつたこと、第二には個々の患者を望み通りの深い催眠狀態に移すことが意のままに出來なかつたことであつた。私の催眠術の技術を完成する目的で、一八八九年の夏私はナンシーへ旅行し、數週間を其處で過した。私は老いたるリエボー（Liébault）が勞働者階級の憐れな婦人や

子供に施術してゐるのを見て心を動かし、ベルネーム（Bernheim）がその病院患者について行ふ實驗を目擊して驚嘆した。そして人間の意識には隱されてゐる力强い心的過程の可能性について强い印象を受けた。敎へを受ける心算で私は私の女患者の一人に後からナンシーへ來るやうに勸めた。それは或高貴な、天才的才能を持つたヒステリー患者であつたが、どうしていいか分らない所から私に委されてゐたのであつた。私は催眠術の施行によつて彼女に人間らしい存在を可能ならしめ、彼女を幾度もその悲慘な狀態から救ひ出すことが出來たのであつた。だが何時も暫くすると再發することを、私はその頃の無智から、彼女の催眠狀態が一度も健忘症を伴ふ夢中遊行の程度に達しないせいにしてゐた。さてベルネームが彼女に對して幾度も繰返し試みたが、やはりそれ以上には成功しなかつた。彼は暗示による大なる治療的効果をただ彼の病院患者に於てのみ達し得るのであつて、個人患者に於ても同樣といふわけには行かないと腹藏なく告白した。私は彼と種々興味ある談話をし、暗示と彼の治療効果とに關する二つの彼の著書をドイツ語に飜譯することを引き受けた。

一八八六年から一八九一年の期間はあまり科學的研究をせず、殆ど何も發表しなかつた。私は新しい職業に慣れ、又私並に私の速かに殖えて行く家族の物質上の生活の安定を計るのに忙しかつたのである。一八九一年に私の友人で助手のドクトル・オスカー・リー（Dr. Oskar Rie）と共著の、小兒の

腦麻痺に關する業績の最初のものが出版された。同じ年に或醫學中辭典への寄稿の委託が、その頃ヴエルニツケ及びリヒトハイム（Wernicke-Lichtheim）の純局所的見地が勢力を占めてゐた失語症の學說を論述する機緣を與へた。「失語症の解釋」（Zur Auffassung der Aphasie）といふ小さい批判的思辨的な書物がこの努力の果實であつた。さて私は如何にして再び科學的研究が私の生涯の主要な興味となつたかを追求しなければならない。

二

前の叙述を補つて、私は初めから催眠術的暗示の外に催眠術の他の應用を試みてゐたことを述べなければならない。私はそれを、覺醒狀態では患者が全く或は不完全にしか報告することの出來ない症狀の發生史に關する診問に用ひた。この方法は單に暗示的な命令や禁止よりも有効に思はれたのみならず、單調な暗示的術式によつて除くことに努力してゐる現象の由來に就て何事かを知る權利を有してゐる所の醫師の好奇心をも滿足させた。

所でこの別な方法には次の樣な風にして達したのである。まだブリュッケの實驗室にゐた頃、私はドクトル・ヨーゼフ・ブロイエル(Dr. Josef Breuer)と知り合ひになつた。この人はウイーンで最も評判のいい家庭醫の一人であつたが、しかし又科學的な過去も有してゐた。といふのは呼吸生理や平衡器官に關する永久的價値を持つた多くの業績が彼に由來してゐたからである。彼は卓越した頭腦の所有者で、私より十四歳年上であつた。我々の間柄は間もなく親密の度を增し、彼は私の親友、人生の苦境に於ける救助者となつた。我々はあらゆる科學上の興味をお互ひに分ち合ふ習慣になつてゐた。

勿論この關係に於て利益を受けるのは私の方であつた。然して精神分析の發達は彼の友情を犧牲にしたのである。この代價を拂ふことは私に取つてやさしいことではなかつた。しかし、已むを得なかつた。

ブロイエルは既に私がパリへ行く前に、彼が一八八〇年から一八八二年の間に特別の方法で治療した、そしてその際ヒステリー的症狀の原因と意義とに對して深い洞察をなし得た所の或るヒステリーの病例に就ての報告を私にした。だからそれはジャネーの業績が未だ將來に屬してゐた時分のことである。彼は繰返し病症日誌の一部を私に讀んで聞かせてくれた。それを聞いて私は、神經症の理解に對して未だ嘗てない程の多くのことが成し遂げられてゐるといふ印象を受けた。私はパリへ行つたらシャルコーにこの發見を報告しようと私かに決心した。そして又實際その通りした。だが先生は私の最初の指示に對して何等の興味も示さなかつたので、私は再びその話には立ち返へらず、自然又忘れて了つた。

ウイーンへ歸ると再び私はブロイエルの觀察に心を向け、それに就て更に詳しく話して貰つた。患者は珍しい教養と才能とを持つた若い娘で、彼女の深く愛してゐる父親の看病をしてゐる間に病氣に罹つたのであつた。ブロイエルが彼女を引き受けた時には、彼女は拘攣を伴ふ麻痺、抑鬱症狀及び精

神錯亂狀態の種多な姿を呈してゐた。偶然の觀察が醫師をして、彼女が丁度支配されてゐる情緒的容想を言葉で言ひ現すやうに仕向けてやると、彼女はかかる意識溷濁狀態から救はれるといふことを認めさせた。ブロイエルはこの經驗から治療の方法を發見した。彼は彼女を深い催眠狀態に移し、その度に何が彼女の情緒を苦しめてゐるかを物語らせた。かうして抑壓性錯亂の發作に打ち勝つた後彼は同一の方法を抑壓症狀や身體的障害の除去に用ひた。覺醒狀態では娘は他の患者達と同樣にその症狀がどうして發生したかを言ふことが殆ど出來なかつた。そして症狀と彼女の生活の何等かの印象との間に何の繋がりも見出さなかつた。催眠狀態に於ては、彼女は直ちに求められた關係を發見した。それによると彼女のあらゆる症狀は病氣の父親を看護してゐる際の印象深い出來事に源を發してゐること、即ち意味があること、この情緒的な狀態の殘物或は名殘りに相當することが分つた。彼女は父親の病床の傍で或る考へ或は衝動を抑へ付けなければならないのが常であつた。その代りに、その代理として、後に症狀が現れたのである。しかし通例症狀はただ一つの『外傷的』場面の沈滓ではなく、數多くの同樣な狀態の合計の結果であつた。さて患者が催眠狀態に於てさういふ狀態を幻覺的に再び回想し、その時抑へ付けられてゐた心的行爲を、遅れ馳せながら自由な情緒發展の下に終りまで行ふと、症狀は拭ひ去られて再び現れて來なかつた。この方法によつてブロイエルは永い骨の折れる仕事

をしてその患者をあらゆる症狀から救つたのである。

患者は恢復してそれ以來健康になり、のみならず立派な仕事が出來るやうになつた。だが催眠療法の結果に關しては一つの不可解がのしかかつて居り、ブロイエルは決してそれを明かにしてくれなかつた。又何故彼が彼の、無限の價値ありと思はれる知識を以つて學界を豐富にする代りに、そんなに永くそれを祕密にして置くのか私にはわからなかつた。だが次に起る問題は、彼が唯一つの病例に於て發見した事が一般化する事が出來るだらうかといふ疑問であつた。彼によつて暴露された事情は非常に根本的な性質のものの樣に私には思はれ、それ故それが一たびただ一つの例に於て證明されたならばヒステリーの如何なる例に於てもそれが無いとは私には信じられなかつた。とはいへ、それを決するものはただ經驗あるのみであつた。そこで私はブロイエルの試驗を私の患者について繰返し始め、殊に一八八九年ベルネームの所への訪問が私の催眠術的暗示の技倆に境界を劃して後は、最早それ以外のことは何もしなかつた。數年間を通じて絕えず私は、さういふ療法の出來るヒステリーの總ての例に於て、又旣に彼の觀察に類似の觀察の立派な材料が手に入つてゐるのだといふ確證のみを見出したので、彼に共同發表を申し出た。が、それを彼は初めは烈しく拒んだ。しかし殊にその間にジャネーの業績が彼の收穫の一部を、卽ちヒステリー的症狀の生活印象への還元及び催眠術的再現によ

るそれの除去を、そのまま先取りしたので、彼もたうとう我を折つた。我々は一八九三年『ヒステリー現象の心的機構について』といふ豫備的報告を出した。續いて一八九五年我々の著書『ヒステリー研究』が世に出た。

今までの敍述が讀者に、『ヒステリー研究』はその材料的內容の重要なものに於て全部ブロイエルの精神的所有物だらうといふ期待を起させたとすれば、それは正に私が常に主張してゐることであり、此度も確言しようと思つた事である。此書が試みた所の理論においては、今日では最早決定できない程度に於て協力した。これは控目なもので、觀察の直接表現をあまり越えてゐない。ヒステリーの本性を闡明しようとしたのではなく、唯其症狀の發生を明かにしようとした迄である。そして情緖生活の意義、無意識的及び意識的（より正しく言へば、意識可能的）心的行爲の區別の重要さを力說し、症狀を情緖の鬱結によつて生ずるとして力學的要因を導き入れ、又同一の症狀を普通なら他に使用し得べきエネルギー量の變化の結果と見做して（所謂轉換 Konversion）經濟的要因を導き入れてゐる。ブロイエルは我々の方法を淨下的（Kathartisch）と名付けた。その治療的企圖としては、間違つた道に陷つて言はば其處へ引つ掛かつてゐる所の、症狀の維持に費やされてゐる情緖總額を、淨下に達し得る正常の道へ導くこと（反應し下す abreagieren）が擧げられた。淨下法の實際的効果は卓越して

ゐた。後に現れた缺點は、總ての催眠療法のそれであつた。今日はなほブロイエルの意味に於ける淨下法に止まり、それを賞讃してゐる一群の精神療法家がある。世界大戰中ドイツ軍の戰爭神經症患者の治療に於て、この方法を省略的治療法としてジンメル（E. Simmel）の手によつて再び證明された。性慾は淨下法の理論に於てはあまり問題にならない。私が『研究』へ載せた病症日誌に於ては性慾の因子が或役割を務めてはゐるが、それは他の情緒的興奮と殆ど同樣にしか評價されてゐない。彼の有名になつた最初の女患者についてブロイエルは、性的なことは彼女に於ては驚く程發達してゐなかつたと語つてゐる。『ヒステリー研究』からは、性慾が神經症の病源にどれだけの意義を持つてゐるかといふことをたやすく推測することは出來ないであらう。

さてこれに續く發達の部分、淨下法から本來の精神分析への移行は、既に屢々詳しく叙述したので此處に何か新しいことを發表するのはむづかしいことである。この時代の初めに起つた出來事はブロイエルの我の共働からの脱退であつて、爲に私は彼の遺產を獨りで引き受けねばならないことになつた。既に早くから意見の相違はあつたが、しかし分裂の理由にはならなかつた。何時心的經過が病源的となるか、即ち正常の解決から除外されるかといふ問題に於て、ブロイエルはいはば生理學的理論に傾いた。彼は、異常な——催眠類似の——心的狀態に於て生じたかかる過程は正常な運命には從は

ないと考へた。そこでかかる催眠類似狀態の由來に對する新たなる疑問が提出された。私はこれに反して專ろある力の働き、正常生活において見られる如き意思や傾向の作用を想像した。かくして『防禦神經症』對『催眠類似ヒステリー』の對立となつた。だがその他の因子が加はらなかつたならば、恐らくこのことやこれに類する反對が彼をしてこの仕事に背を向けさせはしなかつたであらう。その因子の一つといふのは、確かに彼が內科醫及び家庭醫として非常に忙しく私のやうに淨下法の仕事に全力を捧げることが出來なかつたことであつた。更に又我々の書物がウイーン竝に外の國で出合つた不評に彼は影響された。彼の自信及び彼の抵抗力は彼のいつもの精神的統率の高さに至らなかつた。例へば『研究』がシュトリュンペル（Strümpell）から强硬な反對を受けた時、私はその無理解な批評を一笑に付することが出來たが、彼は憤り、氣を落した。だが最も彼の決心を促進したのは、私自身のその後の研究が、彼が事を共にしようと努めたけれども出來なかつたやうな方向を取つたといふことであつた。

『研究』に於て我々が構成しようと試みた理論は、實際まだ非常に不完全なものであつた。殊に病源學の問題、卽ち如何なる地盤の上に病源的過程が發生するかといふ問題には我々は殆ど觸れてゐなかつた。所が急速に增して行く經驗によつて私は、任意の情緒興奮が神經症の現象の背後に働いてゐ

るのではなくして常に性的性質の情緒興奮が、卽ち目前の性的葛藤か或は以前の性的經驗の餘波かが働いてゐるのである事を知つた。私はこの結果に對して準備してはゐなかつた。私の期待が幾分でも其處に關與したといふやうなことは全くない。私は全然何等の他意なく神經症患者の診察に取り掛つたのである。一九一四年に私が『精神分析運動の歷史』を書いた時、其處からかかる認識をもつと早く得ることが出來たであらう所の、ブロイエルやシャルコーやクロバック (Chrobak) の二三の言葉についての回想が私の頭に浮んだ。しかし當時はこれらの大家達の言つたことを私は理解しなかつたのである。彼等は彼等自身が知り、そして主張する心算であつたより以上のことを私に言つてゐた。私が彼等から聞いたことは、淨化法的診査の機會に外見上獨創的な認識となつて突然現れるまで私の中に働かずに眠つてゐた譯である。又私は、ヒステリーの性慾への還元によつて醫學の最古の時代に遡り、プラトーに還つたのであるといふこともその頃はまだ知らなかつた。後はハヴエロツク・エリス (Havelock Ellis) の文章で初めてそれを知つた。

私の意外な發見の影響の下に、私は今や重大な結果を生ずる一歩を踏み出した。私はヒステリーを乘り越えて、私の診察時間にいつも大勢やつて來る所謂神經衰弱患者の性生活を研究し始めた。この實驗は私の醫者としての人望は犧牲にしたが、しかし殆ど三十年後の今日なほ弱くならない確信を私

に與へた。多くの僞りや隱し立てに打ち勝たねばならなかつたが、それに成功すると、これら總ての患者に於て、性的機能の重大な濫用が存在することを發見した。一方にかゝる濫用が甚だ屢〻あり、他方に神經衰弱があるといふだけでは勿論兩者が、屢〻一致することの證明にはあまりならない。だがこの一つの粗笨な事實だけではなかつた。もつと鋭敏な觀察によつて、神經衰弱の名前で通つてる錯雜混亂した病氣の姿の中から、任意の混合で現れることはあるが、しかし純粹な特色に於て觀察しなければならない二つの、根本的に異つた類型を拔き出すことを覺つた。その一つの類型に於ては不安發作がその等價物、痕跡的形態及び慢性の代償症狀と共に中心的現象であつた。それ故に私はそれを又不安神經症(Angstneurose)と名付けた。他の類型に私は神經衰弱(Neurasthenei)の名前を限つた。さて病源的因子として性生活のそれぞれ別な異常がこれらの類型の各〻に相應するのを確定することは容易であつた(後者に於ては中斷性交、挫折興奮、性的禁慾、前者に於ては過度の手淫、頻繁な遺精)。一つの類型から他の類型への不意な病形の變換が起つた特に教訓的な二三の例に對してもまた、性的攝制生活の相當する變化が基礎をなしてゐることを證明することを得た。濫用を除去して正常な性的活動によつて置きかへることが出來ると、それは狀態の著しい輕快によつて效果をあらはした。

かくして私は神經症を全く一般的に性的機能の障害と認める樣に、然して所謂眞正神經症(Aktualneurose)はこの障碍の直接的中毒的現れとして、精神神經症(Psychoneurose)は精神的現れとして認めるやうになつて來た。私の醫師的良心はこの意見によつて滿足を感じた。私は生物學的に甚だ重要な機能に對して傳染或は粗大な解剖學的傷害による以外の損傷を考慮しようとしない醫學の缺陷を滿したと思つた。更に性慾が決して單に精神的なものではなかつたことが、醫師としての理解に役立つた。それは又肉體的方面も持つてゐた。それに或特別の化學的現象を歸し、性的興奮を未だ知られてはゐないが、或一定の物質の存在に由來させることが出來た。また眞の特發性神經症は或中毒作用を有する物質の移入及び缺乏によつて惹き起される中毒現象及び禁斷現象、又は甲狀腺の產物との依存性が知られてゐるバセドー氏病に對する程、他の如何なる病症群に對しても近似性を示さないのには十分の理由がなければならなかつた。

その後私は最早眞正神經症の研究に立ち歸る機會を持たなかつた。又他の人によつても私の業績のこの部分は繼續されなかつた。今日あの頃の私の成績を振り返つて見ると、私はそれを恐らく遙かにもつと複雜な事柄の最初の粗雜な概括として認めることが出來る。しかし大體に於ては今日なほ正しいと思はれる。私はその後もなほ純粹の少年神經衰弱の病例を精神分析的試驗に掛けることを望んだ

のである。だが殘念ながらその機會がなかつた。誤解を防ぐために特に强調して置き度いと思ふが、私は神經衰弱に於て心的葛藤及び神經症的錯綜の存在を否定するものでは決してない。ただこの患者の症狀は、心的に決定され分析的に解消され得るものではなくして、障碍を受けた性化學作用の直接的中毒的結果として理解されなければならぬといふことを主張するだけである。

「研究」の後の數年間にこの神經症に於ける性慾の病源的役割に關する見解を得たので、私は方々の醫師の會合で、それに就て二三の講演を行つた。が、ただ不信と反對に出會つたのみであつた。ブロイエルはなほ數回私の爲に彼の大なる勢望を利用しようと努めてくれたが、効がなかつた。そして又性的病源學の承認は彼の好む所でもなかつたことは容易に見られた。彼は性的因子が表面上全く何等の役割をも演じてゐない彼自身の最初の女患者を指摘することによつて私をやり込め、或は惑はせることが出來たであらう。だが彼は決してそれをしなかつた。後に私がこの病例を正當に解釋し、彼の以前の二三の言葉に從つて彼の療法の成行を再建設することが出來るやうになるまでは、永い間私は彼の態度が理解できなかつた。淨下法の仕事が片付いたと思はれた後で、突然その少女に『轉附の愛』("Übertragungsliebe")の狀態が起り、彼はそれを最早彼女の病氣と關係のあるものとは考へなかつたので、驚いて彼女から身を引いたのである。この一見災難と思はれることを回想するのは彼に

は明かに苦痛であつたのである。私に對する態度に於て、彼は暫く承認と辛辣な批評との間を動搖した。續いて緊張狀態には必ず起る種々の故障が起り、我々はお互ひに別れた。

今や一般的神經質の形態に關する私の仕事は更に、私が淨下法のテクニツクを變更するといふ結果を見るに至つた。私は催眠術を捨てて、それに代はるべき他の方法を求めた。何故なら私は治療をヒステリー型の狀態に限ることに打ち勝ち度いと思つたからである。なほ經驗の增すに從つて淨下法の仕事に於ける催眠術それ自身の應用に對しても二つの重大な疑念が湧いて來た。その第一は、折角のいい成績も、患者に對する個人的の關係が曇つて來ると突然に、實はば、拭ひ去られる事であつた。和解の道が見出されればそれは再び取り戾せることは取り戾せるが、しかし個人的な情緒的關係の方があらゆる淨下法的操作よりも力强いといふことを敎へられた。そして正にこの因子が統御できなかつたのである。それから又或日私は、私がずつと前から推測してゐたことを白日の下に示した所の經驗をした。或時私は、催眠狀態に於て誠に珍しい曲藝をなさしめ得る私の大變大人しい女患者の一人を、その疼痛發作をそれの誘因に還元することによつて、彼女の疾患から救ひ出してやつた所が、彼女は覺醒に際して私の頸玉に抱き付いた。不意に小使がはひつて來たので我々は際どい所を免れたが、しかしこの時から我々は暗默の合意の内に催眠療法の繼續を斷念した。私はこの事件を私の個人的不

可抗性のせいにしないだけの冷靜さは十分持つてゐた。そして今や催眠術の背後に働いてゐる神祕な要素の本性を掴んだと思つた。それを取り除く爲に、或は少くとも隔離する爲に、私は催眠術を斷念しなければならなかつた。

とはいへ催眠術は、患者の意識領域を擴め、覺醒狀態に於ては意のままにならぬ知識を意のままにさせることによつて、淨下法的療法に對しては少からぬ貢獻をなした。この點に於てこれに代はるべきものは仲々容易に求められさうもなかつた。この困却の際に、私が曾て屢〻ベルネームの所で參觀した實驗の回想が助けになつた。試驗人物が夢遊狀態から覺醒した時、彼はこの狀態の間に起つた出來事のあらゆる記憶を失つてゐるやうに見えた。だがベルネームは、いや知つてゐると主張した。そして思ひ出すやうに促し、みんな知つてゐる筈だ、さあ言つて御覽、と誓言し、そしてその際まだ額に手を載せてゐると、忘れられてゐた記憶が本當に再び返つて來た。初めは極くためらひ勝ちに、然して後には滔々と頗る明瞭に。私はこれと同じにやらうと決心した。私の患者は、普通ならば催眠狀態にはひつて始めて達せられる總てのことを、やはり知つてゐなければならなかつた。そして私の確言と鼓舞とは、場合によつては手を載せることとの援助によつて、忘れられた事實や聯絡を意識の中へ驅り立てる力を有してゐる筈であつた。これは勿論催眠狀態に移すことよりは骨の折れる仕事と思は

れた。が恐らく非常に敎訓的であるに相違なかつた。それ故私は催眠術を止して、ただ患者を寢臺の上に横臥させ、私はその後に坐り、私が患者を見ることは出來るが患者からは見られないやうた位置を取ることだけを元の通り行つた。

三

私の期待は實現された。私は催眠術から手を切つた。だがテクニツクの變化と共に淨下法的操作もその面貌を改めた。催眠術はある力の働きを掩うてゐた。今やそれが現れた。それの把握が理論に確乎たる據(よりどころ)を與へた。

患者が外的及び內的經驗のそんなに多くの事實を忘れ、而も前述のテクニツクを用ひるとそれを思ひ出すことが出來るといふのは一體何によるのか? この疑問に對して、觀察は十分な解答を與へた。忘れられた事は總て何等か苦痛なことであつた。恐しいとか、悲しいとか、人格の要求に對して恥づべきこととかであつた。だからこそそれは忘れられたんだ、卽ち意識に殘らなかつたんだ、といふ考へが自づと込み上げて來た。所でそれを再び意識的にするためには、患者の內にある或抵抗するものに打ち勝たなければならなかつた。それを驅り立て、强制するためには特殊の努力を拂はねばならなかつた。醫師の必要とする努力の大いさは種々の場合に應じて種々であつた。それは回想者の困難の度に正比例して增大した。醫師の骨の折れ方は明かに患者の抵抗の尺度であつた。今や自ら感知

してゐることを言葉に飜譯しさへすればよかつた。然して排除作用（Verdrängung）の理論が得られた。

病源的過程は今や容易に再建設できた。最も簡單な例でいふと、精神生活内に個々の努力が現れるが、それが他の力強いものに反對されるのである。かくして生ずる心的葛藤は、我々の期待によると二つの力學的勢力——我々の目的の爲にそれを慾望衝動と抵抗と呼ばう——が暫くの間意識の力強い關與の下に互ひに相爭ひ、遂に慾望が退けられ、その努力からエネルギー塡塞が奪はれるといふ風に經過しなければならなかつた。これが正常の解決であらう。所が神經症に於ては——未だ不明の理由から——葛藤が別の經過を取つた。不快な衝動に最初出會つた際言はば自我が退却して、意識及び直接的運動的深下への通路を遮り、そしてその際衝動はその全エネルギー塡塞を保持してゐるのである。この過程を私は排除作用と名付けた。これは一つの新機軸であつた。未だ曾てこれに類似のものが精神生活に於て認められたことはなかつた。これは明かに逃亡企圖に比較さるべき初歩の防禦機構であつて、後の正常な判斷解決の先驅に過ぎないものであつた。排除作用の最初の動作には更にその結果が結合されてゐた。第一に自我は排除された衝動の何時起るか分らない強請を絶え間なき消費、反對塡塞（Gegenbesetzung）によつて防がねばならず、それが爲窮乏に陷つたし、他方に排除されたるも

のは、これは今は無意識なのであるが、廻り道によつて深下及び代償滿足を得、かくして排除作用の意圖を失敗に歸せしめることが出來た。轉換ヒステリーに於ては、この廻り道は身體的神經興發の道を取り、排除された衝動は何處かを破つて現れ、卽ち妥協的結果である所の、代償滿足ではあるが、しかし自我の抵抗によつて歪められ、その的を外れてゐる所の症狀を作り上げた。

排除作用の學說は神經症の理解にとつての基礎となつた。治療的任務は今や前とは異つて理解されねばならなかつた。その目的は最早間違つた道へ陷つた情緖の "Abreagieren" ではなく、排除作用の暴露とその解消——曾て却けられたものの承認或は非認に終り得る判斷作用によるその解消とであつた。私はこの新しい事情を考慮して、この診療及び治療の方法を最早淨下法（Katharsis）とは呼ばず、精神分析（Psychoanalyse）と呼んだ。

人は恰も中心から出發する如くに排除作用から出發して、精神分析の學說のあらゆる部分をそれと關係させることが出來る。だが私はなほ前以て論爭的內容の注意をして置かうと思ふ。ジヤネーの意見によれば、ヒステリー患者は體質的虛弱の爲にその心的動作を統一することの出來ない憐れな人であつた。その爲彼女は心的分裂及び意識の狹窄に陷つた。精神分析的診査の結果によると、しかしこれらの現象は力學的要因、心的葛藤と遂行されたる排除作用との結果であつた。私はこの差異は十分

重大なものであり、常に繰返される處の、精神分析に於て價値のあるものは悉くジャネーの思想の剽竊であるといふ客評に終りを告げしむべきものであると思ふ。私の叙述は讀者諸君に、精神分析がジャネーの發見から歴史的見地に於ても全然無關係であり、且又內容的にもかけ離れて居り、遙かにそれを陵駕してゐることを示したに相違ない。又決してジャネーの業績からは、精神分析を精神科學に對してかくも重要なものとし、それに最も普遍的な興味を向けた所の歸結は出て來なかつたであらう。ジャネー自身を私は常に尊敬して取扱つて來た。何故なら彼の發見は、それより早くなされてそれより遅く發表されたブロイエルの發見と全體に亙つて一致してゐたからである。しかるに精神分析がフランスに於ても議論の對象となつた時、ジャネーは拙い振舞ひをし、認識不足を示し、下らない論證をした。遂に彼は、彼が『無意識』な心的行爲について語つたのは別に何等の意味があつた譯ではなく、單に『言葉の綾』(une manière de parler)であつたと公言したので、私の眼から見れば、彼の正體は暴露され、彼の勞作はその價値を失つたのである。

精神分析はしかし病源的な排除作用及びこれから述べる他の現象の研究によつて、『無意識』の概念を眞面目に受取るべく餘儀なくされた。精神分析にとつては總て心的なるものは最初は無意識であり次いで意識の性質がそれに加はり或は又加はらないこともあつた。此處で勿論哲學者達の反對に出會

つた。彼等にとつては「意識的」と「心的」とは同一であつて、「無意識な心」といふが如きナンセンスは考へることも出來ないと彼等は斷言した。だがそれは何の役にも立たなかつた。こんな哲學者達の特異質は肩をすくめて御免を蒙るより外なかつた。自分には何も分らず、何か外界の事實の如く推論せざるを得ないやうな衝動の頻繁且强力なことに關しての、哲學者達の御存知ない病理學的材料に於ける經驗は、選擇の餘地を殘さなかつた。それから又人は常に他人の心的生活に對して既になしたことのみを自分の心的生活に於てなすものであると主張することが出來た。人は他人の心的行爲の直接意識を有せず、言語や動作によつてこれを推測する外ないにも拘らず、而もなほ他人に心的行爲を歸した。だが他人に於て正しいことは自分自身に對しても正當でなければならない。この論法を推し進めて、そこから、自己の隱れたる行爲は正に第二の意識に依存するといふ考へを誘導するならば、自分の知らない意識、即ち無意識な意識といふ概念を招來し、所でそれは無意識な心の假定よりも優れてゐるとは到底いはれまい。だが又他の哲學者とともに、人は病理的出來事の價値を認めねばならぬ。然してその基礎をなす行爲は心的（psychisch）と呼ばるべきではなく、心的類似（psychoid）と呼ばるべきであるといふならば、差異は無益な言葉爭ひに終り、而も最も合目的的に「無意識心的」といふ表現の繼續に贊成することになる。然らばこの無意識なるものは何であるかといふ問は、

他の、以前の、意識とは何ぞやといふ問よりも聰明で見込の多いものではない。

精神分析は如何にしてその承認したる無意識を更に分類して前意識（Vorbewusstes）と本來の無意識とに分つに至つたかといふことを簡單に敍述するのは更に難かしいことであらう。經驗の直接的表現である所の定理を、題材の克服の目的に役立ち、直接的觀察の對象となり得ない事柄に關係する所の假設を以て補ふのが正當と思はれたのだといふ記述で十分であるかも知れない。古い科學に於ても同樣の方法を用ひるのを常とする。無意識の分類は心的裝置を多くの審級或は體系から構成されてゐると考へる試みに關係してゐる。それら體系相互の關係には空間的表現法を用ひ、但しその際實際の腦解剖學との聯絡は求めないのである。（所謂局所的觀點。）このやうな、及びこれに類する觀念は精神分析の思辨的上層建築に屬し、不十分な點が證明されれば直ちに何等の損失も心殘りもなくその各部分が犧牲に供され或は交換され得るものである。觀察とより密接な關係のあるものが、報告すべく十分に殘るのである。

神經症の誘因及び成立の研究が益〻增大する頻繁性を以て人の性的衝動と性慾に對する抵抗との間の葛藤へと導いたことは既に述べた。性慾の排除作用が起り、排除されたるものの代償形成として症狀が生ずる病源的狀態の探索に於て、段々と患者の以前の生活時代へ遡つて連れて行かれ、遂にその

最初の小兒時代に達した。詩人や人性洞察者が常に主張してゐたこと、この人生早期の印象が、たとひそれは多くの場合健忘に陷らうとも、個人の發達に消すべからざる痕跡を殘すこと、殊にそれは後の神經症的疾患に對する素質を作ることが明かとなつた。所でこの小兒體驗に於て、常に性的興奮及びそれに對する反應が問題となつたので、ここに小兒性性慾の事實の前に立つことになつたが、これは再び新奇な事であり、人間の最も強い偏見の一つに對する抗論を意味した。小兒時代は實に「無邪氣」で性的慾望からは自由でなければならず、「肉慾」の惡魔との戰ひは思春期の疾風怒濤時代と共に始まるべきはずであつた。特に子供に於て認めざるを得なかつた性的活動に關することを、人は變質の、早熟性墮落の徵候として、或は珍しい自然の惡戲として解釋した。精神分析のなした發見の内、性的機能は人生の最初から始まり、小兒時代に於て既に重要な現象となつて現れてゐるといふ主張程一般的拒絕に會ひ、怒の爆發を惹き起したものは少い。而もなほ他の如何なる分析的發見もかく容易に、かく完全には證明できないのである。

これ以上小兒性性慾の批評に立ち入る前に、私が暫く陷つてゐた所の、そしてやがて私の全業績に對して禍となつたであらう所の或錯誤のことを述べて置かねばならない。私のその頃の技術上の方法の壓迫の下に、私の患者の大多數は大人による性的誘惑をその內容とする小兒時代の情景を再現した。

婦人の場合には誘惑者の役割は殆ど常に父親に割り當てられてゐた。私はこの報告に信を置き、從つて私はこの小兒時代に於ける性的誘惑の經驗に於て後の神經症の源泉を發見したと信じた。父親、叔父、或は兄に對するかくの如き關係が確かな記憶のある時代にまで續けられてゐた二三の例が、私の信念を強めた。私の輕信に對して疑ひ深く頭を傾けようとする人があるならば、私はその人が全く間違つてゐると言ふことは出來ない。だが私は、それは毎日のやうに私を迎へた多くの新奇な事實に對して公平であり受容能力を有してゐない爲に、故意に私の批判力を強制した時代であつたことを主張したい。だがその後、これらの誘惑の情景は決して實際あつたのではなく、私の患者達が創作した所の、恐らく又私が彼等に無理に作らせさへもした所の空想に過ぎないといふことを認めざるを得なかつた時、私は暫くの間途方に暮れた。私の技術及び其成績に對する信頼は烈しい衝撃を受けた。だがこれらの情景は私が正しいと考へた技術的方法によつて得たのであり、その內容は私の診査がそこから出發した所の症狀と明白な關係に立つてゐた。私が氣を取り直した時、私は私の經驗から、神經症の症狀は直接實際的體驗から發するのではなく、願望的空想から發するのであり、神經症にとつては精神的實在の方が物質的實在よりも意味があるのだといふ正しい結論を引き出した。私は今日も私が私の患者達にあの誘惑の空想を無理に作らせ、『暗示』したとは思つてゐない。私はこの時初めてエデ

イプス錯綜（Ödipus-Komplex）に出合つたのであつた。それは後に非常に卓越的な意義を有するに至つたが、このやうな空想的な假裝に於ては私は未だ認識することが出來なかつたのである。又實際小兒時代の誘惑へも、ずつと僅かな程度ではあつたが、病源への分け前が殘された。尤も誘惑者は大抵年上の子供であつた。

私の錯誤はそれ故、例へば或人がローマ皇帝時代の傳説をリヴイウスの物語によつて、ありのままに——下らない、恐らく必ずしも立派でない時代や事柄の回想に對する反應形成として考へる代りに歷史的眞實と考へたのと同じであつた。錯誤の解明の後は小兒性生活の研究への道は自由であつた。ここに於て、精神分析を他の知識領域に應用し、その諸事實から生物學的現象の未知の部分を推量するといふやうな事情に立ち至つた。

性的機能は始めから存在した。最初は他の生活に重要な諸機能に依存してゐたが、後にそれらから獨立した。それが大人の正常な性生活として知られてゐる所のものになるまでには、永い、複雜な發達を經なければならなかつた。最初それは、發情的（erogen）身體部位に關係があり、一部分は一組の對立體となつて現れ（サディズム——マゾヒズム、覗視慾——露出症）、お互ひには無關係に快感獲得を目的とし、そしてその對象を多くの場合自己の身體において見出す所の一群の衝動成分（Trieb-

komponenten）の活動として現れた。即ち最初は中心點が定まらず、また主として、自己色情的（autoerotisch）であつた。後に至つて集約がその中に現れた。第一の統率段階は口唇的（oral）成分の支配の下に立ち、次いでサディズム的肛門的（sadistisch-anal）位相が續き、然して最後に達せられる第三の位相が始めて生殖器（Genitalien）の最高位を齎し、それによつて性的機能は生殖の役目にはひつた。この發達の間に多くの衝動部分はこの最後の目的に不要のものとして捨て去られ、或は他の用途に振り向けられた。又他のものはその目標を轉ぜしめられ、生殖器的統率の中に引き入れられた。私は性的衝動のエネルギーを——然してこれのみを——リビドー（Libido）と名付けた。さてリビドーは上述の發達を常に完全に遂げるとは限らないといふことを私は承認しなければならなかつた。個々の成分の强過ぎる結果、或は早期の滿足經驗の結果、發達途上の或場所に於けるリビドーの固着（Fixierung）といふことが起つた。そしてこの場所へ、後の排除作用の場合にリビドーが歸りたがつた（退行作用 Regression）。そして此處から症狀への破裂が生じた。その後の判斷によつてなお、固着場所の部位は神經症選擇に對しても、即ち後に現れる病症の取る形式に對しても決定的であるといふことが追加された。

リビドーの統率と共に、なほ精神生活に於ける大なる役割が保留されてゐる所の對象發見の過程が

進行する。自己色情（Autoerotismus）の時期の後の最初の愛の對象には兩性に取つて母親がなる。その哺乳器管は恐らく初めは自己の身體と區別されなかつたのである。後には、といつてもまだ最初の小兒時代に於てであるが、エディプス錯綜が生じ、男の子はその性的願望を母親の人格に集中し、競爭者としての父親に對する敵視的衝動を現す。少女も同樣である。エディプス錯綜のあらゆる變化及び隨伴が重要になる。先天的兩性的體質が頭を擡げ、同時に存在する努力の數を增す。これは子供が性の區別を明かに理解するに至るまで、可なりの間續く。この性的探求の期間に子供は、自己の身體的結構の不完全に基いて、正しいことと間違つたこととを混同し、性生活の問題（子供は何處から來るかといふスフインクスの謎）を解決することの出來ない所の性理論を作り上げる。子供の最初の對象選擇は卽ち近親相姦的である。此處に述べた全發達は遠かに經過する。人間の性生活の甚だ奇妙な性質は、間に休止期間を有する二期的傾向である。それは四歲乃至五歲に於て第一の頂點に達するが、次いでこの性慾の早期全盛は衰へ、今まで活潑であつた努力は排除作用を受け、思春期に至るまで續く潛伏時代が生ずるのである。この間には道德の羞恥の、嫌惡の反動形成が建設される。性的發達の二期性はあらゆる生物の中ただ人間のみ與へられてゐるやうである。これが恐らく神經症への人間の素質の生物學的條件であらう。思春期と共に早期の努力及び對象塡塞は再び活氣付いて來る。

エディプス錯綜の感情束縛も亦同様である。思春期の性生活に於て早期の興奮と潜伏時代の抑壓とが互ひに爭闘する。幼時の性的發達の頂點に於てもう一種の生殖器統率が建設されてゐた。が、その時はただ男性の生殖器のみが役割を演じ、女性のそれは發見されてゐなかつた（所謂陰莖の最高位Phallischer Primat)。性の對立はその頃は未だ男性か女性かではなくて、陰莖を持つてゐるか去勢されてゐるかであつた。これに關聯してゐる去勢錯綜（Kastrationskomplex）は性格及び神經症の形成に甚だ重要である。

人間の性生活に關する私の發見のこの簡單な敍述に於て私は、了解の便の爲に、別々の時に現れ、補遺或は訂正として私の『性的理論に關する三つの論文』の次に出た數版の中に採錄されたことを、一緒にして述べた。これによつて、屢〻強調され抗議される性慾の概念の廓大の本質が何であるかが推測できることと思ふ。この廓大は二重のものである。第一に性慾はそのあまりに狹い生殖器に對する關係から解放されて、第二次的に始めて生殖の役目にはひる所の、もつと包括的な、快感を追求する身體機能と見做される。第二に、我々の言語の慣用によつて『愛』といふ多義の言葉が使用される總ての單に愛情的及び友情的なものが性的衝動に數へられる。けれどもこの廓大は革新ではなくして復舊であると私は思ふ。それは我々が陷つてゐた概念の不合理な狹窄の揚棄を意味する。性慾の生殖器

からの解放は、小兒及び倒錯者の性的活動を正常な大人のそれと同じ觀點に持ち來す利益を有する。然るに小兒の性的活動は今まで全く等閑に付され、倒錯者のそれは道德的憤慨を以つて、しかし何等の理解なしに遇されてゐたのである。精神分析的見解では、最も奇妙な、最も厭ふべき倒錯症をも、生殖器最高位から外れた、リビドー發達の原始時代に於けるが如く獨立に快感獲得を求むる性的部分衝動の現れとして說明する。この倒錯症の最も重要なもの、同性愛は、殆どその名に値しない。それは體質的兩性性（Bisexualität）及び陰莖最高位の後作用に還元される。精神分析によつて人は各人に幾らかの同性愛的對象選擇を證することが出來る。小兒を『多型倒錯的』("Polymorph pervers")と名付けたのは、一般に用ひられる言葉による記述に過ぎなかつた。それによつて道德的評價が言ひ表さるべきではなかつた。かくの如き價値判斷は一般に精神分析とは緣の遠いものである。

謂ふ所の廓大の第二のものは、それら總ての愛情的感情興奮も元來は完全に性的な努力であつたのが、後に『目的を抑壓』され（"zielgehemmt"）或は『昇華』された（"sublimiert"）のであることを示す精神分析的檢討の指摘によつて是認される。性的衝動のこの被影響性及び被轉向性に、それが著しい貢獻をなしてゐる所の諸種の文化的作用へのそれの應用性が又基礎を置いてゐるのである。

小兒の性慾に關する驚くべき發見は始めは大人の分析によつて得られたが、後には、凡そ一九〇八

年頃からは、小兒に於ける直接の觀察によつて、あらゆる詳細に亙り、任意の擴がりに於て行ふことが出來た。實際小兒の規則的な性的活動を確めることは甚だ容易であつて、どうして人間はこの事實を看過し、無性の小兒時代の理想的傳說をそんなに永い間維持してゐることが出來たのであらうかと怪しまざるを得ない位である。これは大多數の大人の自己の小兒時代に對する健忘と關係がなければならない。

四

抵抗と排除作用に關する、無意識に關する、性生活の病源的意義と小兒時代の體驗の重要性とに關する學說が、精神分析學の建築の主要部分である。私は此處にほんの一部分しか記述することが出來ず、又如何にそれらが構成されるか、如何にお互ひに相關聯してゐるかといふ事も記述できなかつたのを遺憾とする。今や分析的方法の技術に於て徐々に完成された排除作用に向ふべき時となつた。

最初に行つた強制と保證とによる抵抗の克服は、醫師に、彼が期待せねばならぬものに於ける要領を授ける爲に、缺くべからざるものであつた。だが永い間にはそれはあまりに努力を要し、又或る尤もな不安がないこともないやうに思はれた。それでそれは或る意味に於てもその正反對である所の他の方法によつて代へられた。一定のテーマについて何か言ふやうに患者を驅り立てる代りに、今度は自由『聯想』に耽るやうに、卽ち總ての意識的な目的觀念から離れて、何でも心に浮ぶことを言ふやうに要求した。ただ患者は、彼の自己觀測から生じた事を總てありのままに報告し、個々の思ひ付きを、これはあまり重要でないとか、これはそれに關係がないとか、これは全く無意味であるとかいふ

理由で除外しようとする批判的抗議には從はない義務を負はねばならなかつた。報告の正直であることに對する要求は繰返し明言するには及ばなかつた。それは實に分析療法の前提であつた。

この精神分析的根本原則の嚴守の下に於けるこの自由聯想の方法が、人がそれから期待したこと、即ち排除され、抵抗によつて遠ざけられてゐる材料を意識へ導いて來ることを果すといふことは不思議に思はれるかも知れない。だが自由聯想は實は自由でない事を考へなければならない。患者はその思惟活動を一定のテーマに向けなくとも、分析的狀態の影響を免れない。彼にはこの狀態に關係のある事より外は思ひ付かないと考へる權利を人は持つてゐる。所で排除されたるものの再現に對する彼の抵抗は二樣の方法で現れるだらう。第一には精神分析的根本原則が狙ひを付けてゐるかの批判的抗議によつてである。原則の遵守によつてこの妨害に打ち勝つならば、抵抗は又別の表現を見出す。即ち被分析者に決して排除されたるもの自身は思ひ付かず、ただ諷示の方法によつてそれに接近するもののみが思ひ付くといふ風に仕向けるのである。そして抵抗が大であればある程、報告さるべきその代償的思ひ付きは人の求むる本來のものから益〻遠ざかるのである。精神を集中して、しかし努力することなしに傾聽し、經驗によつて一般に現れ來るものに對して用意の出來てゐる分析者は、今や患者が明るみへ出した材料を二つの可能性に從つて利用することが出來る。即ち抵抗が少い場合には暗

示から直接排除されたるもの自身を推量することが出來るし、又抵抗の强い場合には、テーマから遠ざかつてゐるらしく見える思ひ付きに於てこの抵抗の性質を認識することが出來、その抵抗を患者に知らせることが出來る。然して抵抗の暴露はその克服の第一步である。かくして分析の仕事の範圍内に解釋術が現れた。それを有効に使用するには技巧と練習が要るが、しかしそれを覺えるのはさして困難ではない。自由聯想の方法は以前の方法に較べて大なる長所を持つてゐる。それは單に骨折の節約といふことばかりではない。この方法は被分析者を少しも强制しないし、現實との接觸を決して失はないし、又神經症の構造中の因子を見逃したり、自己の期待から餘計なものを取り入れたりしないことに對する大なる保證を與へるものである。分析の進行及び材料の整頓を決定することは、主として患者に任せてある。それ故個々の症狀や錯綜の體系的完成は不可能になる。催眠術又は督促の方法に於ける經過と正反對に、相關聯してゐる事柄を治療中の種々な時、種々な場所で經驗する。それ故傍聽者には――實際は傍聽者があつてはならないのだが――分析療法は全く不透明であらう。

この方法のも一つの長所は、それが本來決して役目を拒絶する必要のないことである。理論的には思ひ付きの種類に對する要求を棄てれば、常に何等かの思ひ付きを有することは可能な筈である。而もかかる拒絶は全く規則正しく或る一つの場合に現れるのである。が、丁度その孤立によつて又この

場合の解釋も出來るのである。

私は今や分析の姿に重大な特性を附加し、技術的並びに理論的に最大の意義を要求し得る一つの因子の記述に近づいた。總ての分析療法に於て、何等醫師の干渉なしに、患者の分析者の人格にたいする、實際的事情に於ては說明の出來ない強い感情關係が生ずる。それは積極的又は消極的性質のもので、熱情的な、全く官能的な戀愛から反抗、忿怒、憎惡の極端な表現に至るまで變化する。この簡單に『轉附』（"Übertragung"）と名付けられるものは患者に於てやがて快癒への願望の代りに生じ、それが愛情的で適度である間は、醫療的影響の支持者及び共同的な分析の仕事の固有の發條となるものである。後にそれが熱情的になり、或は敵視的なものに變ると、抵抗の主要な道具となる。さうなるとまた患者の思ひ出す活動を鈍らせ、治療の効果を危くするやうなことが起る。だがこれを避けようとするのは無意味である。轉附のない分析は不可能事である。分析が轉附を作り、轉附は分析に於てのみ生起すると信じてはならない。轉附は分析によつてただ暴露され、遊離されるだけである。それは一般的人間的な現象であり、すべての醫療的干渉に於ける効果を決定するものであり、實にそれは一般に一人の人のその人間的環境に對する關係を左右するものである。この轉附において、催眠術家が被暗示性と名付けたもの、催眠關係の支持者である所のもの、淨下法も亦その豫測し難きを歎じ

た所のものを認めることは困難でない。早發性痴呆や偏執病（Paranoia）の場合の如くこの感情轉附の傾向が缺け、或は全然消極的になつた場合は、患者の精神的干渉の可能性も亦失はれる。

精神分析も亦他の精神療法の方法と同じく暗示の手段によつて働くといふのは全く正しい。だが差異は、此處ではそれに――暗示即ち轉附に――治療の効果に關する決定が任されてゐないことである。それは寧ろ患者を、その心的經濟の繼續的變化を意味する所の精神的な仕事の實行に――彼の轉附抵抗の克服に――動かすのに用ひられる。轉附は分析者によつて患者に意識せしめられる。彼は彼の轉附行動に於て、彼の最も早期の對象塡塞から、彼の幼時の排除されたる時期から由來する感情關係を再體驗してゐるのであるといふことを確信せしめることによつてそれは解消される。かかる轉向によつて轉附は抵抗の最强の武器から分析療法の最良の道具になる。とはいへこれの取扱方は分析技術の最も難かしい、又最も重要な部分である。

自由聯想とそれに關聯する解釋術の方法の助けによつて、精神分析は、一見實用的に重用ではないやうであつたが、實は科學の運用に於ける全く新しい地位と驚價に導かねばならなかつた所の仕事を成し遂げた。夢に意味があることを證し、その意味を覺ることが可能となつた。夢は古代においてはなほ未來の告知として尊重されてゐた。近代科學は夢について何事も知らうと欲せず、それを迷信に

委ね、單に『肉體的』な動作として、普通眠つてゐる心的生活の一種の痙攣として說明した。眞面目な科學的業績を行つた人が『夢判斷師』として登場し得ることは思ひもよらぬことのやうであつた。

だが夢のかかる呪咀を意に介せず、それを理解されてゐない神經症の症狀の如く、妄想或は强迫觀念の如く取扱ひ、その見せ掛けの內容を度外視して個々の像を自由聯想の對象とすると、一つの違つた結果に達するのであつた。夢者の數多くの想起によつて、最早不合理とか混亂とか名付けられ得ない所の、十分價値ある心的行爲に相當する所の、そして顯在的(manifest)な夢はその歪められ、短縮され、誤解された飜譯、主として視覺的な像への飜譯に過ぎない所の思想形態を知ることを得た。この潛在的な夢の思想(latente Traumgedanken)が夢の意味を藏してゐた。顯在的な夢の內容は、聯想は結合し得るが、解釋は結合し得ない見せ掛けであり、外觀であつた。

今や多くの問題の解答の前にたつた。その中最も重要なものは、一體夢の形成に對する契機があるか、如何なる條件の下に夢は完成され得るか、如何なる方法によつて常に意味のある夢の思想の屢々意味なき夢への移行が行はれるか、等であつた。一九〇〇年に發表された私の『夢の解釋』に於て、私はこれら總ての問題の解決を試みた。此研究の極く短い拔萃しか此處には載せる餘地がない。夢の分析によつて經驗した潛在的な夢の思想を檢討すると、其中に一つ、外の、條理ある、夢者によく知

られてゐるのからはつきりと目立つてゐるのがある。これは覺醒生活の殘物（晝間の殘物）である。が、弧立してゐる方のには、屢〻、夢者の覺醒生活に緣のない、從つて彼が驚いて或は怒つて否定するやうな甚だ猥褻な願望衝動が認められる。この衝動が本來の夢の形成者なのである。これが夢の製造の爲のエネルギーを調達し、晝間の殘物を材料として用ひたのである。かくして出來た夢は、この衝動の爲に滿足狀態を見せるのであり、その願望實現である。この過程は、もし睡眠狀態の性質の中に何かそれを補助するものがなかつたならば可能にならなかつたであらう。睡眠の心的前提は、睡眠願望への自我の調節と塡塞のあらゆる人生の興味からの退去とである。同時に動力への通路も遮斷されるので、自我は今まで排除作用を維持するに用ひてゐた費用を引き下げることが出來る。この排除作用の夜間の弛緩を無意識の衝動が利用して、夢と共に意識の中へ出しやばるのである。しかし自我の排除抵抗は睡眠中と雖も廢絕された譯ではなく、ただ低下されただけである。その殘物は夢の檢閲（Traumzensur）となつて殘り、無意識の願望衝動が本來のままの形をして現れることを禁ずる。夢の檢閲が嚴しい結果、潛在的な夢の思想は已むなく、禁斷の夢の意味を識別し難くする改變や緩和を行はねばならない。これが顯在夢がその爲に奇怪な性質を得る所の夢の歪みの說明である。これによつて、夢は（排除されたる）願望の（變裝されたる）實現であるといふ命題が根據を得るのである。今

や我々は既に夢が神經症の症狀の如くに形成されたることを認める。それは排除されたる衝動の要求と自我に於ける檢閲する力の抵抗との間の妥協的形成物である。同樣な起原の結果として、それは又症狀と同じく難解であり、同樣に解釋に乏しい。

夢の一般的機能は容易に發見できる。それは覺醒を促す外的或は内的の刺戟を一種の宥和によつて防ぎ、かくして睡眠を障碍に對して保護する役目をするのである。外的刺戟はそれに新解釋を施し、或は何等か無害な狀態に織り交ぜることによつて防がれる。衝動欲求の内的刺戟は睡眠者は放任し、潜在的な夢の思想が檢閲の制御から離れない限り夢の形成による滿足を許す。だがこの危險が迫り、夢が餘りに明瞭になると、睡眠者は夢を中斷し、驚いて目醒める（惡夢 Angsttraum）。外的刺戟が防ぎ切れない程强くなつた時もこれと同じ夢の機能の廢絶が起る（醒夢 Wecktraum）。夢の檢閲の共働の下に潜在的な思想を顯在的な夢の内容に移す過程を私は夢の仕事（Traumarbeit）と名付けた。それは前意識的思想材料の一種獨得な處理であつて、即ちその成分を壓縮し、その心的力點をずらし、全體を視覺的映像に變へ、戲曲化し、そして誤謬に基く第二次的加工によつて仕上げるのである。夢の仕事は我々の知つてゐる正常の思考過程とは著しく異る、心的生活のより深い、無意識な層に於ける過程の優れた標本である。それはまた多くの古風な相貌を現す。例へば此處では主として性的な

象徴的意義（Symbolik）の利用である。これは後更に精神的活動の他の領域においても再び見出された。

夢の無意識衝動が晝間の殘物と、覺醒生活の未決の關心事と結び付いて、其處から出來上つた夢に分析の仕事に對する二重の價値を與へる。解釋された夢は一方排除された願望の實現として證明されるが、他方では又晝間の前意識的思考活動を續けて任意の內容を盛り、或計畫、警戒、熟慮、そして再びまた願望實現を現し得るのである。分析はそれを兩方面に、即ち被分析者の意識的並に無意識的過程を知る爲に利用する。更に夢には小兒時代の生活の忘れられた材料が手にはひるといふ事情から利益が得られ、幼時の健忘は主として夢の解釋に聯關して克服される。夢は此處では以前に催眠術に課せられたことの一部を果す。之に反して、夢の解釋の結果は總ての夢が性的內容を有し、或は性的衝動力に還元されるといふ、屢〻私に歸せられる主張を私は決してなさなかつた。饑や渴や排泄緊迫も排除されたる性的或は利己的衝動と同樣に滿足の夢を作り出すことは容易に分る。小さい子供において、我々の夢の理論の正しいことの好都合な試驗が自由に出來る。子供においては未だ種々の心的組織がはつきりと分化されて居らず、排除作用もまだあまり深く進んでゐないので、屢〻晝間の殘りの或願望衝動の赤裸々な實現に過ぎない夢を經驗する。命令的必要の影響のもとにおいては、大人も

かかる小兒型の夢を作成することがある。

夢の解釋と同樣に分析は、又人間に屢ゝ起る小さな間違ひや徵候行爲の研究を利用する。それには私は一九〇四年に初めて書物として發行された『日常生活の病的心理』の研究を捧げた。この多く讀まれた著書の內容は、これ等の現象は偶然的のものではない事、それらは生理的說明を超越し、意味があつて解釋することが出來、抑制された或は排除された衝動及び意思への結論に理由を與へるものであることの證明から成つてゐる。夢の解釋竝にこの研究の卓越的價値はしかし、それが分析の仕事に與へる補助にあるのではなく、それらの別な性質にあるのである。今までは精神分析はただ病理的現象の解消にのみ從事し、その說明には屢ゝ、治療される材料の重要性に對する關係以外に射程を有する假定をしなければならなかつた。所が今度手を着けた夢は決して病氣の症狀ではなかつた。それは正常な心的生活の現象であり、總ての健康な人に起り得るものであつた。夢が症狀の如くに作られるものならば、それの說明が同じ假定、卽ち衝動の排除作用や、代償及び妥協形成や、意識的及び無意識的なものの處分の爲の種々な心的組織の假定を必要とするものならば、然らば精神分析は最早病理的心理學の補助科學ではない。然らば精神分析は寧ろ正常なものの理解にも缺くべからざる、新しい、より根本的な心理學の萠芽である。その前提及び結論を心的及び精神的現象の他の領域へ移すこ

とが出来るのである。廣い場所への、世界的興味への道が精神分析の前に開かれてゐる。

五

私は精神分析の内部的成長の叙述を中斷して、その外部的運命に眼を向けることにする。今まで私がその所得について述べて來たことは大體から言つて私の業績の結果であつた。しかし關聯上後の成績をも記載し、私の弟子や仲間の寄與を私自身のものから區別しなかつた。

ブロイエルと別れて後十年以上の間、私は一人も仲間を持たなかつた。全く孤立であつた。ウィーンでは私は邪魔物にされ、外國へは私の名は知れなかつた。『夢の解釋』(一九〇〇年)は專門雜誌では殆ど批評されなかつた。『精神分析運動の歴史』といふ論文に、ウィーンに於ける精神病學界の態度の一例として、私の學說に反對する書物を書いたが然し『夢の解釋』は讀まなかつた一人の助教授(Assistent)との會話を載せて置いた。病院で或人が彼に、それは無駄骨折だと言つたのであつた。その後員外教授(Extraordinarius)になつたその人は、あの談話の内容を否定し、私の記憶の正確を疑ふことを敢てした。私はあの時の私の報告の一語と雖も變へる必要を認めない。

私が如何なる運命にぶつかつてゐるかといふことを理解した時、私の痛苦は非常に和いだ。漸次に

孤立も終りを告げた。最初ウイーンに於て、門弟達の小さな團體が私の周りに集まつた。一九〇六年以後にはチューリヒの精神病學者ブロイエル (E. Bleuler)、その助敎授ユング (C. G. Jung)其他が大いに精神分析に興味を持つたのを人々は見た。個人的關係が結ばれ、一九〇八年の復活祭にはこの若い科學の友はザルツブルグに相會して、かかる私的會合の規則正しい反復と『精神病理學及び精神分析學研究年報』といふ表題の下にユングによつて編輯される雜誌の發行とを申合せた。發行者はブロイエルと私とであつた。これはその後世界大戰の勃發と共に中止された。同時にスウイス人の手引きによつてドイツの各所に於ても精神分析に對する興味が喚起され、多くの文學的表明や、科學的會合に於ける盛な議論の對象となつた。が、何處でも親切な、或は好意を以て待ち受けてゐる待遇は受けなかつた。ちよつとの間精神分析と知り合ひになつた後、ドイツ學界はそれの排斥に一致した。

勿論今日は、精神病學、心理學及び精神科學一般に對する精神分析の價値に關する後世の決定的判斷が如何なるものであるかは私にも分らない。だが私は思ふに、もし我々の經過して來た時代が何時か歴史家の筆に上るとすると、その歴史家は、この時代のあの頃の代表者の態度はドイツ學界の爲に名譽にはならぬことを承認しなければならないであらう。私は何も拒絶の事實やその强硬さを言ふのではない。この二つは容易に理解できたし、期待してゐた所でもあつたし、又少くとも反對者の品

性に何等の陰を投げることがなかつた。だが非常なる高慢と論理の心なき輕蔑とは、攻撃の亂暴と無作法とは許すべからざるものである。十五年もたつてからこんな鬱憤を晴らすのは子供らしいと非難する人があるかも知れない。なほまだ外に附け加へることがなかつたなら、私もそんなことはしないであらう。數年後、世界大戰の間、敵國の合唱がドイツ國民に對して野蠻人といふ非難の聲をあげた時、前述のことが總てこの非難に一致してゐるので、自己の經驗からそれに反對することが出來なかつたのは實に殘念至極であつた。

反對者の或一人は、彼の患者が性的な事柄を話し始めると發言を禁ずることを大いに自慢にしてゐた。そしてこのテクニツクによつて明かに、神經症に於ける性慾の病源的役割に關して判斷する權利を見棄ててゐた。精神分析の理論によつて容易く說明できるので我々を迷はす譯には行かなかつた所の感情的抵抗は別として、意思の疏通の主な妨害は、反對者が精神分析に於て私の思辯的空想の產物を見て、それの建設に費やされた永い、辛抱強い、前提なしの仕事を信じようとしない事情にあるやうに私には思はれた。彼等の意見によれば、分析は觀察や經驗とは何の關係もないのであるから、彼等はまたそれを自ら經驗することなしに非認するのも當然であると考へたのである。他のそれ程の確信を有してゐない者達は、自分達の論爭してゐるものを見ない爲に顯微鏡を覗かないといふ抵抗の古

典的策略を繰返した。大多數の人々は新しい事柄を自己の判斷に任されると、如何に間違つた振舞ひをするものであるかといふ事は全く不思議な位である。永年の間、そして今日もなほ、私は『好意ある』批評家達から、どこそこまでは精神分析は正しい、がこの點からその僭越が、その不當な普遍化が始まるといふやうなことを聞かされた。だがそんな境界を定めること位難かしいことはなく、そんなことを言ふ批評家自身數日前或は數週間前まではこの事柄については何等の知識を持つてゐなかつたのであることを私は知つてゐる。

精神分析に對する公の破門は結果として分析家達をより親密に團結させた。一九一〇年ニュルンベルグに於ける第二回の會合に於て、彼等は、フェレンチ (S. Ferenczi) の提議によつて、『萬國精神分析學協會』(Internationale Psychoanalytische Vereinigung) を組織した。それは地方團體に分れ、一人の會長の指導の下に立つことになつた。この協會は世界大戰にも耐へて、今日なほ存在し、ウイーン、ベルリン、ブダペスト、チユーリヒ、ロンドン、オランダ、ニユー・ヨーク、汎アメリカ、モスクワ及びカルカッタの地方團體を包括してゐる。最初の會長には私はC・G・ユングを選擧させた。が、これは後に分つたのであるが、失敗であつた。精神分析はその頃アードラー (Adler) とシュテーケル (Stekel) とによつて編輯された第二の雜誌『精神分析中央雜誌』を得、續いて間もなく第三

の『イマーゴ』(Imago)が非醫者のザツクス (H. Sachs) とランク (O. Rank) とによつて精神科學への精神分析の應用に當てられた。その後間もなくブロイエルが精神分析の辯護のための書物を著した(「フロイド精神分析」、一九一〇年)。爭論の中に正義と率直な論理とが亦發言したのは嬉しかつたが、しかしブロイエルの著者は私を十分滿足させることが出來なかつた。それにはあまりに公平の外觀を得んとする努力が拂はれ過ぎてゐた。この書の著者に兩頭性 (Ambivalenz) といふ價値多き概念の我々の科學への採用を負ふのは決して偶然でない。後の諸論文に於てはブロイエルは分析の學説に對してあまりに否定的な態度を取り、そのあまりに本質的な部分を疑つたり排斥したりしたので、私は不思議に思つて、それでは彼の分析に對するどんな承認がまだ殘つてゐるのかと訊かなければならなかつた程である。而もなほ彼は後に『深部心理學』("Tiefenpsychologie")の爲に心から好意をよせた言葉を發したのみならず、彼の破瓜病 (Schizophrenie) の大規模な叙述はそれを基礎としてゐる。なほブロイエルは「萬國精神分析學協會」に永く留まらなかつた。彼はユングとの不和の爲それを去り、"Burghölzli" は分析から失はれた。

公の反對は精神分析の傳播をドイツにおいても、他の國々においても引き止めることは出來なかつた。私は他の場所で(「精神分析運動の歷史」)その進步の段階を追求し、又その代表者として目立つ人

人の名前も擧げて置いた。一九〇九年にはユングと私とが、スタンレー・ホール（G. Stanley Hall）によつてアメリカへ招聘され、彼が總長をしてゐたマサチユーセッツ・ウオースターのクラーク大學で、この學校の創立二十年紀念祭に、一週間に亙る講義を（ドイツ語で）することになつた。ホールは正當に尊敬されてゐた心理學者兼教育家で、精神分析は既に數年來彼の授業の中へ取り入れてゐたのであつた。大家達を引き上げたり又引きおろしたりすることの好きな彼には、いくらか「國王擁立者」（"Königsmacher"）のやうな所があつた。我々は其處で又ハーヴードの神經病學者ジエームズ・J・プツトナム（James J. Putnam）に會つた。彼はその老齡にも拘らず精神分析に熱中し、彼の一般に尊敬されてゐる人格の全部の重みを以てその文化的價値及びその目的の純粹性を保證した。强迫神經症の素質に對する反動として主として倫理的な考へ方をしてゐたこの有名な人に於ては、精神分析を一定の哲學的體系に適合させ、道德的修養の役目をさせようといふ要求がただ我々を困らせた。又哲學者ウイリアム・ジエームズ（William James）との會合も私に忘れられない印象を殘した。彼が散步の時に突然立ち止まり、私に自分の手袋を渡し、私に先へ行つて呉れ、自分は今襲つて來つつある狹心症の發作が去り次第後から行くから、と言つた小さな情景を私は忘れることが出來ない。彼は一年の後心臟病で死んだ。私はそれ以來常に生命の終りに直面してあの從容たる態度を取り度いと

望んでゐる。

その頃私はやつと五十三歳で、元氣旺盛であつた。新世界に於ける暫くの滯在は私の自信を强めた。ヨーロツパでは私はまるで追放されたやうに感じてゐたが、此處では第一流の人々から同等のもののやうに待遇されゐ自分を發見した。私が『精神分析に關する五回の講義』をする爲にウオースター で講壇に上つた時には、それは信じられない白日夢の實現のやうな氣がした。精神分析は卽ち最早妄想の產物ではなくなつたのだ。それは價値ある實在の一部分となつたのである。それは又我々の訪問以來アメリカに於て地盤を失ひはしない。それは素人の間に非常に擴まり、多くの公の精神病學者から醫學敎授の重要な成分として認められてゐる。恨むらくはそれは其處では多く水を割られたことである。精神分析に關係のない多くの濫用がその名を僭稱してゐる。技術及び理論の根本的習熟の機會に缺けてゐる。更にそれはアメリカでは、素朴にも心理的の問題を一般に取り除いたと自負する行動主義(Behaviourism)と衝突する。

ヨーロツパにおいては一九一一年から一九一三年の間において、今までこの若い科學において重要な役割を演じてゐた人物、卽ちアルフレツド・アードラーとC・G・ユングとによつて唱導される二つの精神分析からの離叛運動が行はれた。兩方とも全く危險に見えた。そして速かに多くの仲間を作

つた。しかしそれらの力はそれ自身の內容にあるのではなく、精神分析の事實上の材料は最早否定しないまでもその不快に感ぜられる結果から離れるといふ好餌にあつたのである。ユングは分析の事實を抽象的、非人格的、非歷史的なものに解釋し直すことを試み、それによつて小兒性性慾及びエディプス錯綜の評價竝に小兒期分析の必要を省くことが出來ると考へた。アードラーはさらにもつと精神分析から遠ざかつたやうに見えた。彼は一般に性慾の意義を非認し、性格形成及び神經症形成を專ら人間の力の追求とその體質的低格性の報償に對する欲求とに歸し、精神分析の總ての心理的新獲得物を顧みなかつた。だが彼に非認されたものは名前を變へて彼の緊密な體系への採用を强要した。彼の「男性の抗議」("männlicher Protest") は不當に性慾化された排除作用に外ならない。批評は二人の異端者に大なる寬大を以つて加へられた。私はただアードラー竝にユングに、彼等の學說を「精神分析」と呼ぶことを罷めさせることが出來ただけである。今日、十年の後になつて、人はこの二つの企圖が精神分析に害を與へずに通り過ぎたことを確認することが出來る。

或團體が二、三の主要な點に於ける一致を基礎として設立されてゐる場合には、この共通の根柢を見棄てた人々が其處から脫退するのは當然のことであらう。然るに人は屢〻以前の弟子の離反を私の狹量のしるしとして私の罪に歸したり、私に懸つてゐる特別な宿命の現れを其處に見ようとしたりし

た。それに對しては、私から去つたもの、卽ちユングやアードラーやシユテーケル其他少數のものに對して、アブラハム（Abraham）やアイテインゴン（Eitingon）やフェレンチやランクやジョーンズ（Jones）やブリル（Brill）やザツクスやピスター師（Pfarrer Pfister）やヴン・エムデン（van Emden）やライク（Reik）等々の如く凡そ十五年來忠實な協力と又多くは曇りなき友情とを以つて私に味方して吳れる多數の人々があることを指摘すれば足りよう。私は此處にはただ既に精神分析の文獻に光榮ある名前を留めてゐる、私の門弟の內の最古のもののみを擧げたのである。他のものを省略したのは決して輕視を意味するのではなく、若い人々及び後から來つた人々の間にこそ大なる望を囑するに足る能才があるのである。所で私は恐らく、狹量な、無謬謬の已惚に陷つてゐる人間は決して私のやうにこんなに大勢の精神的に優秀な人々を引き付けることは出來ないであらうし、況して彼が最早實際的でない誘惑を用ひてゐるとすれば尙更であらう、と私の爲に辯疏しても構はないであらう。

他の非常に多くの組織を破壞した世界大戰も我々の『インターナショナル』（萬國精神分析學協會）には害を加へ得なかつた。大戰後第一回の會合は一九二〇年中立地帶のハーグで開かれた。オランダ人の飢餓と貧乏に苦しんでゐる中央ヨーロッパ人を厚遇してくれた有樣は人を感動せしめるものがあ

つた。又私の知る處では、破壞された世界でイギリス人とドイツ人とが科學的興味の爲に仲よく同一の食卓についたのはこの時が初めてであつた。大戰は西方諸國においても、又ドイツにおいてさへも精神分析に對する興味を高めた。戰爭神經症患者の觀察は遂に醫師達をして神經症的障害に對する精神發生の意義に眼を開かしめた。我々の心理學的概念、『病氣の利得』("Krankheitsgewinn")、『病氣への逃走』("Flucht in die Krankheit")は遠かに普及された。一九一八年ブダペストに於ける崩壞前最後の會合には、中歐諸國（ドイツ側）聯合政府は公任の代表者を遂り、彼等は戰爭神經症患者治療の爲の精神分析屯所の設立を承諾した。それは實現されるに至らなかつた。又我々の最もよき會員アントン・フオン・フロイント博士（Dr. Anton von Freund）のブダペストに分析の學說及び治療の本部を設けようといふ大規模な計畫も、やがて引き續いて起つた政治的變革とこの掛け換へのない人の早死とのために挫折した。彼の提起の一部は後にマックス・アイテインゴンが一九二〇年ベルリンで精神分析の診療を始めたので實現された。ハンガリーに於けるボルシェヴィスト支配の短い期間の內、フエレンチは精神分析の公任代表者として大學で有効な敎授をなすことが出來た。戰爭後我々の反對者達は好んで、經驗の結果分析の主張の眞實性に反對する的確な證明を得たと公言した。卽ち戰爭神經症は神經的疾患の病源に於ける性的因子の無用であることに對する證據を示したといふのであ

る。だがそれは輕率早計の誤謬であつた。何となれば一方においては誰も戰爭神經症の一例にも根本的な分析を施し得なかつたから、從つてその動因については何等確かなことは知られて居らず、又かかる無知からは何の結論も引き出し得ないからである。又他方においては精神分析はずつと前から、對象の代りに自らの自我へのリビードーの附着を內容とするナルチスムス及びナルチスムス的神經症の概念を得てゐるのである。卽ちそれ故曾ては精神分析は性慾の概念を不當に擴げたといつて非難したのである。然るに論難に都合がいいと見ると、その爲分析の罪を見落し、再び最も狹い意味の性慾を攻擊するのである。

精神分析の歷史は、淨下法時代の前史は別として、私に取つて二つの時期に分かれる。第一期に於いては私は孤立して居り、總ての仕事を自分でやらなければならなかつた。この時代は一八九五――九六年から一九〇六年或は一九〇七年までであつた。それから今日に至るまでの第二期においては、私の門弟や共働者の寄與が益〻重大な意義を有するやうになつたので、私は今重い病氣の爲終りの近きを覺つてゐるが、安心して自分の仕事の停止を考へることが出來る。それ故に私はこの『自傳』において、第二期に於ける精神分析の發達を、私の活動のみによつて充たされてゐる第一期に於けるそれの漸次の構成の如くに、詳しく敍述することをしないのである。ただ此處には、私がなほ顯著な

關與をなした新發見、即ち就中ナルチスムス、衝動學及び精神病への應用の領域に於けるそれを述べるのが至當であると感ずる。

經驗が増して行くに從つてエディプス錯綜が神經症の核心として益ゝ明瞭に現れて來たことを附け加へて置かねばならない。それは小兒の性生活の最高點であると同時に、そこから後の凡ゆる發達が出發する所の接合點でもあつた。だがそれと共に、分析によつて神經症に特有な因子を暴露する期待は消失した。ユングが彼の分析早期において適切に言ひ現したやうに、神經症は何も特別な、自己專有の内容を有してゐる譯ではなく、然して神經症患者は正常者がうまく征服する同一物に蹉跌するのであると言はなければならなかつた。この認識は決して失望を意味しなかつた。それは精神分析によつて發見された深部心理學が正に正常な心的生活の心理學であるといふ他の見解と甚だよく一致した。我々は化學者と同樣の經驗をしたのである。即ち産出物の大なる質的差別が同一元素の化合の割合に於ける量的變化に導かれたのである。

エディプス錯綜においてはリビドーは兩親の表象と結合して現れた。しかしそれ以前にかかる對象の全くない時代があつた。其處からリビドー説の基礎をなす概念――リビドーが自らの自我を充塞する、即ち自我を對象に取るといふ狀態の概念が生じた。この狀態は『ナルチスムス』又は自己愛と

名付けることが出來た。次にこれは本來決して完全に放棄されるものではないといふことが考へられた。一生涯自我は大なるリビドー貯藏所として留まり、其處から對象塡塞が送り出され、其處へリビドーが對象から再び逆流することが出來るのである。卽ちナルチスムス的リビドーは絕えず對象リビドーに轉化し、又その逆も行はれる。この轉化の極端にまで達し得る顯著な例は、自己犧牲にまで到達する性的或は昇華されたる戀愛によつて示される。今までは排除過程においてただ排除されるものにのみ注意を向けてゐたが、この表象によつて、排除するものをも正當に評價することが可能になつた。排除作用は自我において働いてゐる自己保存の衝動（「自我衝動」）によつて行はれ、リビドー的衝動において完成されると言はれてゐた。所が、自己保存の衝動も亦リビドー的性質のものとして、ナルチスムス的リビドーとして認めたので、排除過程はリビドー自身の內部の過程として現れた。ナルチスムス的リビドーは對象リビドーと對立した。自己保存の慾望は對象愛の要求に對して、從つて狹い意味の性慾に對しても防禦した。

心理學において、なほその上に建設され得る、產出力ある衝動學に對する要求程急務と感ぜられるものはない。然るにかくの如きものは存在しない。精神分析は手探りの試みで衝動學の爲に骨折らねばならない。それは最初自我衝動（自己保存、飢餓）とリビドー的衝動とを對立させたが、後にそれ

を新たな、ナルチスムス的リビドーと對象リビドーとの對立で置き換へた。これによつて明かに最後の言葉が語られはしなかつた。生物學的考量は、ただ一種の衝動の假定で滿足することを禁ずるやうに見えた。

私の晩年の業績において〔『快感原理の彼方』、『集團心理と自我分析』、『自我と他我』〕、私は永く抑へたゐた思辨への慾望をほしいままにし、其處で又衝動問題の新解決を目ざした。私は自己保存及び種屬保存をエロスの概念の下に總括し、それを靜寂の内に働いてゐる死の衝動或は破壞衝動と對立させた。衝動は全く一般的に生者の一種の彈力性として、曾て存在し外部の障碍によつて廢棄された狀態の囘復への渇望として理解される。衝動のこの本質において保守的な性質は、反復强迫の現象によつて說明される。エロスと死の衝動との共同作用及び反撥作用が我々に生命の姿となつて現れるのである。

この構成が果して實際に役立つかどうかは未決の問題である。それは成程精神分析の最も重要な理論的表象の二三のものを固定する努力によつて指導されはしたが、しかしそれは遙かに精神分析を越えてゐる。私は屢々、精神分析に於けるリビドーや衝動の概念の如く、その最高の概念が不明瞭である所の科學は重んずることが出來ないといふ輕蔑的な言葉を聞かされた。だがこの非難は事情の完全

な誤謬がその根柢をなしてゐる。明瞭な根本概念と輪廓のはつきりした定義とは、ただ精神科學においてのみ、それが知的體系形成の範圍內において事實領域を摑まうとする限りにおいて可能である。心理學が屬してゐる自然科學においては上部概念のかかる明瞭は無用であり、又實に不可能である。動物學及び植物學は動物及び植物の正確な、十分な定義を以つて始まりはしなかつた。生物學は今日なほ生物の概念を確實な內容を以つて充すことを知らない。物理學と雖も、若しその物質、力、重力、其他の概念が望ましき明瞭さと正確さを得るまで待たなければならなかつたとしたら、その全發達は遲滯したであらう。自然科學の諸學科の根本表象或は最高概念は常に最初は不定のままに抛つて置かれ、當分はそれが由來する現象界への指摘によつてのみ說明され、觀察材料の進步する分析によつて始めて明瞭になり、內容充實し、矛盾がなくなり得るのである。

私は既に私の制作のもつと前の時代において、精神分析的觀察から一般的觀點に達する試みをなした。一九一一年私は「心的生起の二つの原理に關する方式」といふ小さな論文に於て、確かに獨創的でない方法で、心的生活に對する快不快の原理の優越と所謂「現實原理」によるそれの交代とを强調した。後に私は「心理形而上學」("Metapsychologie") の試みを敢てした。凡ゆる心的過程を力學(Dynamik)、局所學 (Topik) 及び經濟 (Ökonomie) の三つの坐標に從つて評價する觀察の一方

法をかく名づけ、之を以つて心理學の達し得る極度の目標とした。この試みはトルソーに終つた私。は僅かの論文（衝動と衝動の運命——排除作用——無意識——悲哀と憂鬱症等）の後中止した。そしてそれは確かにいいことであつた。何故なら未だかかる理論的固定の時には達してゐなかつたからである。私の最後の思辨的業績に於て、私は我々の心的裝置を病理的事實への分析應用を基礎として整頓することを企て、それを自我（Ich）と他我（Es）と超我（Über-Ich）とに分つた。（「自我と他我」、一九二二年。）超我はエディプス錯綜の相續者で、人間の倫理的要求の代表者である。

私の業績のこの最後の時期に於て、私が忍耐強き觀察に背を向け、全然思辨に移つて了つたかの如き印象を惹き起してはならない。私は寧ろ分析の材料とは益々密接な接觸を續け、特別な、臨床的或は技術的な題材の處理は決して中止しなかつた。觀察から遠ざかつた場合でも、本來の哲學への接近は注意深く避けた。體質的不適任がかかる抑制を甚だ容易ならしめた。私は常にフェヒナー（G. Th. Fechner）の思想が理解し易く、重要な點において又この哲學者に賴つた。精神分析のショーペンハウアー（Schopenhauer）の哲學との廣き一致は——彼は情的活動の最高位と性慾の優越的意義とを主張したのみならず、排除作用のメカニズムをさへ知つてゐた——私が彼の學說を知つてゐたことに基くものではない。私はショーペンハウアーを非常に年取つてから讀んだのである。他の哲學者に

ーチエ（Nietzsche）の豫想や洞察は、骨折つて得た精神分析の結果と屢々驚くばかり一致してゐるが正にその爲に私は永い間彼を避けてゐた。優先權よりは公平な態度の維持の方が私には大切であつた。

神經症は最初の、そして又永い間唯一の、分析の對象であつた。醫學の實地においてこの疾患を精神病から引き離し、器質的神經疾患の仲間入りをさせてゐるのは間違つてゐるといふことは、最早如何なる分析家も疑はない所であつた。神經症學は精神病學に屬してゐる。その入門に缺くべからざるものである。所で精神病の分析的研究は、そのやうな骨折の治療的に見込がない爲に除外されてゐるらしい。精神病者には一般に積極的轉附の能力が缺けてゐるために、分析技術の主要手段が用ひられない。だが然し、色々な通路が分つて來る。轉附も全く用をなさない程完全に缺けてはゐないことが屢々ある。週期性精神異常や、輕い偏執病的變化や、部分的破瓜病においては分析によつて確實な効果を收め得た。又多くの場合精神神經症と早發性痴呆との間に永いこと診斷が不定であり得ることは少くともこの科學のためには利益であつた。着手された治療的企圖が中止されなければならなくなる前に、重要な解明を齎すことが出來た。だが最も問題になるのは、神經症においては骨の折れる操作によつて深部から引き出される多くのことが、精神病においては誰の目にも見えるやうに表面に出て

ゐるといふ點である。それ故多くの分析の主張に對して精神病院が最もよい供覽の對象となる。それ故分析がやがて精神病學的觀察の對象への道を見出さない譯には行かなかつた。甚だ早い頃（一八九六年）私は妄想性痴呆の一例において、神經症に於けると同樣の病源的因子と同一の情緒的錯綜の存在とを確證した。ユングは痴呆症患者の不可解な常同症（Stereotypie）を患者の旣往の生活への再歸によつて說明した。ブロイエルは分析によつて神經症患者に發見されるやうなメカニズムを、種々な精神病において示した。それ以來精神病の理解に對する分析家の努力は中止されることがない。殊にナルチスムスの概念を以つて研究するやうになつて以來、此處彼處でちよいちよい垣を越えて一瞥することが出來た。この點では恐らくアブラハムが憂鬱症の鮮明において最も成功した。この領域においては成程今の處凡ゆる知識が治療の力に移つては行かない。が、單に理論的な所得と雖も見くびるべきではない。その實際的應用の日を待つべきである。永い間には精神病學者も彼等の患者材料の證明力には抵抗できない。現今ドイツ精神病學界においては、分析的立場から見て、一種の平和の侵略（Pénétration pacifique）が行はれてゐる。精神分析家にはならない、「正統派」には屬さない、その誇張には加はらない、分けても壓倒的な性的因子は信じないと絕えず斷言しながら、而も若き學徒の大多數は分析學の此處彼處を我が物となし、自己の方法でそれを材料に應用してゐる。あらゆる兆は

この方向へのこれ以上の發達の近きを示してゐる。

六

今や私は遠くから、永い間強硬であつたフランスへの精神分析の侵入が如何なる反應徴候を引き起したかを追求して見よう。それは前に經驗したことの再現の如く反應した。が、又獨得の點も持つてゐた。信ぜられないやうな無邪氣な抗議が起つた。例へばフランス人の纖細な感情は精神分析の命名法の衒學的で拙劣なのに反感を起すといふが如きである(この際レツシングの不朽なシユヴリエ・リコー・ド・ラ・マルリニエール Chevalier Riccaut de la Marlinière のことを思ひ出す必要がある!)。も一つの抗議はもつと眞面目であつた。それはソルボンヌの心理學の敎授にも似合はなくはなかつた。卽ちラテン的精神 (Génie latin) には精神分析の考へ方は到底我慢が出來ぬといふのであつた。さうするとその贊成者といふことになるアングロサクソンの同盟國は明確に放棄されたのである。これを聞くものは當然、チユートン的精神 (Génie teutonique) は精神分析を、それが生まれ落ちる時から最愛の子供として抱きしめてゐたと考へねばならなくなる。

フランスにおいては精神分析に對する興味は文藝家達から出發した。これを理解する爲には、精神

分析が夢の解釋を以て純醫療的な事柄の境界を越えたことを思ひ起さなければならない。そのドイツに於ける出現と今フランスに於けるそれとの間には、文學及び藝術學の領域、宗敎史及び太古史、神話學、民族學、敎育學等へのその種々な應用がある。これら總ての事は醫學とは殆ど關係がなく、ただ丁度精神分析によつてそれと結び付いてゐるだけである。それ故私はそれらを此處に詳しく論ずる權利を持たない。といつて、全然等閑に付する譯にも行かない。といふのは一方それらは精神分析の價値と本質との觀念を與へるに缺くべからざるものであり、他方私は私自身の一生の事業を報告する任務を引き受けてゐるからである。これらの應用の大多數の初まりは私の業績に立ち還る。此處彼處でちよいちよい私も亦、かかる醫療以外の興味を滿足させる爲に一步道から踏出した。他の人々、醫者のみならず專門家達は、私の足跡を追うて深くそれぞれの領域に入り込んだ。だが私は私のプログラムに從つて、精神分析の應用に對する私自身の寄與のみに限らうと思ふから、讀者諸君にはその延長と意義の甚だ不十分な姿をお目に掛けることが出來るに過ぎない。

多くの提起は私にとつては、段々に私がその遍在性を認めた所のエディプス錯綜から出發した。今まで常に恐しき材料の選擇、更に創造が、その詩的描寫の感動的効果が、しかして一般に運命悲劇の本質が不可解であつたとするならば、これら總ては、心的生起の合法性が此處ではその完全な情緒的

意義において把握されてゐるといふ見解によつて說明された。宿命や神託は內的必然性の具體化に過ぎなかつた。主人公が知らずして、又たくらまずして罪を犯すのは、彼の犯罪的意欲の無意識性の正しい表現として理解することが出來た。この運命悲劇の理解から次に、三百年來その意味を示すことも出來ず詩人の趣意を察知することも出來ずに驚嘆して來たハムレットの性格悲劇の解明まではほんの一足であつた。この詩人によつて創造された神經症患者が、現實世界に於ける數多くの彼の仲間と同樣に、エディプス錯綜に蹉跌するのは注意に値する。何故ならハムレットはエディプス意欲の內容を形作る二つの行爲を他人に復讐する任務の前に立たされて居り、その際彼自身の暗い罪惡感が彼の腕をにぶらせ得るからである。ハムレットはシェークスピアによつて、その父親の死後間もなく書かれた。この悲劇の分析に對する私の暗示は、後にアーネスト・ジョーンズによつて十分な完成を得た。それから又同一の例をオットー・ランクが戲曲家の材料選擇に關する彼の研究の出發點として用ひた。彼はその『近親相姦の主題』("Inzest-Motiv")に關する大著において、如何に屢〻詩人がエディプス境遇の主題を描寫に選ぶかを示し、この材料の變形、修正、緩和を世界の文學に亙つて追求することが出來た。

此處から一般に詩人藝術家の創作の分析に着手することが出來た。空想の世界は、快感原理から現

實原理への苦痛に感ぜられる移行の際に、現實生活においては斷念しなければならなかつた慾望滿足の代償を許す爲に設けられた『保護地帶』であることを覺つた。藝術家は神經症患者と同樣に不滿足な現實からこの空想世界へ退いた。しかし神經症患者と違つて現實への歸路を見出し、其處に再びしつかりした地步を占めることを心得てゐた。彼の作品は、藝術品は、全く夢と同樣に無意識願望の空想的滿足であつた。それは又妥協の性質をも夢と共通に持つてゐた。何故なら藝術作品も亦排除作用の力との公然の葛藤を避けなければならなかつたからである。だがそれは非社會的、ナルチスムス的な夢と異つて、他の人間の關與を考へに入れて居り、彼等にも同一の無意識願望衝動を起させ、滿足させることが出來た。なほその上にそれは形式美の知覺快感を『景品』として用ひた。精神分析のなし得たことは、藝術家の生活印象、偶然の運命と、作品との前後關係から、彼の體質及び彼の中に働いてゐる衝動卽ち彼に於ける一般的人間的なるものを組み立てることであつた。かかる意圖において私は例へばレォナルド・ダ・ヴィンチを研究の對象とした。この研究は唯一の、彼によつて傳へられた小兒時代の回想を基礎とし、根本において彼の繪『聖アンナ十三人像』の說明を目的としてゐる。私の友人や門弟がその後數多くの同樣な分析を藝術家と共作品とに對して企てた。かくの如くして得られた分析的理解によつて藝術品の鑑賞が害されると考へるのは當らない。だが此處で恐らく分析から

餘りに多くを期待してゐるであらう素人に對して、分析は多分彼等に最も興味のある二つの問題の上へは光を投げないことを白狀して置かねばならない。分析は藝術的天分の解明に對しては何事も言ふことが出來ず、又藝術家の用ひる手段、卽ち藝術的技巧の暴露も分析には閉されてゐる。

イエンゼン(W. Jensen)の『グラディヴ』("Gradiva")といふ、小さな、それ自身としては別に大して價値のある譯ではない小說において、私は、創作された夢が現實の夢と同一の解釋を許すことを、卽ち詩人の作物において我々が夢の仕事から知つてゐる無意識のメカニズムが働いてゐることを證し得た。

『頓智とその無意識に對する關係』についての私の書物は直接『夢の解釋』からの橫跳びである。あの頃私の仕事に關與してゐた唯一の友人は、私の夢の解釋は屢〻「頓智的」な印象を與へると私に言つてゐた。この印象を說明するために私は頓智の檢討に取り掛かり、そして、頓智の本質はその技巧的手段にあり、然してその手段は『夢の仕事』の働き方と同一であること、卽ち壓縮、轉位、反對による描寫、最小のものによる描寫等であることを發見した。次に如何にして頓智の聽き手に於ける高度の快感獲得が起るかといふ經濟的檢討がこれに續いた。その答は、提供されたる快感プレミアム(前快感 Vorlust)による誘惑の後の排除支出の瞬間的廢止によつて、といふのであつた。

私自身は、一九〇七年强迫行爲と宗教行爲（儀禮 Ritus）との間の驚くべき類似の確證を以て始つた所の、私の宗教心理學に對する寄與の方を高く評價する。未だ深い關係を知らずに、私は强迫神經症を歪められたる個人的宗教として、宗教を言はば世界的强迫神經症として言ひ現した。後に、一九一二年に、神經症患者と未開人との精神的產物の間の甚しき類似に對するユングの印象深き指摘が、私の注意をこのテーマに向けさせる機緣となつた。『トーテムとタブー』といふ表題の一冊の本に纏められた四つの論文において、私は、未開人においては近親相姦畏怖が文化人に於けるよりも更に强く際立つてゐて、全く特別な防禦方法を作り出してゐることを論述し、最初に現れた道德制限の形式であるところのタブー禁止の感情兩頭性に對する關係を檢討し、アニミズムの原始的宇宙組織において精神的實在の過重、即ち又咒術（Magie）の基礎をなしてゐる所の『思想の全能』の原理を暴露した。至る所强迫神經症との比較が行はれ、原始的精神生活の前提の如何に多くがこの不思議な疾患においてなほ効力を持つてゐるかが示された。しかし就中トーテミズムが——其處では社會秩序の始まりが未發達の宗教及び二三の僅かなタブー禁止の綾嚴な支配と結合してゐるところのこの原始民族の最初の統制組織が、私の心を引いた。「崇拜」されるものは此處では常に動物であつて、その動物から又氏族（Clan）が由來すると主張されてゐる。種々の標識から最も進步せる民族も亦曾てはこのトーテミ

ズムの時代を經て來たことが推論される。

私のこの領域に於ける研究の主な典據はフレーザー（J. G. Frazer）の有名な著書（『トーテミズムと異族結婚』"Totemism and Exogamy"・『金の枝』"The Golden Bough"）であつた。これは價値ある事實と着眼點との實庫であつた。だがトーテミズムの問題の說明にはフレーザーは餘り役立たなかつた。彼はこの題目に關する自分の意見を度々根本から變更してゐた。又他の人種學者や太古史家もこの事においては不確かで且不一致であるやうであつた。私の出發點は、トーテムを殺さぬこと及び同じトーテム氏族の女を性的に使用せぬこととといふトーテミズムの二つのタブー規則の、父を除去し母を妻とするといふエディプス錯綜の二つの內容との著しい一致であつた。そこでトーテム獸を父と同等に見る試みがなされた。尤もこれはさうでなくとも未開人達はそれを氏族の祖先として崇拜してゐるのであるから、彼等によつて明白になされてゐる譯であつた。次いで精神分析の側から二つの事實が私の助けになつた。卽ち小兒時代のトーテミズム復歸について語ることを許したフェレンチの子供に於ける優れた觀察と、子供の早期の動物恐怖症において、この動物がエディプス錯綜において證明される父に對する恐れの轉位されてゐる父親代償であることを屢々示した所の分析とであつた。さて父殺しをトーテミズムの核心として又宗教形成の出發點として認めるにもう一息といふ所ま

で來た。

この後一息はロバートソン・スミス（W. Robertson Smith）の著者『セム族の宗教』（"The Religion of the Semites"）を知ることによつて得られた。物理學者で聖書研究家なるこの天才的な人はトーテム宗教の本質的な部分として所謂トーテム餐（Totemmahlzeit）なるものを述べた。年に一度、いつもは神聖なトーテム獸が儀式的に、凡ゆる同族者の參與の下に、殺され、食ひ盡され、然る後に哀悼された。この哀悼に續いて大なる祭典が行はれた。更にダーウインの、人類は始め遊牧群の中に生活し、その遊牧群の各〻は一人の強い、亂暴な、嫉妬深い男の支配の下にあつたといふ推測を借りて來ると、これら總ての成分から次のやうな假設――或は寧ろ私は幻想といひ度い――が出來上つた。原始遊牧民の父親は無制限の專制君主として凡ゆる婦人を獨占し、競爭者として危險な息子達を殺したり或は放逐したりしてゐた。所が或日この息子達が結束して、彼を、彼等の敵でありそして又彼等の理想でもあつた所の彼を打ち負かし、殺し、そして皆で一緒に食つて了つた。この行爲の後彼等は彼の遺産を相續することが出來なかつた。何故なら彼等はお互ひに邪魔をし合つたからである。この失敗と悔恨との影響で彼等はお互ひに和合することを覺え、かかる行爲の反復を除外すべきトーテミズムの規定によつて兄弟氏族を結成し、そしてその爲に父親を殺した所の婦人の所有は一切

斷念した。彼等は今や餘所の婦人へ向つた。これがトーテミズムと密接な關係のある異族結婚の起原であつた。トーテム餐は、人類の罪惡意識(原罪)が由來する所の、そして又同時に社會統制、宗教及び道德的制限の始まりとなつた所の、あの恐るべき行爲の記念祭であつた。

さてかかる場合を歷史的に許容すると否とに拘らず、宗敎形成はこれによつて父錯綜の地盤の上に置かれ、それを支配してゐる兩頭性の上に建てられたのである。トーテム獸による父親代償が棄てられてからは、恐れられ嫌はれ、又崇拜され羨望された原始父親自身が神の原型となつた息子の反抗とその父憧憬とは常に新たな妥協形成となつて相克した。それによつて一方父殺しの行爲が贖はれ、他方それの利益が主張されなければならなかつたのである。宗敎の解釋は、トーテム餐の儀式を未だ餘り歪めずに聖餐式として生かしてゐるキリスト教の心理學的基礎付けの上に特に明るい光を投げる。この認知は私の獨創ではなく、旣にロバートソン・スミス及びフレーザーにおいて見出される所であることを明言して置きたい。

ライク(Th. Reik)と人種學者のローヘイム(G. Róheim)とが數多くの注意すべき業績において『トーテムとタブー』の考へ方を出發點とし、それを繼續し、深め、或は訂正した。私自身も後になは二三回、神經症的疾患の契機の間でも非常に大なる意義を有する『無意識的罪惡感』の檢討の際と、

社會心理學を個人の心理學とより密接に結び付けようとする努力の際に（「自我と他我」――「集團心理と自我分析」）この問題に立ち歸つてゐる。更に被催眠性の說明にも私は人類の原始遊牧時代からの古い遺產を引き合ひに出した。

最も一般的な興味に値する精神分析のこの他の應用に對する私の直接の關與は極く僅かである。個個の神經症患者の空想から、神話や傳說や童話において現れてゐる民衆や民族の空想創作へ、廣い道が通じてゐる。神話學はオツトー・ランクの研究領域となつた。神話の解釋、それの既知の無意識の小兒時代錯綜への還元、天體的說明の人間的基礎付けによる置換へは、多くの場合彼の分析的努力の成果であつた。象徵的意義（Symbolik）の題目についても私の仲間のなかから多くの研究者を出した。象徵的意義は精神分析に對して多くの敵を作つた。多くの餘りに謹嚴な學者達は、夢の解釋において生じたやうな象徵的意義の承認を決して許すことが出來なかつた。だが分析は象徵的意義の發見において無罪である。それはずつと前から他の領域において知られて居り、そこでは（傳說、口碑、神話、「夢の言葉」に於けるよりももつと大きな役割をさへ演じてゐる。

分析の敎育學への應用に對しては私自身としては何等寄與しなかつた。だが、兒童の性生活と心的發達とに關する分析的發見が、敎育者の注意を引き付け、彼等をしてその任務を新しき光の中に見さ

せたのは當然であつた。教育學のこの方面に於ける孜々として倦まざる闘士としては、新教の牧師で、分析の研究は又昇華されたる宗教心の保有とも衝突しないと考へたチューリヒのO・ピスターが頭角を現した。彼の外にもウイーンの博士フーグ・ヘルムート夫人（Frau Dr. Hug-Hellmuth）及びベルンフェルド博士（Dr. S. Bernfeld）、其他大勢ゐる。健全な兒童の豫防教育のための、及び未だ神經症にはなつてゐないがその發達において脱線してゐる兒童の矯正の爲その分析の應用からは、實際的に重要な結果が得られてゐる。最早精神分析を醫師の手に留保し、素人をそれから除外する事は不可能である。實際特別な訓練を受けてゐない醫師は、その免許狀にも拘らず、分析においては素人であり、非醫者と雖も相當の準備があり、臨機に醫者に頼るならば、神經症の分析療法の任務を果すことが出來るのである。

その結果に對して人は無益に逆ふであらう所の發達によつて、精神分析なる言葉は多くの意味を持つやうになつた。始まりは一定の治療方法の名前であつたが、今はまた一つの科學の、無意識心的なるものの科學の名前ともなつた。この科學はそれ自身だけで一つの問題を完全に解決し得ることは極く稀にしかない。が、それは極めて種々な知識領域へ重要な寄與をなす役目を有してゐるらしい。精神分析の應用範圍は、それが偉大な射程の補充をなした心理學のそれと同樣の廣さに達する。

そこで斷片的なる私の生涯の事業を振り返へりつつ、私は、種々の手始めをなし、多くの提起を與へたが、其處から將來に於て何物かが出て來ねばならないといふ事が出來る。それが多くであるか僅かであるかは私自身も知ることが出來ない。

幻想の未來

昭和七年十月十[illegible]日印刷
昭和七年十月十[illegible]日發行

定價　金壹圓八拾錢

譯著者　木村謹治
　　　　内藤好文

發行者　北原鐵雄
東京市神田區今川小路二ノ一

印刷者　宮下棟太郎
東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九

發行所　東京市神田區今川小路二ノ一
アルス
電話九段（二一七五番　二一七六番）
振替東京二四八八八番

フロイド精神分析大系

3	4	5	6	7
夢判斷（下）	日常生活の異常心理	戀愛生活の心理	快感原則の彼岸	精神分析入門（上）
近刊	定價一・五〇 送料一三	近刊	定價一・五〇 送料一三	定價一・五〇 送料一三
學習院教授 東大講師 新關良三譯	東北帝大教授 醫學博士 丸井清泰譯	醫學士・經濟學士 木村康吉譯	廣島文理大學教授 文學博士 久保良英譯	醫學博士 安田德太郎譯